唐土名勝圖會 京師 三

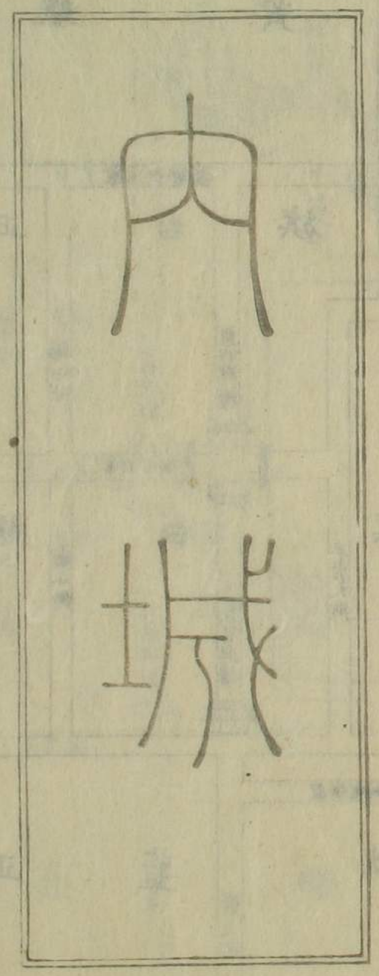
唐土名勝圖會第一集卷之一

目次

內城總圖　目録
八旗　正陽門
正藍旗居址　鑲白旗居址
正白旗居址　鑲黃旗居址
鑲藍旗居址　鑲紅旗居址
正紅旗居址　正黃旗居址

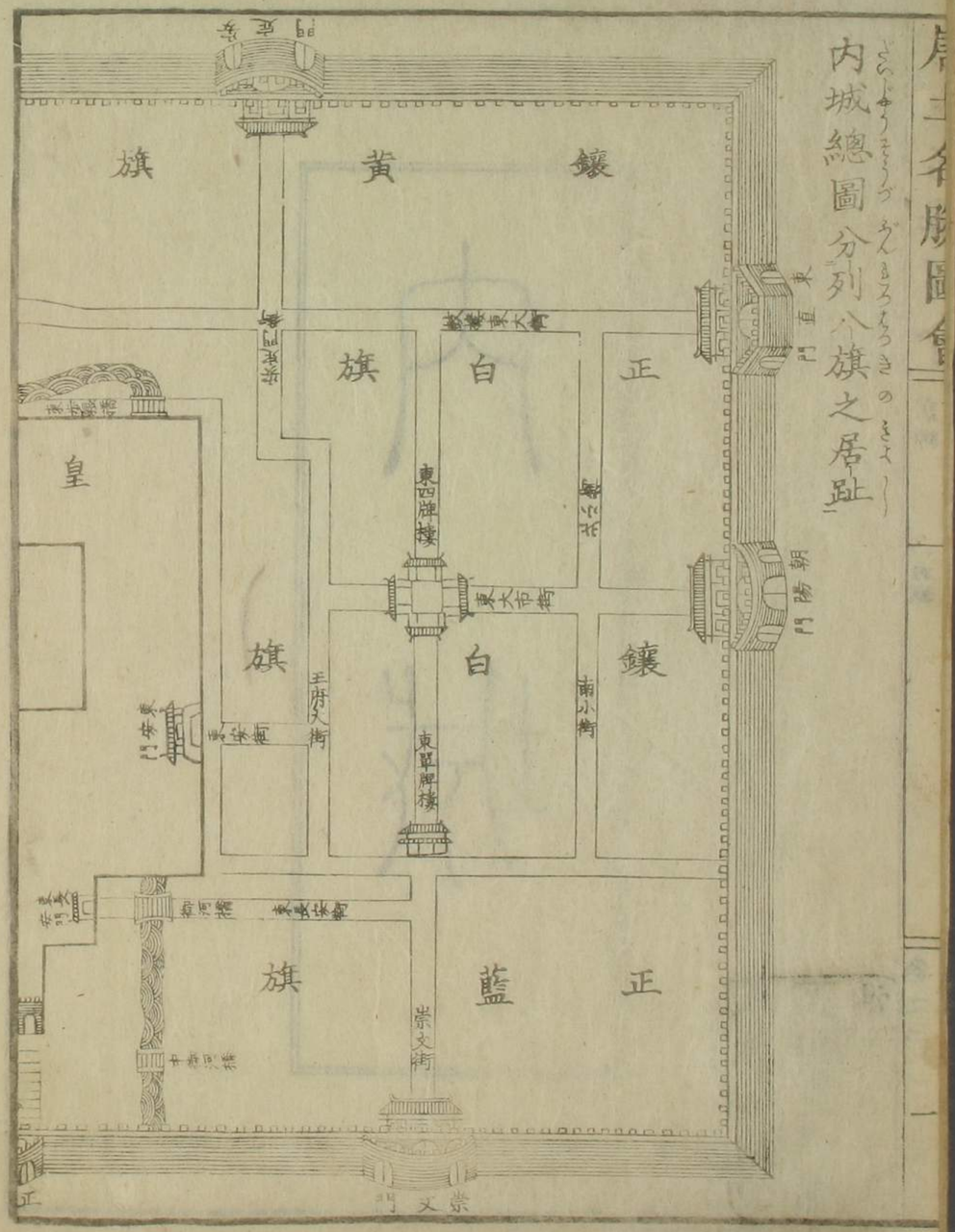
ル 5
987
3

儿 5
卷



水越后高田
油 久 村田屋藤兵衛
竪春日町

內城總圖分列八旗之居址



內城八旗の居址を列ね分ち五城を合て以五城の分列ち既に首巻京師總圖より八旗の居址を此巻中に押しく再び旗毎に圖説して其旗中の屬ところ官署寺院大街河道衢巷廟祠僧觀及び富き民家のあつまり住る市の景緻花の形勢悉く記し一審に圖し一九巻中八旗居址の圖を此總圖に照し見て綉冷ならん事を實に内城の中に隅八方唯掌中に見るべきものなり

内城總圖

八旗

正藍旗居址

正陽門

棋盤街

許公祠

禮部署

鴻臚寺署

應帝館

翰林院署

照忠祠

肅親王府

苦井

呂公堂

觀象臺

宗人府署

藤花廳

楊經略祠

太醫院署

玉河橋

理藩院署

安郡王署

靈藏觀音寺

泡子河

關帝廟

聚奎堂

敷文坊

水鏡堂

兵部署

欽天監署

四夷館

鑾儀衛外駕庫

裕親王府

崇文門

大石橋

華嚴禪林

貢院

吏部署

戶部署

工部署

怡賢親王祠

詹事府署

堂子

右僕寺署

總督倉場公署

慈雲寺

太清宮

正藍旗護軍統領署

鑲白旗居址　會同館　豫親王府　寧郡王府
王府街　椿竿寺　賢良寺　崇真萬壽宮
正藍旗覺羅宗学　燈市　法華寺
鑲白旗宗室都統署　成壽寺　充翼将統領衙門
正白旗宗室都統署　正白旗漢軍都統署　鑲白旗滿洲都統署
正藍旗滿洲宗室漢軍三都統署　東西院　正藍旗官学
二郎廟　雙忠祠　鑲白旗官学
鑲白旗官学　関帝廟　洞馬坊
清泰寺　智化寺　宝慶寺
正白旗官学　證因寺　正白旗覺羅宗学
正白旗居址　順天府儒学　著徳寺
大隆福寺　五嶽菴　正白旗護軍統領署
正白旗覺羅宗学　六倉　正白旗滿洲都統署
朝陽門

鑲黃旗居址　禮樓　萬寧寺　慈善寺
鼓樓　步軍統領衙門　萬寧橋　福祥寺
顯佑宮　圓恩寺　鑲黃旗官学　千佛寺
文昌宮　法通寺　慈隆寺　順天府署
宝泉局西廠　劉猛将軍祠　雲椿坊　鑲黃旗滿洲都統署
宝泉局　鑲黃旗漢軍都統署　安定門　鑲黃旗覺羅宗学
天心堂　鑲黃旗宗室都統署　大興縣署　慈善寺
安定門　開元寺　福祥寺
宝泉局　先師廟　雍和宮　千佛寺
先師廟　文廟　柄坊寺　順天府署
五岳觀　石觀音寺　東直門　鑲黃旗滿洲都統署
鑲黃旗護軍統領署　鑲黃旗宗室都統署
鑲藍旗居址　鑾儀衛署　都察院署
振武坊　白雲樓　太常寺署
刑部署　太理寺署　工部製造庫

通政使司署　辨理回人佐領事務處
西城察院署　中城察院署
南城察院署　石翼宗学
象房　天仙廟
右洋寺　正紅旗官学
鷲峰寺　鑲紅旗漢軍都統署
鑲紅旗護軍統領署　雙恪寺
鑲藍旗官学　顯應觀
鑲紅旗居址　大能仁寺
萬松老人塔　真武廟
石佛寺　右翼炮廠
関帝廟　正紅旗滿洲都統署
壽壽寺　歷代帝王廟
正紅旗官学　河南道署
小城察院署　東城察院署
時憲局　宣武門
承恩律寺　鑲紅旗官学
鑲紅旗滿洲蒙古漢軍三都統署　鑲黃旗覺羅宗学
園通禪林　鑲藍旗滿洲都統署
鑲藍旗漢軍都統署　鑲藍旗蒙古都統署
壽恩寺　石翼税署

納檀寺　関帝廟
白塔寺　正紅旗覺羅宗学
正紅旗居址　正黃旗官学
朝天宮　阜成門
十方禪院　宝禪寺
火德真君廟　柳巷
正黃旗居址　崇國寺
大覺寺　聖祚隆長寺
藥王廟　火神廟
雄黃洞　漢壽亭侯廟
廣化寺　宛平縣署
玉皇廟　龍華寺
千佛寺　小藥王廟
正黃旗蒙古都統署　華嚴禪寺
三旗參領署　積水潭
賢良祠　半藏寺
湧泉橋　銀錠橋
心華禪寺　十刹寺
雙寺　妙緣觀
德勝門　德勝橋
水関　觀音菴

編述　法橋　岡田玉山尚友
全　岡　熊岳文暉
畫　大原東野民聲

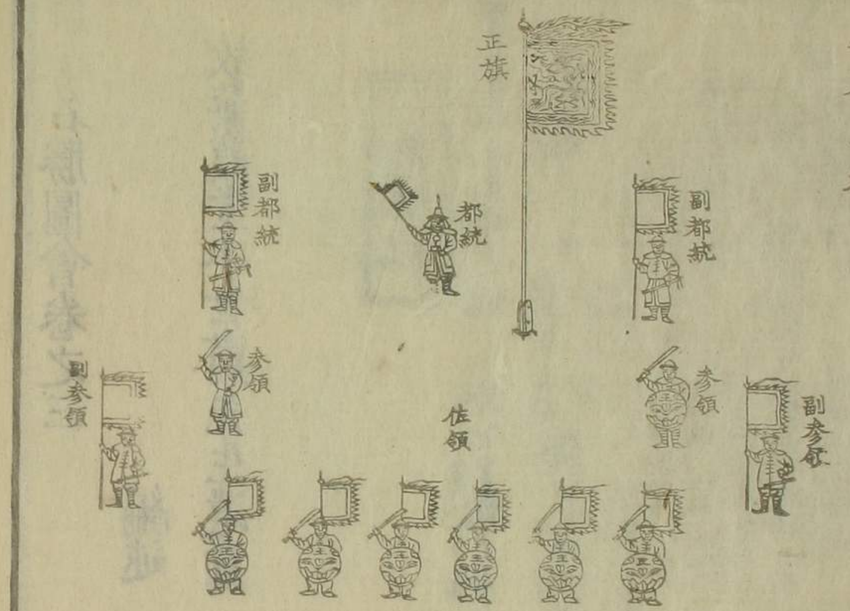
故兼葭堂木世肅先生遺意

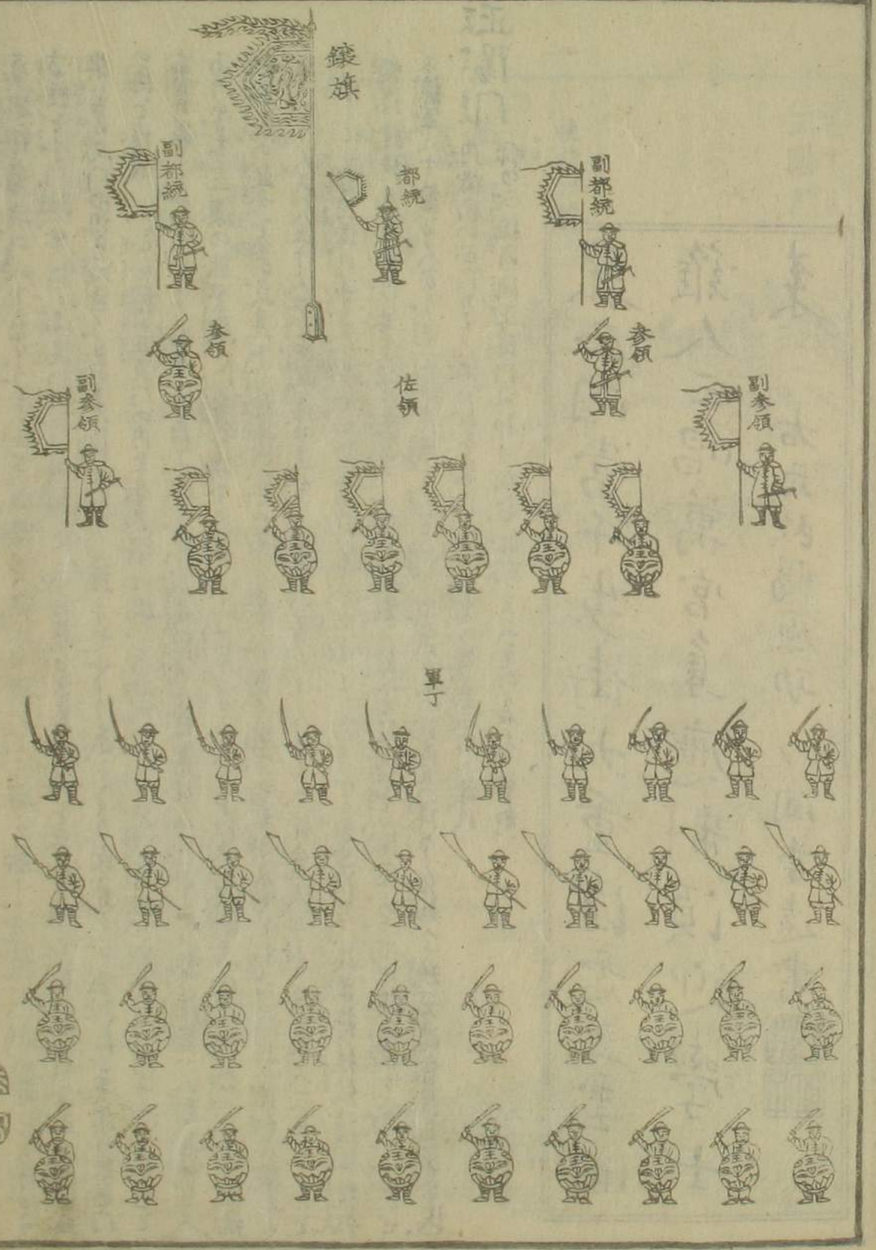
○内城

紫禁城を大内と稱し、外を皇城と呼く。皇城を包める曲輪を即内城と稱し、又皇城ともいふ。周圍凡十里高三丈六尺ゑす。南より三の門あり。東西の三方に各二門あり。凡そ九門ゑん。中南を正陽門といふ。凡そ皇門の二あり。○京師の街を制をるに南北を経とし、東西を緯とし、東直門あり。西皇城門西直門あり。直門あり。此の徳勝門安定門是也。其大街と稱するもの廣さ二十尺歩小街と稱するもの闊十二歩なり。大抵三百余尺街通二十九あり。○京師の人巷といはで衙術といふ。是京師の方言なり。今其實畫を將て胡同と俗ゑり。巷中悉く八旗滿洲八旗蒙古八旗漢軍

古平巷　龍王廟
淨業寺　金剛寺
廣濟寺　崇元觀
正黃旗覺羅宗學　永泰寺　正黃旗護軍統領署　正黃旗漢軍都統署
萬寧寺　萬佛寺　崇壽寺
西直門

八旗軍粧之圖



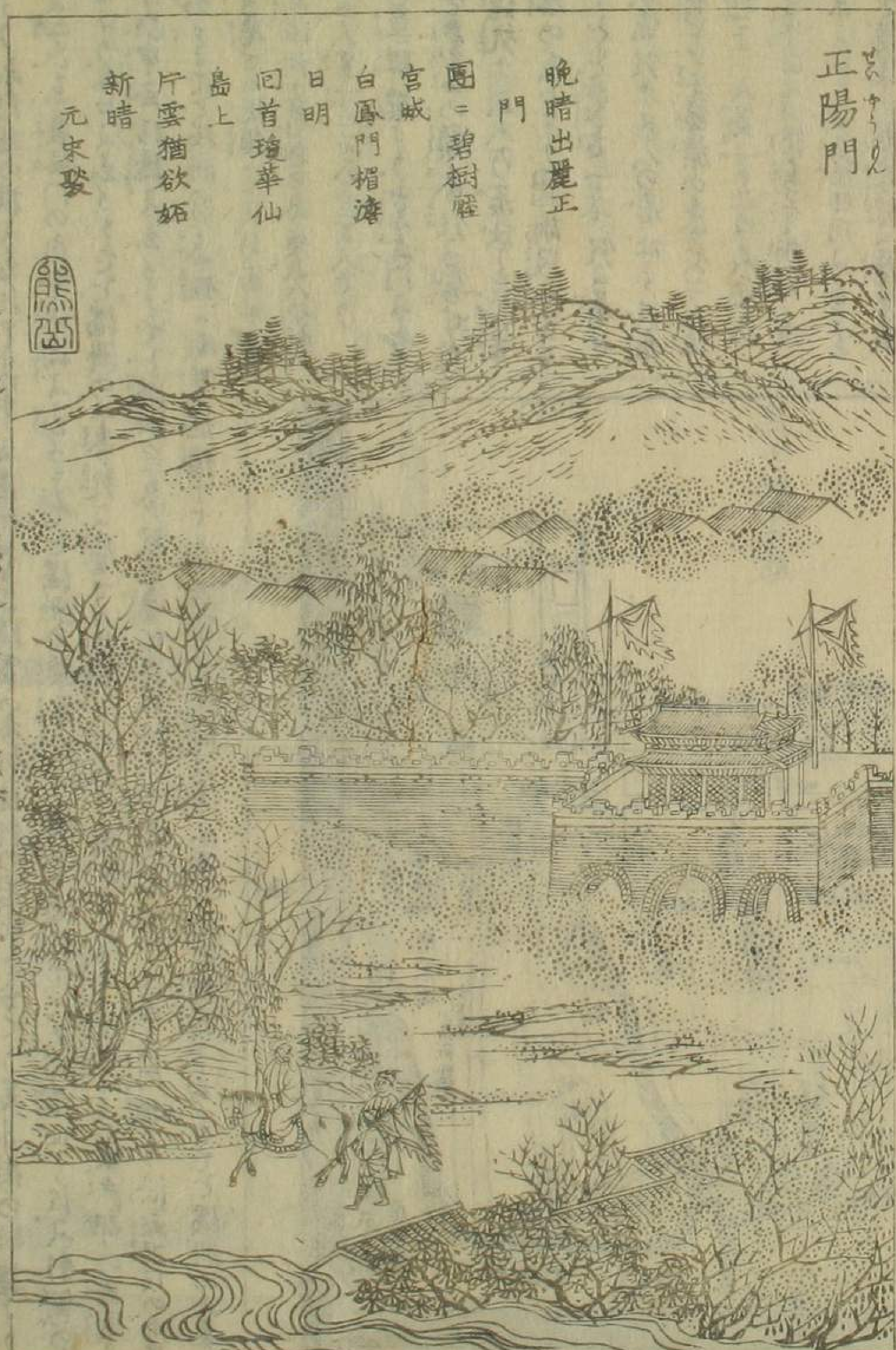


八旗あり是を合せて二十四旗とす。所謂八旗とは正黄旗・鑲黄旗・正白旗・鑲白旗・正紅旗・鑲紅旗・正藍旗・鑲藍旗の八をいふなり。其の正黄旗・鑲黄旗・正白旗を上三旗と称し、其餘を下五旗といふ。これを又方位と分つ。鑲黄旗は安定門の内を護衛とし、正白旗は東直門の内を守る。鑲白旗は朝陽門の内に在り。正藍旗は崇文門の内に居まり。是を左翼の軍と称して北より東、東より南に至りて設列す。正黄旗は徳勝門の内を護衛とし、正紅旗は西直門の内を守る。鑲紅旗は阜成門の内に在り。鑲藍旗は宣武門の内に居りて是を右翼の軍と名付けて北より西、西より南に連り、皆宸居の四囲を環衛す。凡て旗毎に都統一人、副都統二人ありて是を一旗の旗頭とし、専ら旗下の軍人を治め掌る。是が下に参領・副参領の職有り。又都統副都統の政令をうけて又其下に司る佐領の職に通じ遂して悉く旗下の軍丁に令を給す。満洲旗の佐領は旗毎に或は七十人又は八九十人、蒙古漢軍の佐領は二十餘人より四十人に至り、佐領一人の令せる軍人は二百人ごと一隊とし、各内城の中其旗毎の下に居址を分ち揃しく安居を保護せり。又前鋒統領・護軍統領・驍騎・護衛・弓匠・鐵匠・鞍匠等の職あり、悉く旗毎に隷ふ。凡満洲・蒙古・漢軍の二十四旗、両京十八省に配せる總軍八十餘万人なり。皆其地其職によりて泥して家をなし、尚其の詳なる事は清の會典に委しく見えたり。

正陽門

内城南の正門なり。俗これを前門と呼ぶ。元の時麗正門と称す。明の正統の頃正陽門と改めたり。清朝もまたその名を用ゆ。

麗正門當千歩街
九重深處五雲開
雞人三唱萬宮集
應制須迎學士來
右元欧陽原功
間重遠書



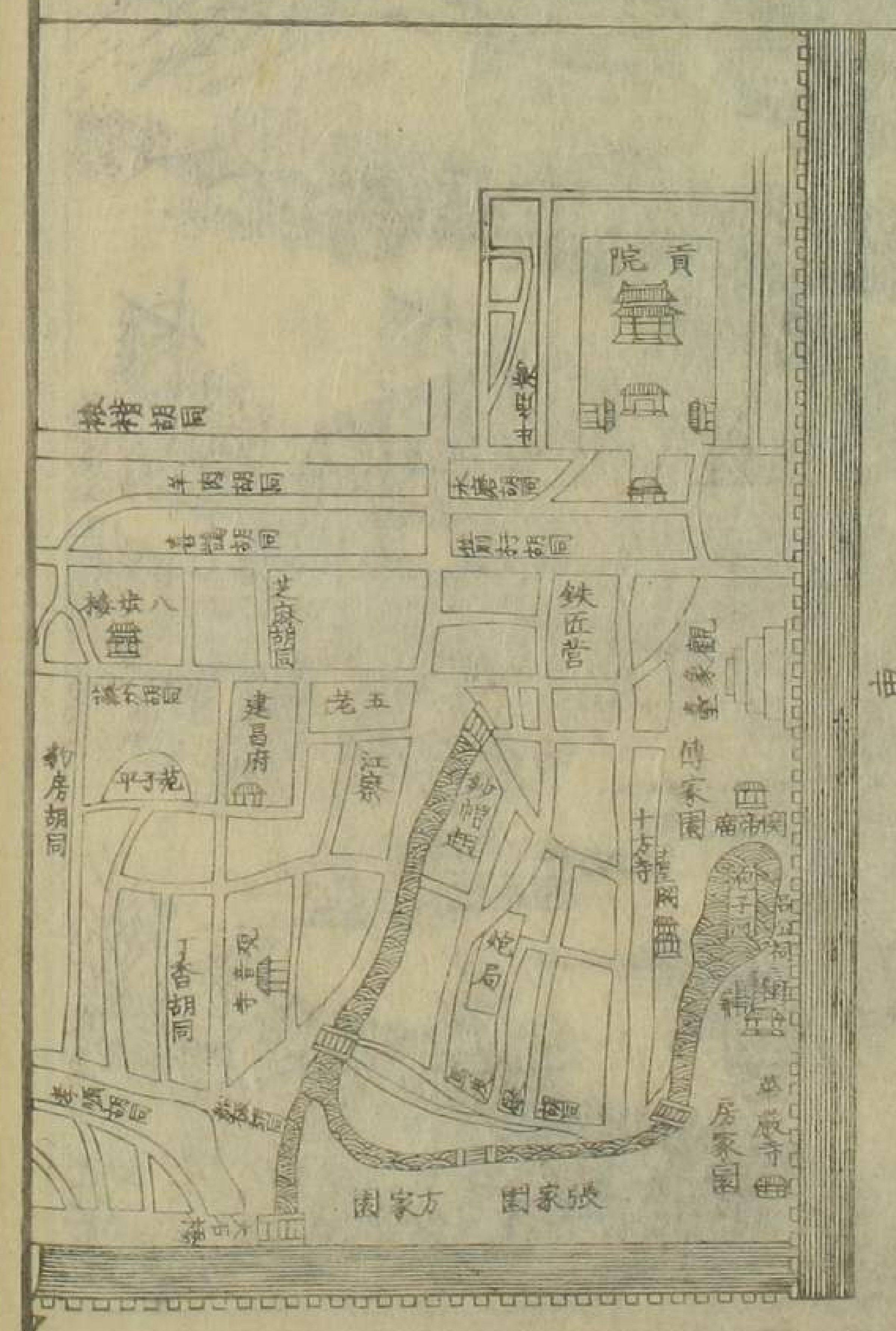
明の崇禎十七年、李自成乱を起して北京を陥入る。刑部右侍郎孟兆祥この正陽門をまもりて節を失はずして門の下に死せり。清朝其の忠死をあはれみ諡を忠貞とす。子章の進士章明が妻乃何氏・妾王氏等も難に逢ひく、悉く縊して節を全うせり。

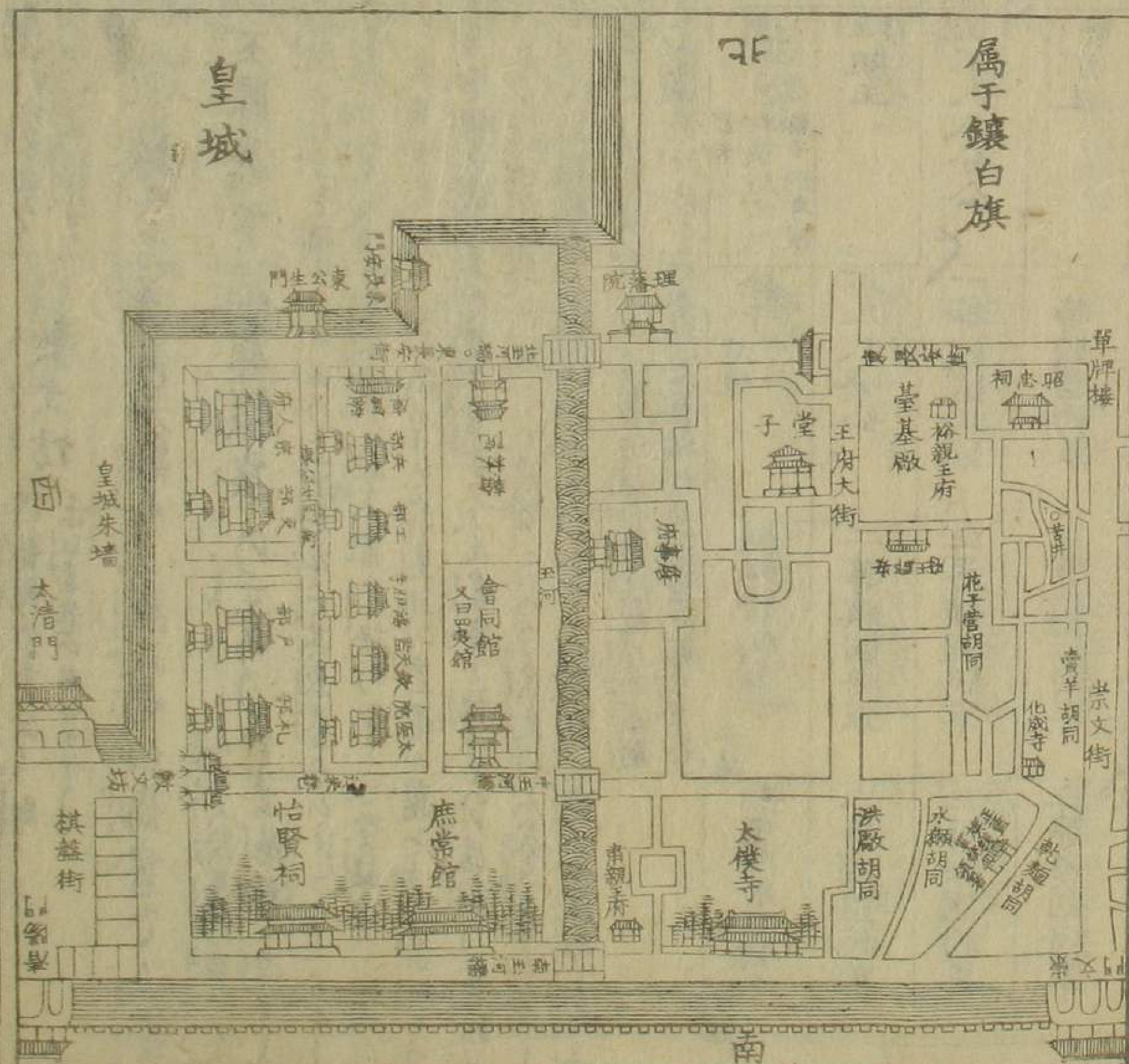
正藍旗居址之圖

○滿州蒙古漢軍の三正藍旗ハ北讓白旗と界を接し其界ハ單牌樓より崇文門にいたり金水橋より東内城の根にいたる其中に滿洲蒙古漢軍の參領佐領の居址を分てり長安街の牌樓より西に向ひ東長安門の内金水橋にいたるまでを滿洲の頭參領に屬せる佐領十六人の居址とし又新街の南口より西口にいたるまでを滿洲の二參領に屬せる佐領十七人の居址とし宗人府より南戸部の園圃に向ひ中玉河橋にいたるまでを滿洲の三參領に屬せる佐領十七人の居址とし中玉河橋より泡厰胡同の北口にいたるまでを滿洲の四參領に屬せる佐領十七人の居址とし缺胡同より小長安街の牌樓にいたるまでを滿洲の五參領に屬せる佐領十七人の居址とし凡滿洲正藍旗の參領五人佐領八十四人軍丁二万五千二百人なり

○單牌樓より崇文門にいたるを蒙古の頭參領に屬せる佐領十五人の居址とし江米巷の東口より缺胡同にいたるまでを蒙古の二參領に屬せる佐領十五人の居址とし凡蒙古正藍旗の參領二人佐領三十人軍丁九千人なり

○單牌樓銀錢局胡同より東の河沿揚照門にいたるまでを漢軍の頭參領に屬せり佐領六人の居址とし羊肉胡同より東水磨胡同にいたるまでを漢軍の二參領に屬せる佐領七人の居址とし椿樹胡同の西口より東口にいたるまでを漢軍の三參領に屬せる佐領八人の居址とし蘇州胡同の西口より東馬匹廠の北口にいたるまでを漢軍の四參領に屬せる佐領六人の居址とし船廠胡同の西口より東馬匹廠の南にいたるまでを漢軍の五參領に屬せる佐領六人の居址とし凡漢軍の參領五人佐領三十三人軍丁九千人なりすべて正藍旗の三軍合て四万三千二百人崇文門の内の護衛とせり





○棋盤街　正陽門の内大清門の前にあり。
○數文坊　棋盤街のあたりより
東西南北の巷に流れ出づ。

宗人府署　國の宗支清門の統領する
所にて、親王郡王の子孫を
あつめ、敦睦の道を教ふ。

この後に明代の石碑二玉牒庫　黄瑠璃瓦葺
殿宇を玉牒を收めおく所にて、照磨の次官を
教令と布政司の官一人あり。皆宗族の中より
此職に居る。又理事官副理官
次官、筆帖式を置く。
祖宗實録を考へ撰する
覺羅の人の紅帶を
覺羅の人の封爵を
奉恩將軍を
閑散宗室

欽定封爵表

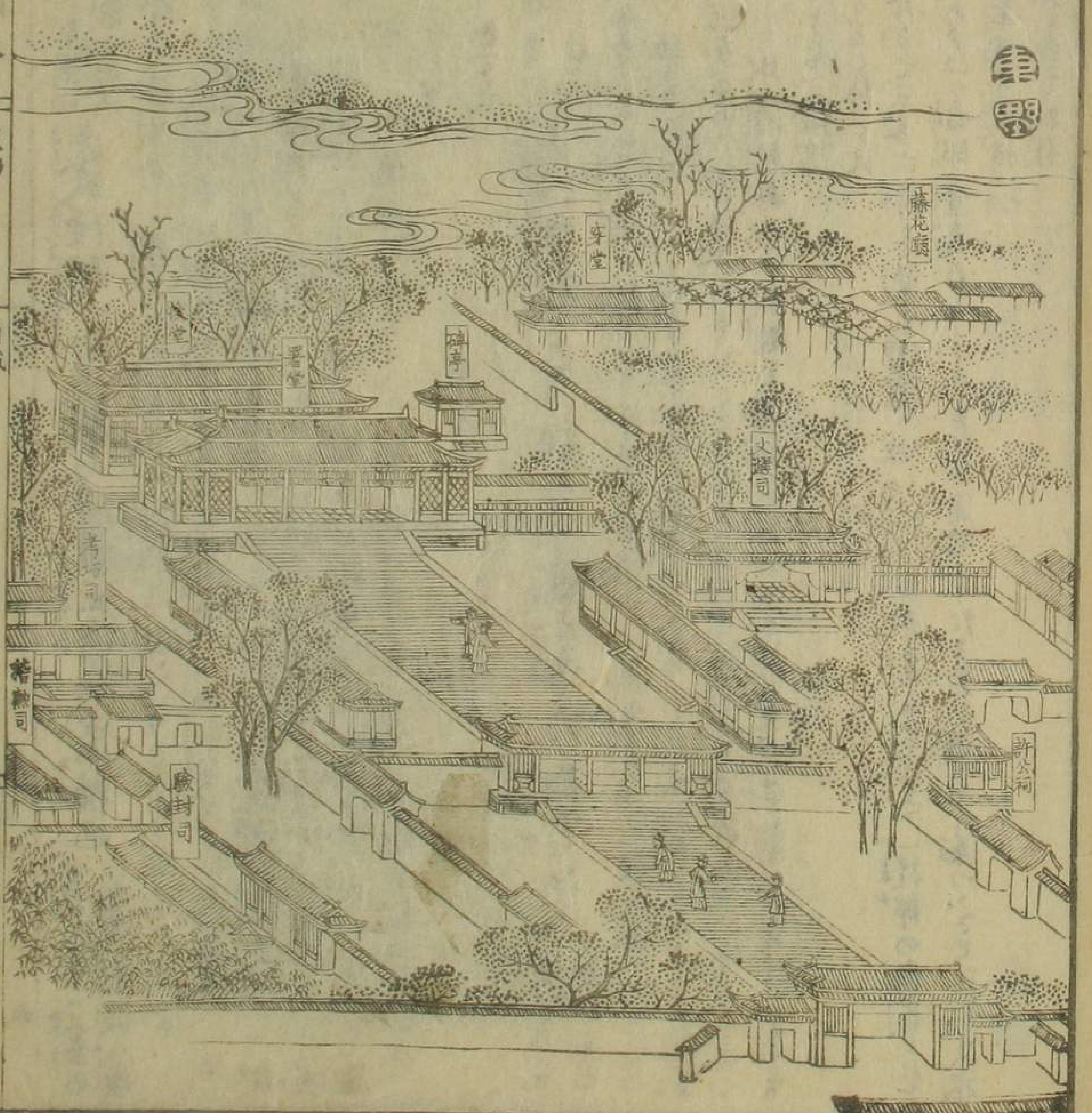
親王	世子 親王適子若未恩封襲封照餘子例考授不入八分公	適子 若未恩封襲封均照餘子例考授	餘子 考授	長子 郡王適子若未恩封襲封照餘子例考授一等鎮國將軍
仍襲親王	不入八分公	仍襲郡王	側福晉側室子 考授	貝勒
不入八分公	一等鎮國將軍	降襲貝子	別室所居妾勝子 考授	貝子
一等鎮國將軍	三等鎮國將軍	降襲鎮國公	三等鎮國將軍	鎮國公
三等鎮國將軍	三等輔國將軍	降襲輔國公	三等輔國將軍	輔國公
三等輔國將軍	三等奉國將軍	降襲奉恩將軍	三等奉國將軍	奉恩將軍

吏部署

藤花廳之詩

手種朱藤已七年
長條綠架毎相纏
只看葉密清陰覆
忽報花多紫粉懸
風下掉頭嫌一老
雨餘舒眼聘三賢
從今堆字詩還和
寫入當時草木篇

呉寬作 鳴門録



清朝國號を立るの天下ゟ世祖皇帝の天命年間に八の和碩貝勒を立て國政を紛しむ此後ら朝會燕饗の節にも他の宗室とは其礼を異にして天子もみちやくしくあつかひ給へるき職なりとそのちこと一般八分とはつけり其後太宗の天聰年間宗室の内に特恩の封ありそれ親王の餘子の封ありを授る者阿哥と名るこれを不入八分といふ○凡皇女の中宮より出給ふハ固倫公主に封ぜらる妃嬪より出る皇女ハ和碩公主に封ず親王の御女ハ郡主に封し郡王の息女ハ縣主に封ぜらる貝勒の女ハ郡君に封し貝子の女ハ縣君に封じ入八分の鎮國公輔國公の女を郷君に封ぜらる○親王世子郡王の妻の封号を福晉といふ妾を稱へて側福晉といふ貝勒の妻より以下鎮國將軍の妻にいたりて夫人と稱し奉國將軍の妻を淑人といふ奉恩將軍の妻を恭人といふ○親王には側福晉四人あり世子と郡王には側福晉三人あり貝勒の妻を側室といふ二人あり貝子は側室一人なり。

吏部署

宗人府の南にありて西にむかふ 雍正帝御書の額あり公正持衡といふ後堂に明代の石碑二あり

尚書官滿人漢人各一人左右の侍郎滿人漢人各一人あり即吏部の總官として普く官職の銓叙黜陟の政を掌り郡を治むるの吏をえらむ屬する所の四司あり文選清吏司考功清吏司稽勳清吏司驗封清吏司等なり文選司は班秩の遷除を掌る稽勳司は法を平らかにし考功司は考課を論勤し功過を旌別するを掌る稽勳司は名と籍とをとゝのへ喪を終養服制のことを司る驗封司は封爵の襲蔭土司の嗣職をつかさどる

○明の只い室とふへる者はづくり植し藤花今穿堂の右にありて其下に三楹の屋を建て藤花廳といふ即吏部長官の治る所なり。

○許公祠

吏部署文選司にあり○許公は文選の主事考功の郎中たり名を直といふ家を君臣とし崇禎甲申明の都城落の自縊がために論せらる許直廟せし詩を録して自縊る清朝その忠烈を表して謚を忠節と賜ふ

○水鏡堂

今南大房といふ明の劉莘長洲の陳公が建る所なり。

戸部署

廨の東吏部署の南にあり西に向ふ 九式經邦といふ額あり雍正帝の宸翰也。署の東北に大庫あり ○尚書官滿人漢人各一人これを戸部の總官とし天下の田戸口財穀の政をつかさどり出納を平準して以て邦統をひとしくし又山东清吏司山西清吏司河南河北江西江南等其外江蘇江寧蘇州安徽福建浙江湖廣陝西四川廣东廣西雲南貴州等に各清吏司の官滿人漢人各数人ありて其國〻の布政使司があぐるところの錢糧收支の奏冊をつかさどり兼ては堆織祠祭術布織造の支銷奏冊とあきらめ正し銀庫段疋庫等の出納を節制し南北の漕糧京通の倉庫を隷して歳稅をひとしくし軍餉を給ふ凡織糧の出納夏稅の收支悉く滿人漢人並び位して天下國家の大本を贊けしむ。

禮部署

廨の東戸部署の南にあり西に向ふ 寅清贊化といふ額あり雍正帝の御書なり。署の左に鑄印局也
右には韓愈の祠あり又視日候の刻石は寅清堂の前にあり ○尚書官滿人漢人各一人左右の侍郎各二人禮部の總官として凡吉嘉軍賓凶の五禮を掌る屬とする所儀制清吏司ありて嘉禮軍禮を司る又祠祭清吏司あり吉禮凶禮をつかさどる又主客清吏司ありて賓禮を掌り通じて外國の言語を通じ外藩朝鮮等の朝覲と接對し精膳清吏司は五禮燕御食其牲牷を掌る
以上に司皆禮部に屬す又鑄印局は寶印を鑄造ることを司る。

樂部

典樂の官ありて五聲六律を掌り陰陽の聲を和し典樂官に定員なし禮部の尚書これを兼掌るあるひは各部堂官の中より音律通曉したる者を選び兼つかさどらしむ又神樂署和聲署あり掌儀司の屬を御しこれに隷して典禮の樂を執行す

冠服

皇帝皇后及び宗室の冠服は禮部の儀制清吏司これを掌る主飾と云ふて満用す

皇帝冬朝冠

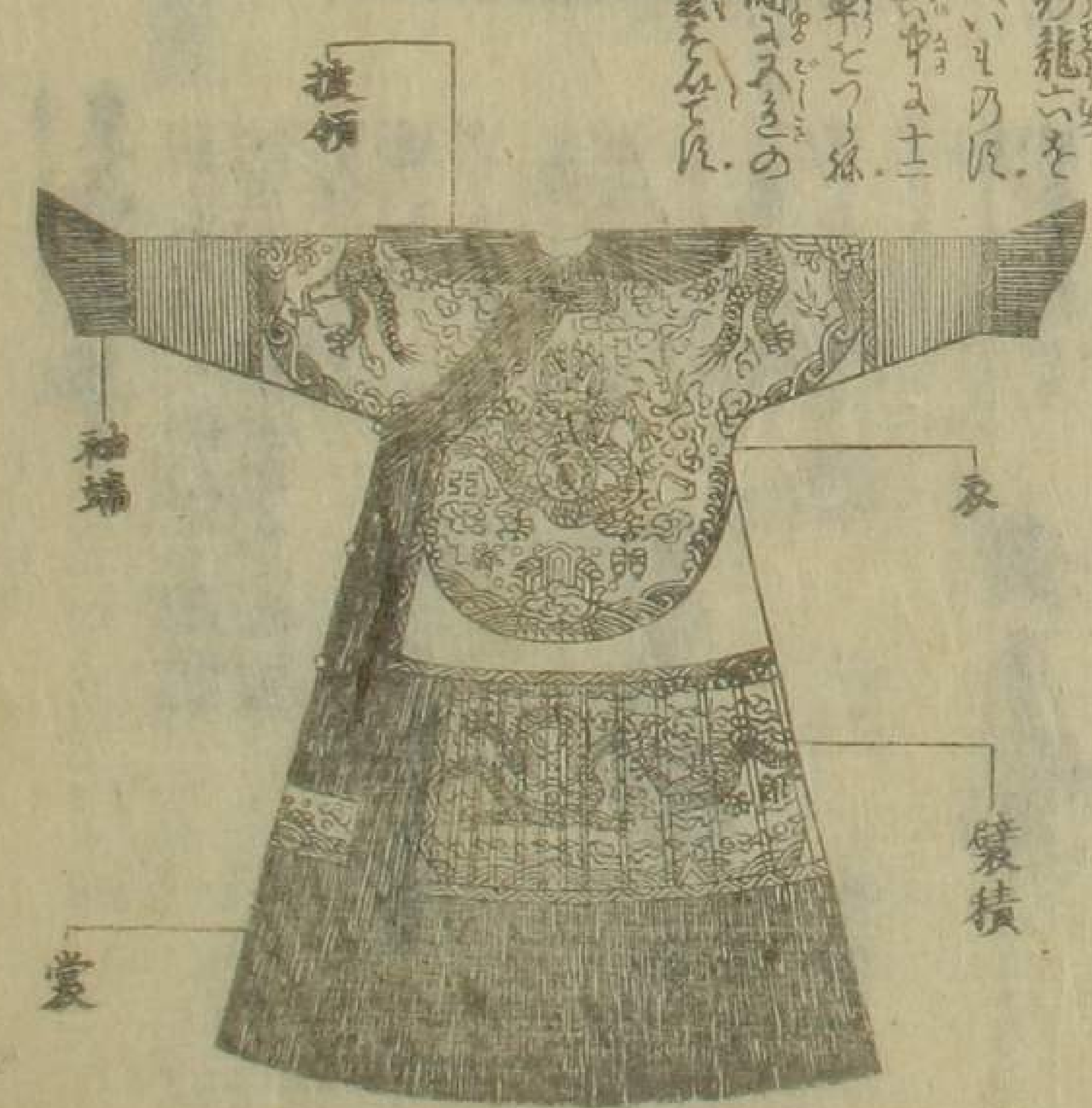
九月十五日或は二十五日より皇帝冬朝冠を御し緞或は薰貂をもてこれを爲る。冬至上元には黒狐を用ゆ朱緯を上に綴り頂は三層にて各東珠を貫く。金龍にてなせり。

皇帝夏朝冠

三月十五日或は二十五日より夏朝冠を御し給ふ。紗羅あるひは藤絲竹絲にて織るこれを造る綴は石青片金二層紅片金又は紅紗をもて裏とす凡上に朱緯を綴り前に金佛あり東珠十五を飾る後に舎林を綴り東珠七を飾る凡頂の制冬朝冠と同じ。

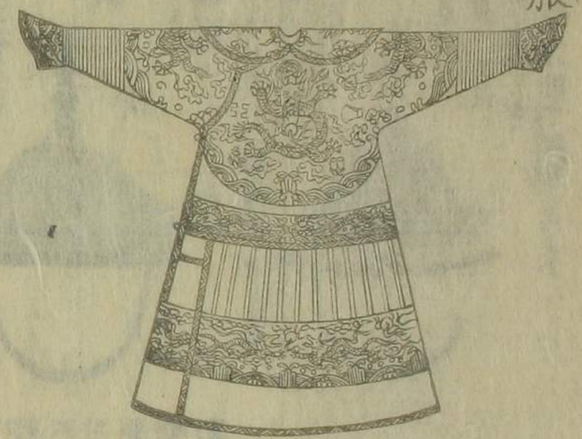
皇帝冬朝服

十一月朔より上元の日まで冬朝服を御し緞及び黃明黃を用ゆ披領と裳とは紫貂を付け袖の端は薰貂にてつくる衣肩と前後に正面の龍各一を繡し襞積に行龍六をぬいものし其中に十二章とつらね間に五色の雲をなせり。



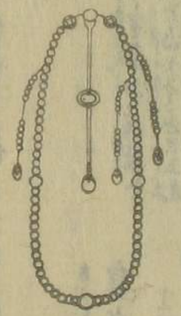
皇帝夏朝服

三月十八日より其服を用ゐ九月十八日より冬朝服を用ゐ其間四時の節に隨ひ其服の制を改む。紗羅單袍其袖のひろきこと數尺餘の朝服の制のごとし。



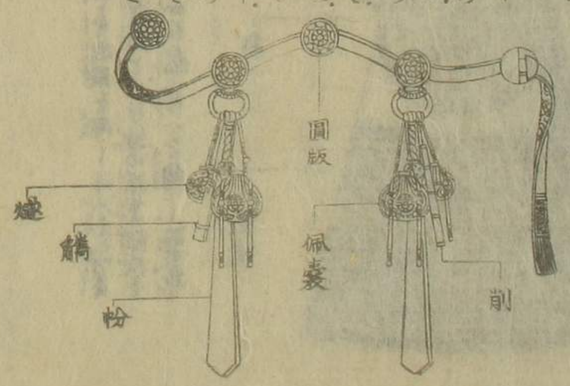
皇帝朝珠

赤珠百有八顆にて之を連ね大典禮に當り冠帶ともに用ゐ餘の朝服の制のごとし。



皇帝朝帶

色は其時の服色のごとく圓版に紅寶石及び佩石を飾り其他皆朱珠を飾りて之を繫ぐ。



皇后冬朝冠

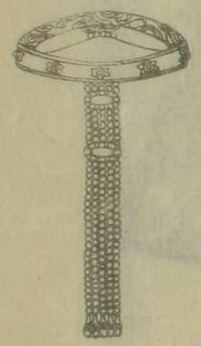
裏紅にて用ひ制其上に紫緯を繞らし頂に三層ありて赤珠各一を安き其間に小金鳳を立て上に赤珠各十七を綴りて之を承け上は又赤珠一を以て之を飾る。

皇后夏朝冠

紗羅にて用ひ制其上に紫緯を繞らし頂に三層ありて赤珠各一を安き其間に小金鳳を立て上に赤珠各十七を綴りて之を承け上は又赤珠一を以て之を飾る。

皇后金約

朝服のために制し紫羅にて之を爲り金十三を鏤め赤珠三を貫き左右に垂絛を繫ぐ。



皇后耳飾

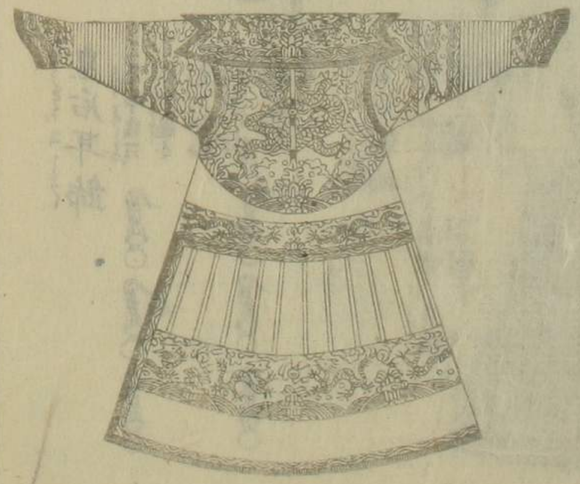
左右各三。

皇后朝褂

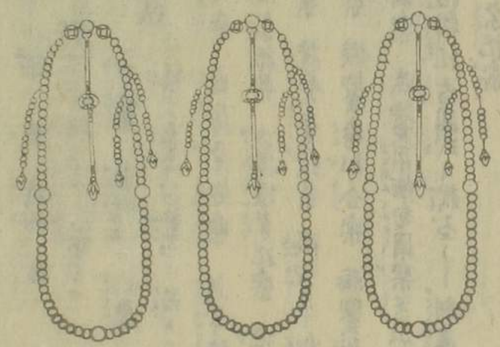
色は石青片金緣にて左右各二と繡ひ下に八層の襴襞あり。

龍文と蝙蝠壽字の文とを互に相間て前後に用ひ其餘は皇后の朝褂に同じ。

色の羽黄を用ひ袖口と裙の縁とに石青庁金貂皮の縁を加へ裙後に金龍九を補ふ。その雲と真同じ。中に蝙蝠【こうもり】下に八宝平水のごとし。外套は約龍二袖の端に小龍をのこ〳〵一袖と衣裙の各二に左右各約龍三ツ袖口の端に明黄の襴を用て飾とす。

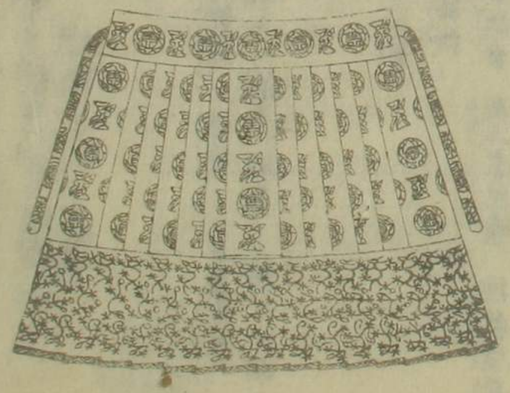


色の明黄【めいくわう】領の庁金【ちやうきん】ありて襞積【ひだ】あり。袖口裏裕【ゆたか】そのごとく其外【そのほか】は冬朝服【とうてうふく】の制【せい】のごとし。



皇后朝珠の分【わけ】朝珠三と雖【いへ】ども一百八顆【くわ】二百七顆の分【わけ】朝珠一と即【すなは】ち一百八顆【くわ】二百七顆【くわ】石青【せきせい】ところどころ珊瑚【さんご】ところどころ金【きん】にて造【つくり】て金【きん】の結【むすび】し制【せい】皇帝朝珠【てうじゅ】と同【おなじ】。

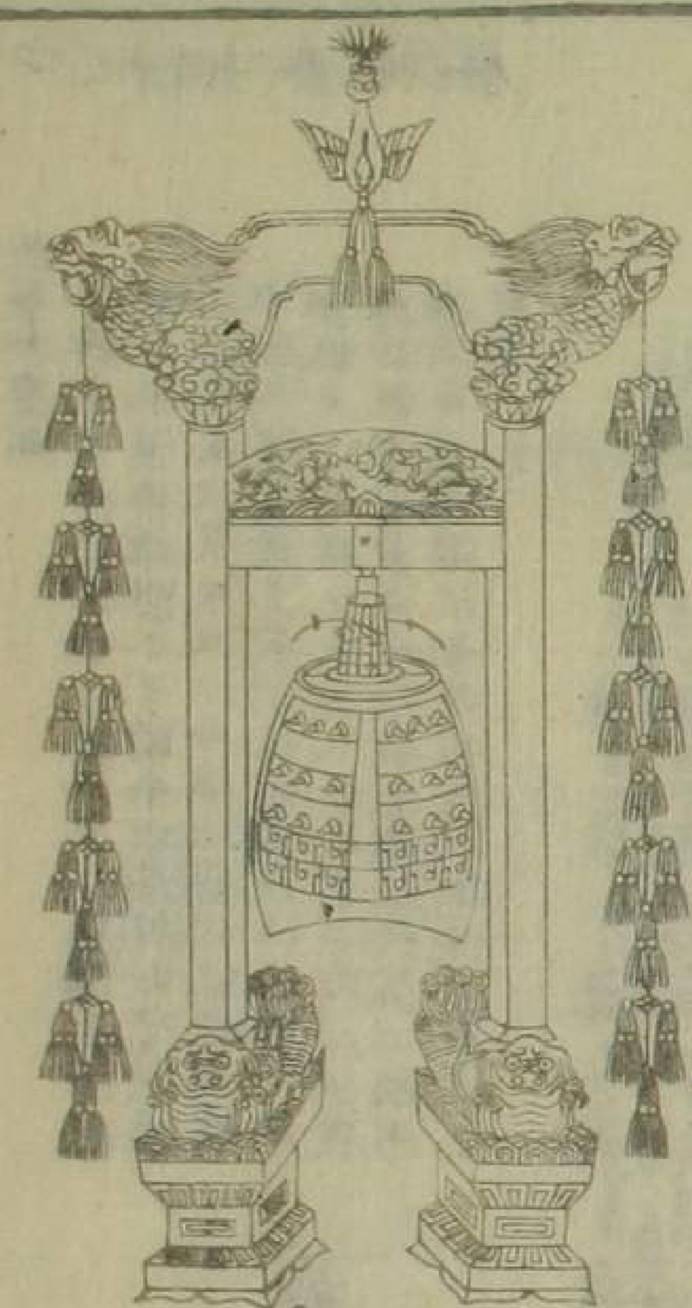
朝服【てうふく】の掛【かけ】帨【おび】後【うしろ】に垂【たれ】五彩【さい】を雲【くも】の図【づ】に繍【ぬひ】たるのみ。



皇后の朝裙【てうくん】片金【かたきん】と海龍【かいりう】縁【ふち】上【うへ】の金襴【きんらん】との紅緞【こうどん】を用【もち】ひ下【した】の色【いろ】紗羅【しやら】の裙緞【くんどん】を用【もち】ひ。前【まへ】後【うしろ】に襞積【ひだ】あり。裏【うら】の朝裙【てうくん】片金【かたきん】と緞【どん】とを用【もち】ひ。その制【せい】朝裙【てうくん】と同【おなじ】。

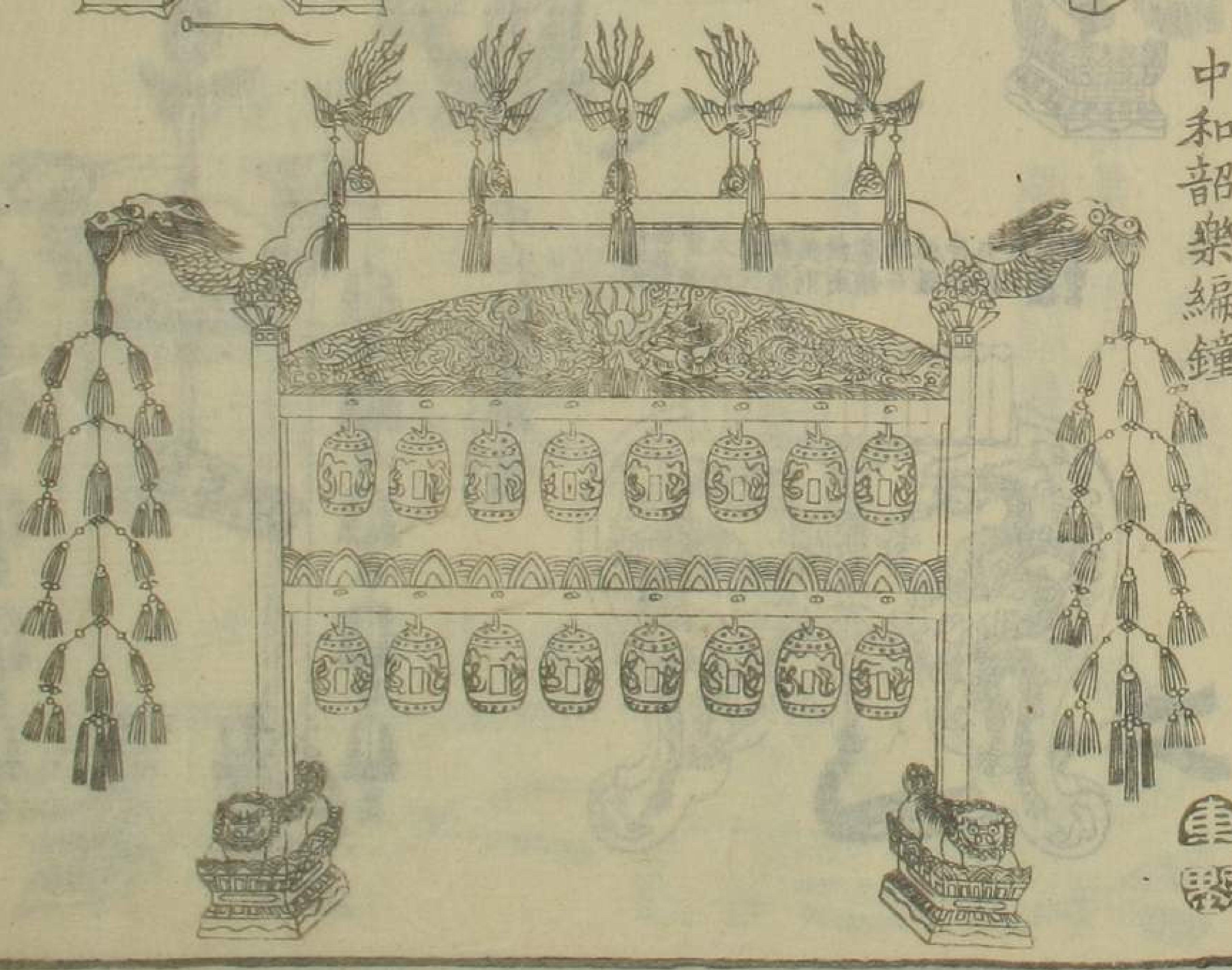
中和韶樂麾

中和韶樂鎛鐘



御製鑄鐘銘
自古在昔功成作樂辨物涓吉鑄此鐘鎛　皇祖聖
音中和大備詎独是遺或存深意鐘底西旅瑞出西
江考制參器協和万邦一虡特縣用起律首綸鐘鎛
奏簫韶成九寘橫桼舞必考必精慎遵　前憲敦哀
殖增宣陽導陰立均出度万事本根百王矩矱繫余
小子纂業　重熙類　天者定惟曰際時範器識年
惪新已盛銘無溢辭懋乾懋敬

中和韶樂編鐘



樂器

○朝會中和韶樂 ○麾一 ○鎛鐘十二 ○編鐘十六 ○特磬十二 ○編磬十六 ○琴四 ○瑟二 ○排簫二 ○簫四 ○笛八 ○篪二 ○笙八 ○壎二 ○鼓一 ○搏拊二 ○柷一 ○敔一

○朝會丹陛大樂 ○戲竹二 ○方響二十 ○雲鑼二 ○管四 ○簫二 ○笛四 ○笙四 ○大鼓二 ○杖鼓一 ○拍版二

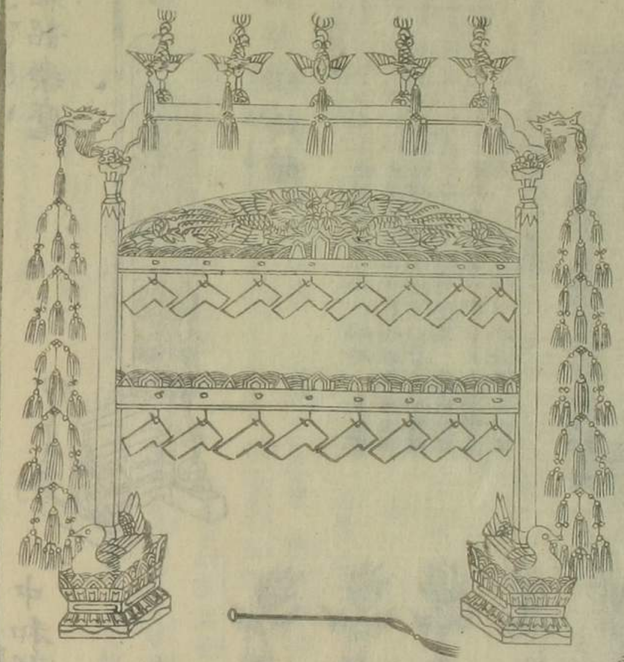
○太廟奉先殿朝日壇太歳壇等祭祀樂 ○麾一 ○太簇鎛鐘一 ○編鐘十六 ○太簇特磬一 ○編磬十六 ○琴十 ○瑟四 ○排簫二 ○簫十 ○笛十 ○篪六 ○笙十 ○壎二 ○鼓一 ○搏拊二 ○柷一 ○敔一 ○節四 ○干六十四 ○羽六十四 ○籥六十四

○凱旋凱歌樂 ○方響二 ○雲鑼四 ○銅點一 ○正鈸二 ○大和鈸二 ○星二 ○鐃二 ○管十二 ○簫四 ○笛四 ○笙四 ○杖鼓二 ○拍板二

鹵簿鼓吹大樂　鹵簿導迎樂　巡幸鐃吹樂　祭祀中和韶樂　圜丘祭祀樂　祈穀壇祭祀樂　天神壇祭祀樂　方澤壇祭祀樂　地祇壇祭祀樂　夕月壇祭祀樂　先農壇祭祀樂　先蠶壇祭祀樂　採桑祭歌樂　燕饗中和韶樂　燕饗丹陛大樂　燕饗清樂　燕饗廓爾喀部樂　燕饗笳吹樂　燕饗番部合樂　燕饗朝鮮國俳樂　燕饗瓦爾喀部樂　燕饗回部樂　燕饗用安南國樂　燕饗用緬甸國樂等以上の樂器ごとく是まりといへども事繁きをもつて此よりし清朝礼器圖式に載る〜制度を俟て就て見べきなり此に載る者は朝會中和韶樂丹陛大樂太廟祭祀樂凱歌樂のことを抄し圖ス

中和韶樂特磬

中和韶樂編磬

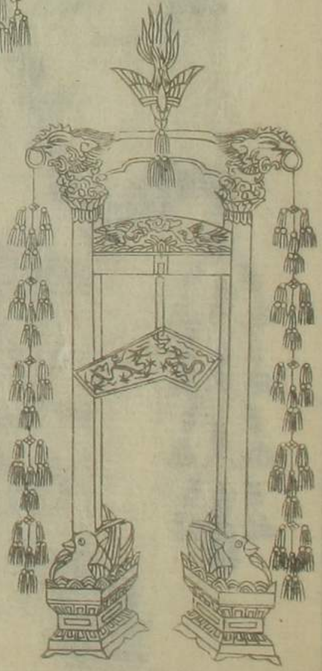


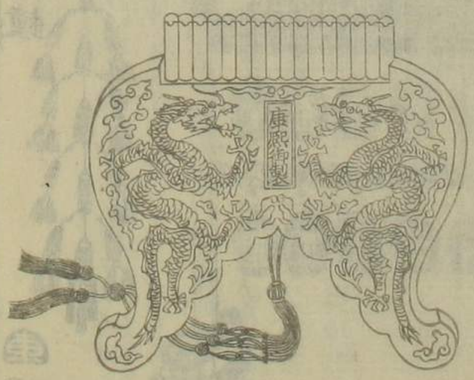
御製特磬銘

子輿有言金声玉振一奏無双九成遞進准今酌古既製特鎛磬不可闕條理始終和聞我躍王山是裒攸度採取以命磬叔審音協律咸備中和泗濱同拊其聲則遍圖經所傳浮音涇水誰識見之鳴球九此法天則地股二鼓三依我禪如獸舞雲聚考樂惟時乾惕祖德翼々繩武撫是萬国益凜保泰敢或伐功敬識歲吉辛巳

乾隆

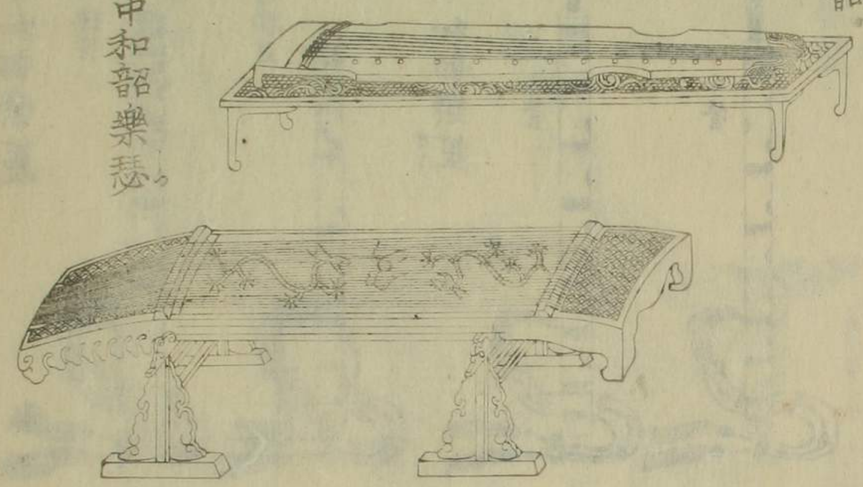
中和韶樂排簫





中和韶樂琴

中和韶樂瑟



中和韶樂笛

姑洗笛用陽月

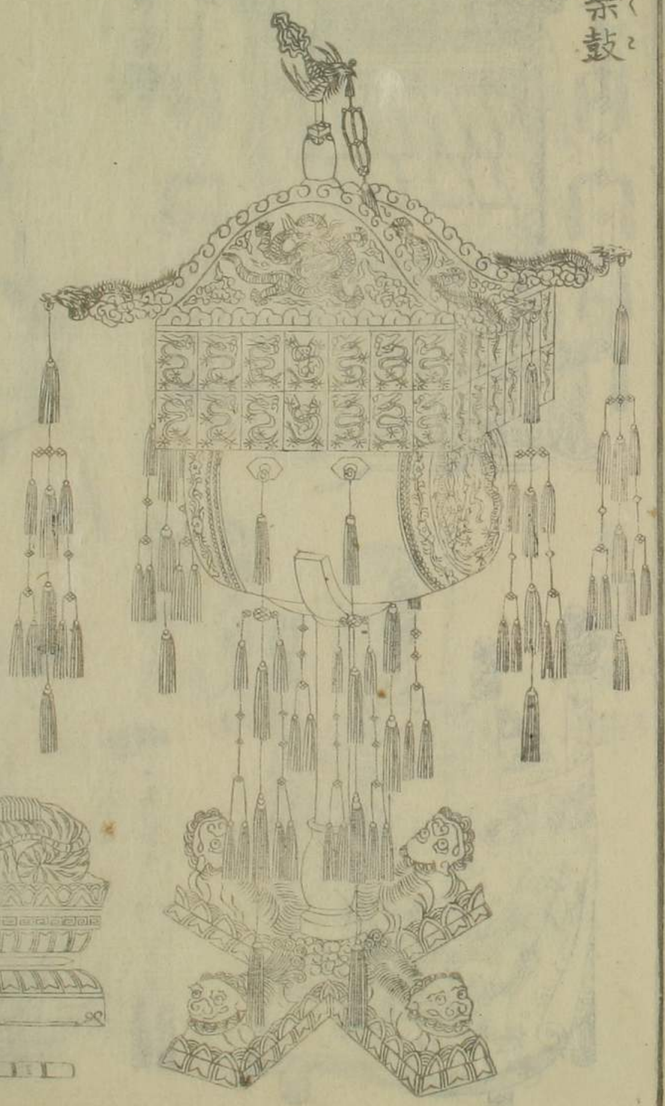
仲呂笛用陰月

中和韶樂簫

姑洗簫用陽月

仲呂簫用陰月

中和韶樂鼓



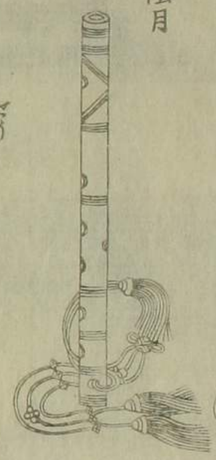
中和韶樂柷　原本脱圖可追考

中和韶樂敔

中和韶樂篪

姑洗篪用陽月

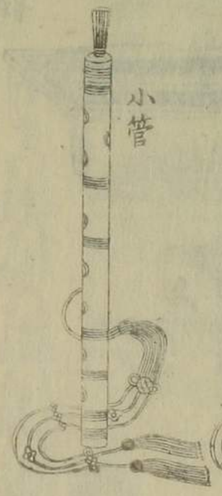
仲呂篪用陰月



中和韶樂笙

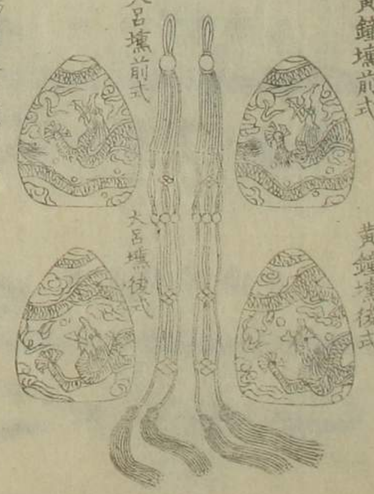
大管

小管



中和韶樂壎

黃鐘壎用陽月大呂壎用陰月



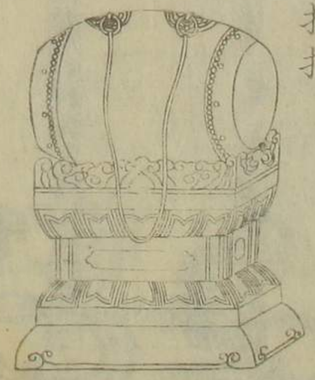
黃鐘壎前式

大呂壎前式

大呂壎後式

黃鐘壎後式

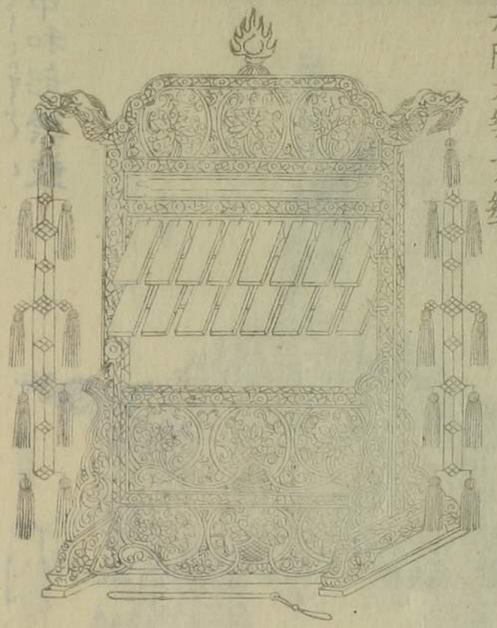
中和韶樂搏拊



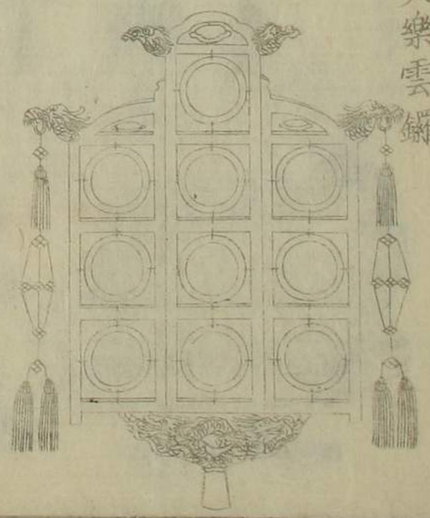
丹陛大樂戟竹

二人執之立丹陛上合則作樂離則止樂

丹陛大樂方響



丹陛大樂雲鑼

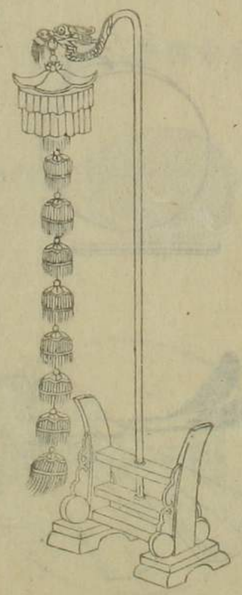


丹陛大樂大鼓

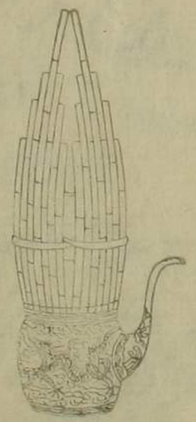
丹陛大樂杖鼓

丹陛大樂拍板

祭祀樂舞節



祭祀樂干



番部合樂胡琴

番部合樂二絃

回部樂塞他爾

回部樂喇巴卜

安南國樂弓彈弦子

安南國樂弓彈胡琴

安南國樂弓彈雙韻

以下ハ蠻國同部ヲ燕饗ゼラル樂器ノ内ヨリ形ノ異ナル分ヲ附張ス

祭祀樂舞戚

祭祀樂舞纛

凱旋凱歌樂方響

祭祀樂舞羽

凱旋凱歌樂星

凱旋凱歌樂鍚

凱旋凱歌樂拍板

凱旋凱歌樂鈸

緬甸國樂接內捨兜呼

緬甸國樂聶兜姜

安南國樂丐三音鑼

廓爾喀部樂丹布拉

廓爾喀部樂達布拉

廓爾喀部樂公古哇

廓爾喀部樂薩朗濟

德部署の從制四人儀衛羅列あり。此本安藏に月八日より冬に花を開きて實を結ぶ。その實のかたち蓮蓬のごとくにして實ありてその比をとれば中より蓮の佛一體あらはる。

兵部署　風の東

の直街さありて、ゆくこむ。

二堂の西廊には周禮大司馬の法一則を刊す。明代の舊物なり。○尚書宮濶人漢一人兵部署の總官として、中外武職の銓選軍實の簡閱を掌る。凡武選選事應四ひ征伐の訓誥を刊す。其政令を頒行し、軍實清吏司あり。評傳の部并四ひ馬の政を掌る。職方清吏司あり。天下の輿圖を掌る。其治要を審らかにす。

工部署　風の東

南さあり。西さむく。堂の額を敬飾百工とぬ雍正帝の御書なり。

侍郎滿漢各二人工部の總官として九天の工虞官屬を掌り物を制し材を度り財を節ふ。凡そ營造司虞衡司都水司屯田司の四司あり。其營造清吏司は營府城隍倉廒廨宇の經始遷修と掌る。其外百工を董るの職掌つさごとし。材木のうれ石の品質を掌る。陶冶のうれ磚瓦の製を掌る。運庫のうれ車舟の陸轉と掌る。虞衡清吏司は山澤の採捕及ひ柔園と陶冶し、屯事植樹と隨時と修と。

兵部署

德部署の從制四人儀衛羅列あり。此本安藏に月八日より冬に花を開きて實を結ぶ。その實のかたち蓮蓬のごとくにして實ありてその比をとれば中より蓮の佛一體あらはる。

二堂の西廊には周禮大司馬の法一則を刊す。明代の舊物なり。○尚書宮濶人漢一人兵部署の總官として、中外武職の銓選軍實の簡閱を掌る。凡武選選事應四ひ征伐の訓誥を刊す。其政令を頒行し、軍實清吏司あり。評傳の部并四ひ馬の政を掌る。職方清吏司あり。天下の輿圖を掌る。其治要を審らかにす。

工部署　風の東

南さあり。西さむく。堂の額を敬飾百工とぬ雍正帝の御書なり。

侍郎滿漢各二人工部の總官として九天の工虞官屬を掌り物を制し材を度り財を節ふ。凡そ營造司虞衡司都水司屯田司の四司あり。其營造清吏司は營府城隍倉廒廨宇の經始遷修と掌る。其外百工を董るの職掌つさごとし。材木のうれ石の品質を掌る。陶冶のうれ磚瓦の製を掌る。運庫のうれ車舟の陸轉と掌る。虞衡清吏司は山澤の採捕及ひ柔園と陶冶し、屯事植樹と隨時と修と。

○尚書宮濶人漢一人兵部署の總官として、中外武職の銓選軍實の簡閱を掌る。凡武選選事應四ひ征伐の訓誥を刊す。其政令を頒行し、軍實清吏司あり。評傳の部并四ひ馬の政を掌る。職方清吏司あり。天下の輿圖を掌る。其治要を審らかにす。

揚雄宅祠

祖德靈長日孤臣報國年九原終不改西蜀到今傳異代還祠廟明神儼豆邊開西二夫子家学仰前賢

王士禎

鳴門録

度

ものさし　古尺

度量の制は法と律と差等の廣さを以てこれを爲とり。古尺は黍の積を以て一分と爲し。黍十を以て一寸と爲し。其十寸の即一尺なり。今の黍の積り廣と二分と上積黍十を一寸とし。今尺の一尺は古尺の七寸二分九釐と古尺の九寸の當即黍積の長なり。工部營造の制造一如古の布政使司の布政使司の頒式其屬を以て縣と爲し。縣に令尺を頒つ。

權

分銖あり。其祇園の實例をこゝに載す。

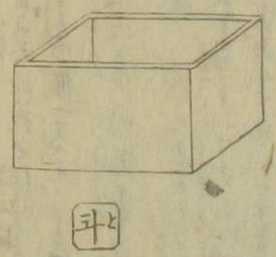
甚重二兩ものは。積一百二十分。六十八釐八毫。八百二十忽。毫中。忽七分。忽毫六絲。忽九微八纖。面積二分六釐八毫七絲七忽九微二纖。高三分八釐五毫八忽二微二纖。

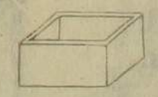
量

即ちとかり。詰すほをもて容積を定む。

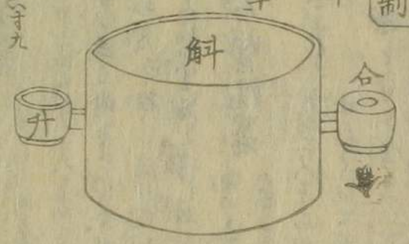
九一升の方積三十一寸六百分面底方。深二寸九分七釐九毫九絲。

○一斗の方積三百十六寸。面底方八寸。深に寸九分三釐七毫九絲。





嘉量圓制



斛の積八百六十寸。深九寸。口徑一尺。底徑七寸。

○斛の積八百六十寸。深七分二釐九毫。冪一百八十寸。九分八十釐。徑一尺三寸二分六釐二毫。

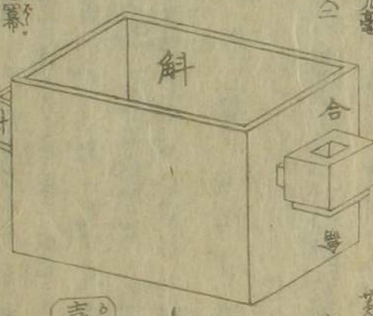
○半の積八十六寸九十三分四百八十三釐。深七分二釐九毫。冪一百八十寸。九分八十釐。徑一尺三寸二分六釐二毫。

○斗の積一百六寸九分三百四十四釐二百毫。深一寸八分二釐二毫八絲。冪四百七十二分三千九釐二千毫。徑二寸四分九釐二毫。

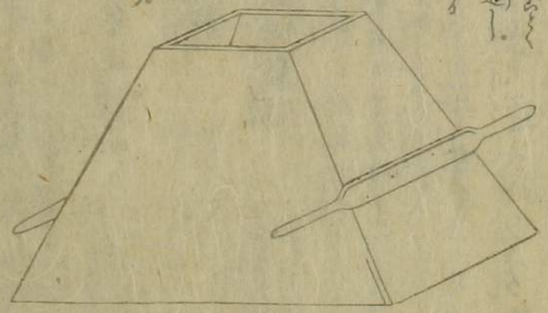
○合の積八十六寸九百三十四釐四百二十毫。深一寸九分有九釐二毫。冪。七十六分八百九十二釐。徑二寸四分九釐二毫。

○一斛の方積一尺八百六十寸。口の方六寸六分。底の方三寸七分。工部營造の制を遵て造。

○嘉量の制。斛を準上と斛とし。升と斗と合とし。耳と外とし。布の耳を合と爲。其重と二絢其多寡の實り盈る。



嘉量方制



斛

二斛をもつて一石の方積三尺一百六十寸。

すべて法器をもて此を量れ。工部營造の義量皆一を制造一如古を倣效し。陳祿第一を藏之。

掌る都水清吏司ハ都て水利のを河防橋梁船政を掌る其下司に割る廳ありて道路を治め溝渠を
屯田清吏司ハ陵寝と修繕し薪炭のをを掌る○節慎庫あり郎中員外郎各一員その職金帛生納を掌る
又製造庫あり郎中司匠の職ありて金革を攻治ることを掌る○節慎庫ハ工部署の東にあり州より入金の
元宝銀の元宝各一あり庫の物これ掛して貯るハ其知尚人より出るしとる永楽九年の置と称す○工部
長官李と記る本と又義花廳とふ又後擬紫衣して技幹物料吏部署にあるの義花廳と給備て何ふの
摘しとふるを記しん○吏部戸部禮部刑部兵部工部以上六部と称し天下の政令ハ此六部より出る

○鴻臚寺署 闕の東工部署の南にあり西にむかふ 雍正帝御書の額あり肅賛朝儀といふ 卿官満人漢人各二人少卿官満漢各一人ありて總官より九朝會宗祠燕饗御食等の儀と掌る其屬とるふ鳴賛官ありて外吏引礼喝賛其を司る又序班官及百官の班位序秩と掌

○欽天監署 闕の東鴻臚寺署の南にあり西にむかふ 雍正帝御書の額あり奉時敬授といふ 總官監正満人一人欽官監副の満大臣一人を監正し西洋人一人をしてこれを授く監副官あり満漢西洋各一人測候推歩の法をつかさどり天象を占ひ民に時をさづく其属ゟる五時憲科あり春夏中秋冬の五官博士天文生各その官と補ひ天行の度を推し歳の差を移し気節を協しくさるをを掌る又天文科あり掌るところハ天象の変ずるを観雲物を書し以て歳の吉凶を験しむ漏刻科あり壷漏を調へ中星を測て諸陽を見て以て営建を卜を掌る

○太醫院署 闕の東欽天監署の南にあり西にむかふ 堂中に康熙帝の院使黄運に賜ふる御製の詩を懸る 院使一人左右の院判各一人これを太醫院の總官とし醫の政令をつかさどる其屬ひを率ひて以て醫事に供ん御醫十五人吏目三十人醫士ハ十人醫員三十人皆九科の法をもって疾と癒とるのを掌る其余醫生数十人製薬を掌る又御醫吏目院の中より才能の者を選ひ醫を教へ弟子に治術を教しむ 先醫廟 堂のひがしにありてみなみにむかふ

康熙帝の御書永濟群生といふ額あり。三皇像を供せり両廡に白雲風伯を列ね 薬王廟 廟の外にありて西に向ふ廟中神像の東に古銅人一ありて中空にして水を灌ぎのぞくに皆竅に通して古き蒼翠しく當洞くんの目を衍る此銅像満中より湧出るものなりといひ伝へ其ハ去りし泥棄の玉璽年間に得たる所なり其後元の至元の間是を修造し又明の英宗帝かさねて修ん

○怡賢親王祠 正陽門の内玉河橋の西城ねきにあり 雍正八年勅して之れを立らる 南玉河橋の西にあり 乾隆帝御書の芸館培英の額あり 後に楼あり碑あり 陽ふ不の文書と蔵ふ

○四夷館 闕館の西にあり 東巷中玉河橋の西にあり○今東城庚常館の東に東城根にあり南玉河橋にいふ東長安朝鮮人の居ところなり即四夷館の別官なり

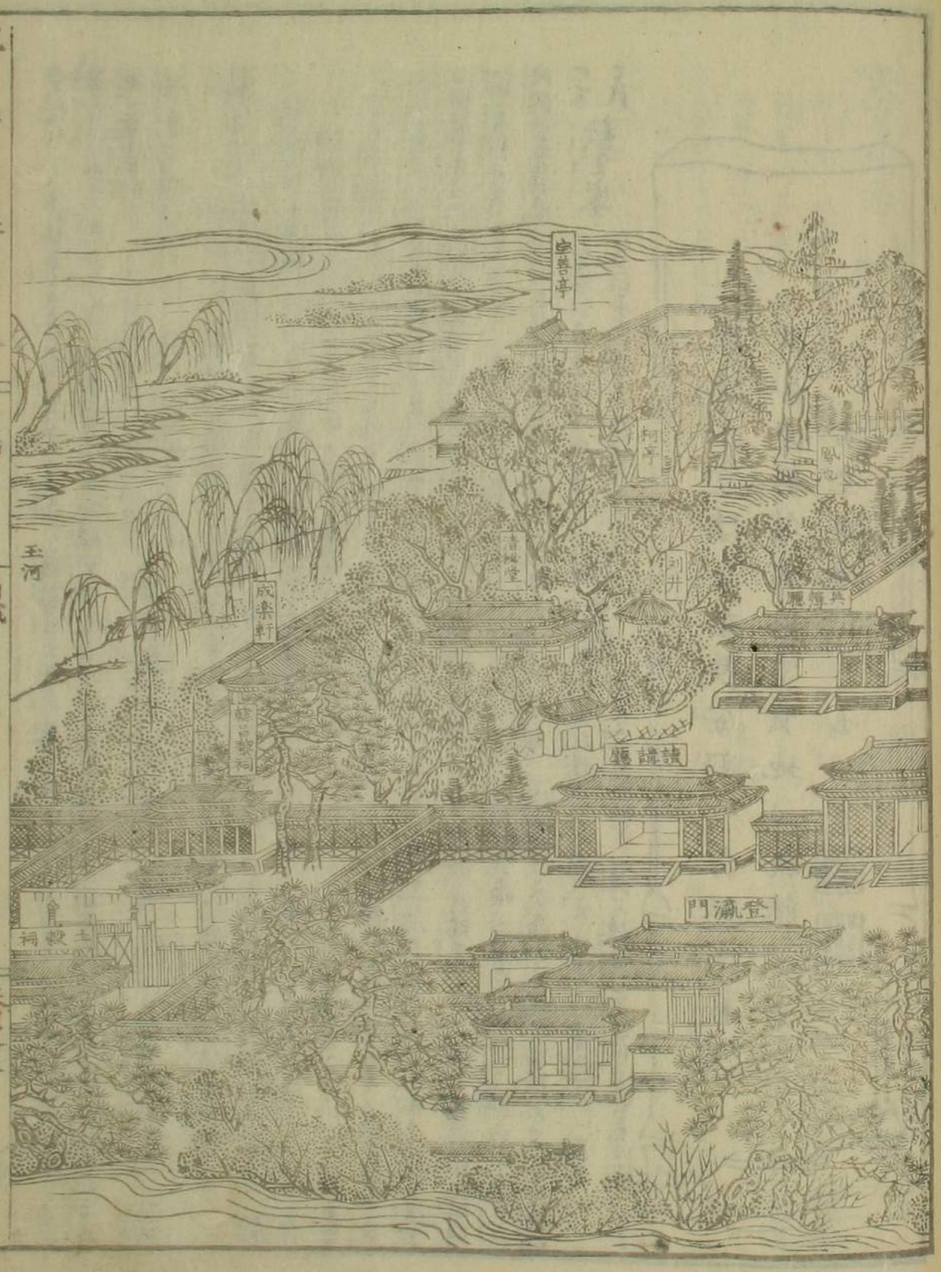
○玉河橋 街にたるかと玉河橋といふ東江米巷にあるを中玉河橋といふ其水皇城の内南をながれて南御城を出正陽橋の城中に帰ん玉河橋の東西両岸ハ多く楊柳を植へ翠水面に暎して風光靄くおぼくし

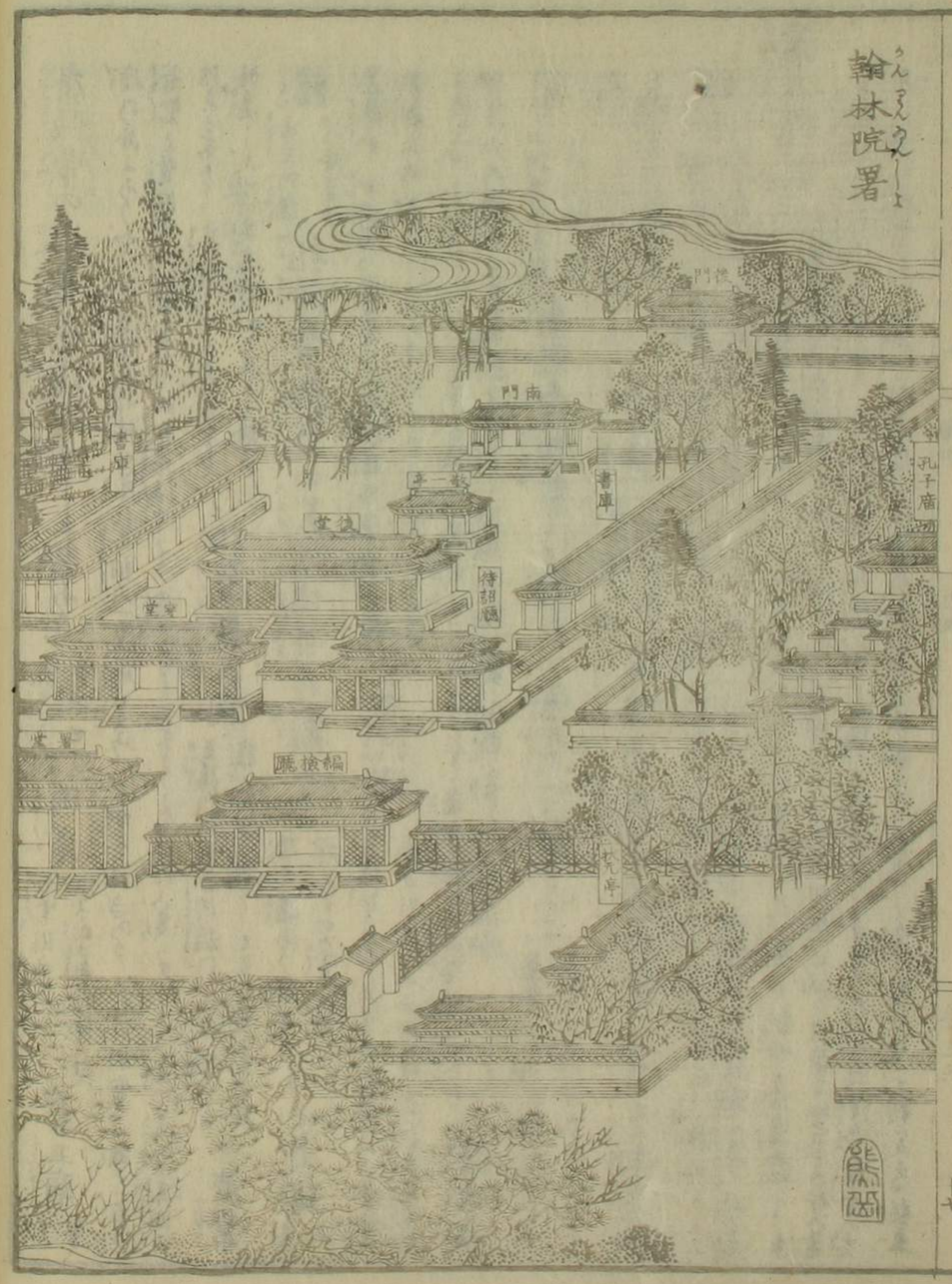
○詹事府署 玉河橋の東岸にあり西に向ふ 康熙帝御書の額あり徳業仁義といふ 詹事官満人漢人各一人少詹事官満漢各一人これを總官とし經史文章のを掌る所翰林院のごとし

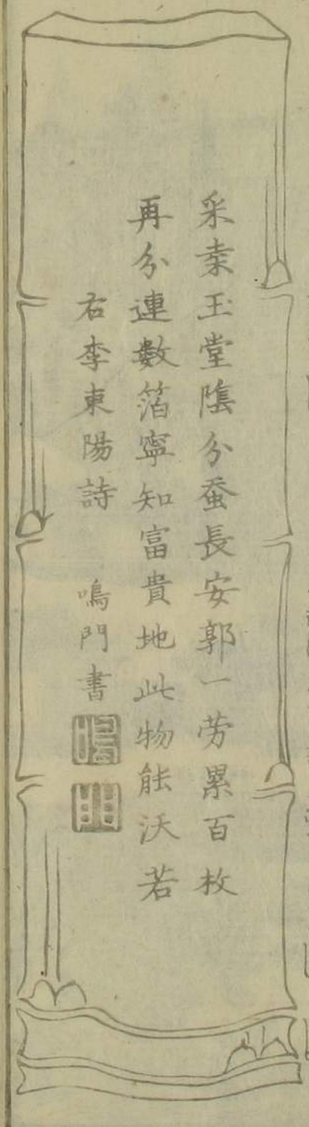
○孔子廟 署の後の東側にあり 乾隆帝御書の存誠の二字を刻せる碑あり 廟の前に古松二株あり数百年の古樹なり又府署の旦薄廳の址に一の扁石あり上に一枚函ふ三字を刻む即王百穀の書也○京師の井水多く鹹にして飲ふらし唯詹事府署の井水ハ甚佳都人雷て汲ん

翰林院署 玉河橋の西にあり北に向ふ即元代の鴻臚署の三亮門の蓬瀛門といふ堂にハ又櫻西に讀講廳あり東に編撰廳あり左郎國門の内を條元廳とし右御國門の内を韓昌黎の祠とし凡南に向ふ東に向ふ蕃い太毅祠之堂の後ハ寳堂なり左ハ侍詔廳右ハ典簿廳なり後に後堂ありて南に向ふ中に皇帝様筆の額座を設く後堂東西の屋を秘書廳とし院の内西の東に亭あり劉井と称く翰林学士劉定之を鑿事

皇城名勝圖會


玉河
金鰲玉蝀橋
成素亭
閱古樓
太液池
集賢殿
讀書殿
登瀛門
太歲祠


翰林院署
南門
書庫
孔子廟
堂
堂
堂
待詔廳
編修廳
亭
亭



采秉王堂陰分蚕長安郭一勞累百枚
再分連數箔寧知富貴地此物能沃若
右李東陽詩　鳴門書

ぐんびかう。甚亞者之亭あり。柯亭と名く。韓柳ぐ士柯汀岩が建るところなり。
數一亭あり。郊外の東にあり。清悉堂甚著と。瀛州亭と。真の十勝の國地と。
後に嶽樂軒となり。又柯亭の亞ぐ者と。亦一勝地なり。
河の南を「漫齋房」と。又南を「原心亭」と。
韓柳溝　乾隆八年、韓柳溝の傾廃せしを、
集賢儒秘と。員を分て國書集成一部と。編修せしめ給ふ。日帝觀
ら韓柳溝の地畔ありて古昔より名に負ふ。
しく梅墨總の一篇を得て、梅溪綠の一篇を得て、
六十人御製の詩を賜ふ。
○韓柳溝の總督、掌院學士兼禮部侍郎滿人漢人合一人國史國統制誥武英殿總裁官
士侍讀學士修撰編修庶吉士訂定。
記。
詩。

堂の額を通德仁義と云ふ　原熙帝の宸

韓ちう　乾隆八年、韓柳溝の傾廃せしを、
集賢儒秘と。員を分て國書集成一部と。編修せしめ給ふ。日帝觀
ら韓柳溝の地畔ありて古昔より名に負ふ。
しく梅墨總の一篇を得て、梅溪綠の一篇を得て、
六十人御製の詩を賜ふ。
○韓柳溝の總督、掌院學士兼禮部侍郎滿人漢人合一人國史國統制誥武英殿總裁官
士侍讀學士修撰編修庶吉士訂定。
記。
詩。

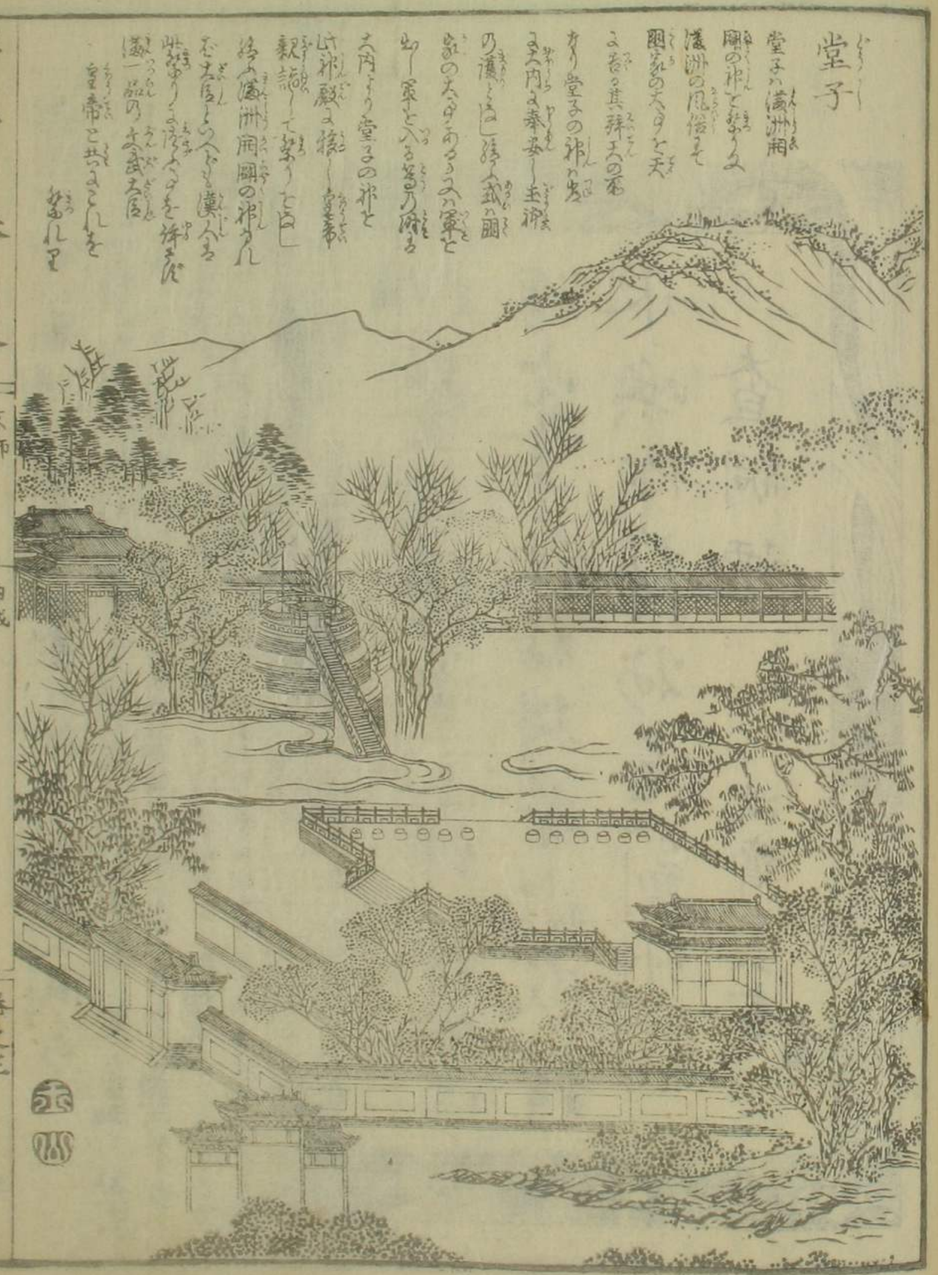
孔子廟　則韓柳溝の内にあり。

賓興亭　即風池の南にあり。

史官衙居　韓柳溝を纏理の末に、武英殿と縮寫の本とを捜し出して殿板
又提督より其處上より文獻
乾隆癸巳の年庫貯書の籍と照ひ、韓柳溝を纏理の末に、武英殿と縮寫の本とを捜し出して殿板
籍書の外、著く天下に認して歴代
此書の中、明代永樂年間に至て分の世と經すること
纂輯して其の住書うは類詞を編
經の部九十數部書詩禮春秋樂
る部の儀禮と入る種數の中歴代の
をもちて小學數の中八法をうけ世
史部載記時令地理職官政書目錄
說雜家と入る部九十七數偽家兵の數
家通數と入る集部五數楚詞別集總集詩文評詞曲と
源閣抜閣の内り文淵閣盛京の文溯閣
藏するものをあらため集めて緊要を
終ろうに庫よねぜる書三千二百六十種七万八千八百九十巻あり。
其處有韓柳溝より韓柳溝文運の盛んなるものをるべし。

○慶儀關外駕庫　永長春門の外にあり。

雍正帝御書乃額を賞化通方とふ　孔子廟の東にあり。清朝にて此處と称
外藩蒙古朝覲回部會川等の酋長を
尚書侍郎滿人一人左右侍郎滿人各一人
額外侍郎蒙古一人理藩院の總官なり。
不旗籍清吏司あり。蒙古科爾沁等諸
をつかさどる。王會清吏司あり。科爾沁等の
諸部落の封爵會盟及び降仙恤典を除授
をつかさどる。王會清吏司あり。科爾沁等の諸部落朝貢接待と掌曲屬渡事



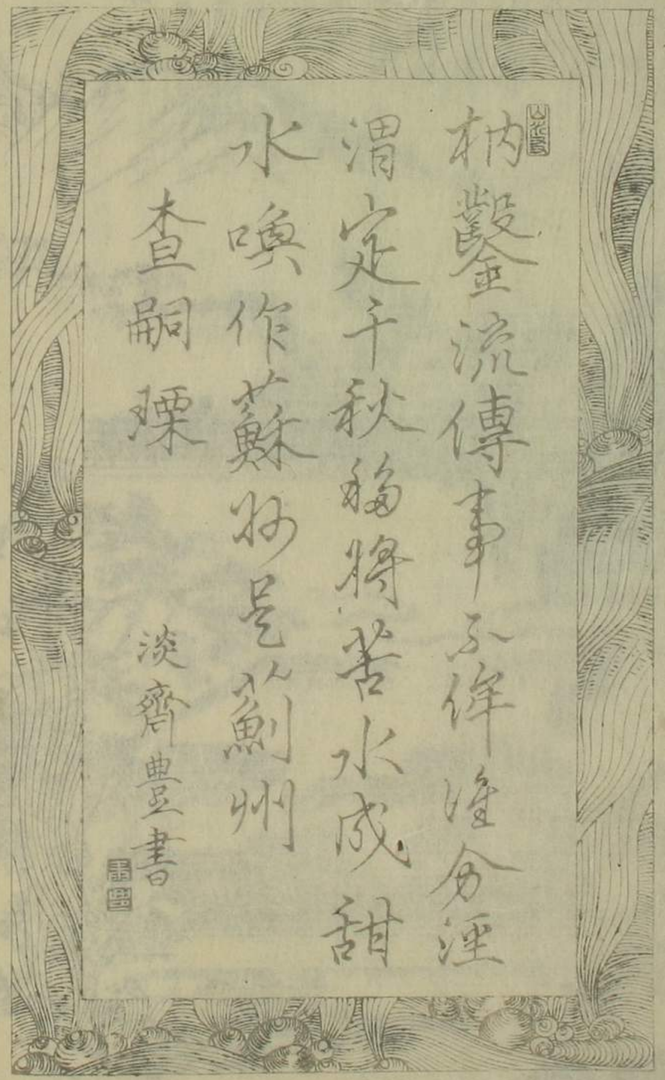
堂子

堂子の滿洲用
國の神を祭る
處なり其の
圖式の大畧を
左に載す其
祭天の事
あり堂子の神
を
堂内に奉安し玉
帛の
類を
陳列し
其の
前に
一
柱
を
立
つ
堂
子
内
に
入
る
の
滿
洲
人
内
堂
の
神
を
祀
殿
と
稱
し
一
名
を
堂
帝
と
共
に
祭
ることを
なれり

尼番特の諸部落封爵等を掌る理藩院
管轄の部落及び朝覲番僧の朝貢接待
を掌る理藩院と
稱する四氏耕牧のことを掌る理刑
審問の刑罰を掌る以上六司皆滿洲
人漢人會計司郎中各一員
理藩院
堂子　長安左門の外玉河のほとりにあり。雍正年
中こゝを建る街門に向ひ内門に至る
内門に至る中に大内致祭の立杆石
堂を設く其制綠瓦黄牆
親王郡王異動更
祀を
もつて
設け
綽楔
を立
つ其
等一
柱
を
立
つ
るこの
次第
は
天
を
祭
るの
圜
殿
あり
殿の
南
玉
河
に
架
する
橋
あり
○太僕寺署　橋のひがしにあり
書あり　卿官滿人漢人各一人
寺丞滿漢各一人を置く左右二司あり左
司は
陽馬
匹の
蕃
養
を
つかさどる
印
信
を
つかさどる
○肅親王府　南玉河橋
の
ほとり
崇文門　内城南面左の門なり元の文明門
門内より哈達大王の府あり後ろに
明の古城向を修し即城上に
築ありて
城
の
古
城
向
を
修
し
即
城
上
に
築
あり
寺
内
に
萬
曆
の
碑
あり
滿
漢
の
文
を
刻
す
○照忠祠　玉河橋の
南にあり
○雍正帝御製の碑あり
○裕親王府　照忠祠の西
○安郡王府　藁
基
○
藁基
○
靈
觀
音
寺
觀
音
寺
の
額
あり

○總督倉場公署　雍正帝御書の額あり。儲備九穀をつかさどる。

○苦水　藥州城門の内、藤線胡同三元巷の西にあり。井水の苦味を洗せんことを請ひて、雍正間一人の御史ありて、此水を汲みて、俗の雨水のごとし。水やく此水を汲みて、年の中へ正しく寒露の後此の逆を取りて、雨水を汲みて日あり。資けくふせ。



○大石橋　崇文門の東南にあり。○泡子河　其水より泡子河橋あり。○泡子河　崇文門の東南にあり。徳勝河より二三里が間東の蚕市の裏の置きもの見聞に関係する脳建なる小路なり。抑泡子河の風景なり。柳の多きを以て名とす。まつづゐを顧ぶに、天基宗く緑で、河の両岸は巨樹垂柳いやうな生垣うつくしく、荒る風景なり。やはり泡子河とよべる。春秋佛圖の天ひるまでるそは晴れた俗るさまの景色の中の流れの多くいろ〳〵の船も捨うて、歳の終りは、都の老幼男女花火を揚げて、呂公堂の神を祀りて、老をとる其の老のさまよりうんと楽。

○華嚴禅林　呂公堂のつゞき。○泡子河　泡子河のいろ〳〵な船の慕そとりやう〳〵む。絵師の描くふ。

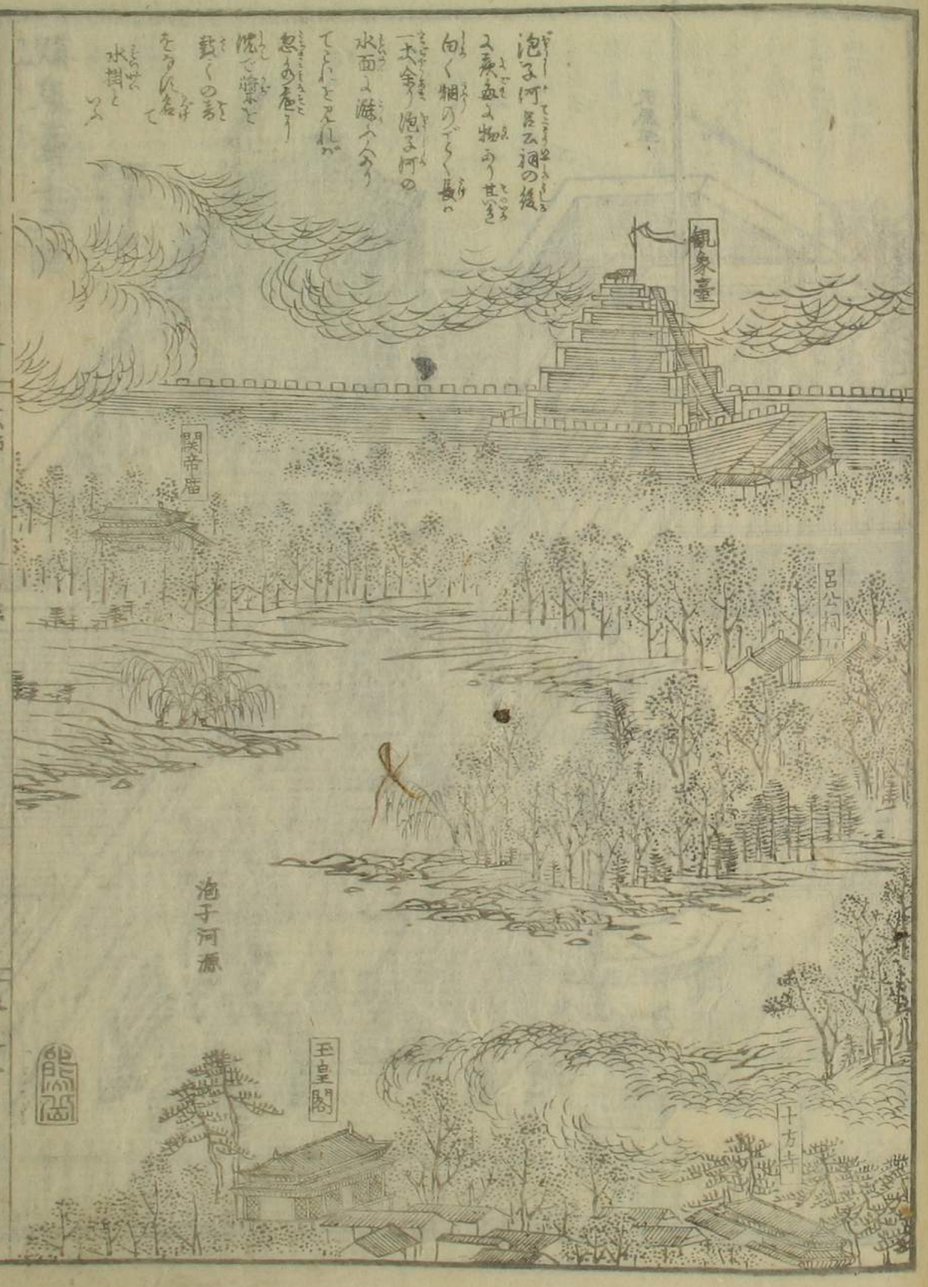
○関帝廟　呂公堂の南にあり。○大清宮　呂公堂の南にあり。耶やや遠し。明の勢層の間諸神祠堂碑記を内府より金を賜ひ藏経書の三皇の像を始め此る安置し。

○觀音堂　城の東南の隅にあり。観音堂ともいふ。

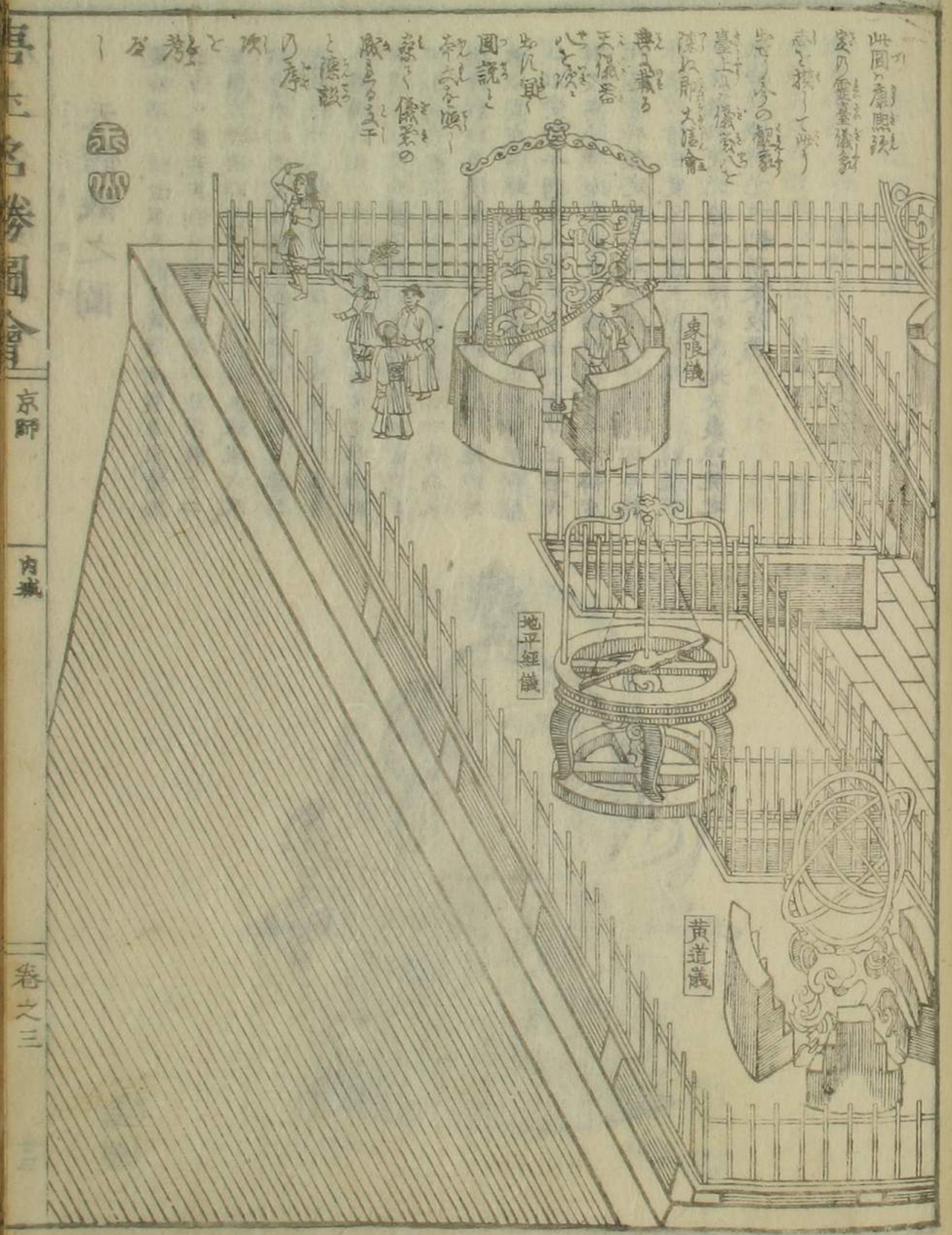
泡子河

河の北の方より流れ西より南の
ミゝ一帯の方を囲繞し東方を囲繞
囲ひうちのミゝより湧き出る
泉水の周りを中の郎君云
堂ありて西が楊氏の祠堂ありて
東の玉皇閣の東境を去ること
一里許り

不逐市塵外
泓然別有天
石橋将盡岸
春雨過平川
双開晴分影
千樓夕起烟
因河名泡子
悟得海無邊
明陸啟



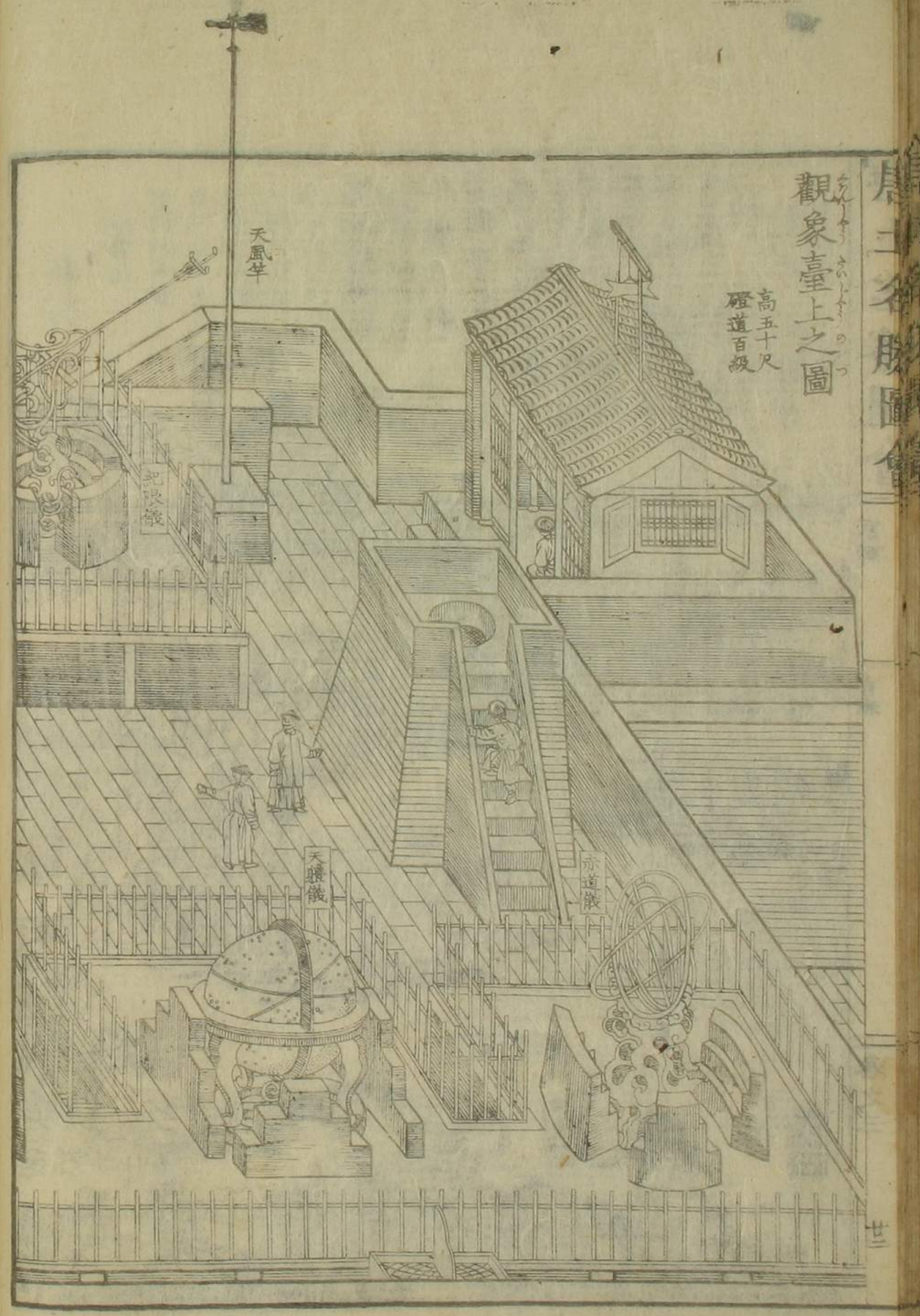
泡子河は元の積水潭の流れ入る所也物の形其の如く
一大金魚泡子河の水面より海へ入るようてんとそれ
恐れ多き慎で藥と戴くの意をもつて名く水闕と云



此圖の創製は寛政の靈臺儀象を改め造りし所の觀象臺上の儀器を測候の次第を圖說と併せ載る

觀象臺上之圖

高五十尺
階道百級

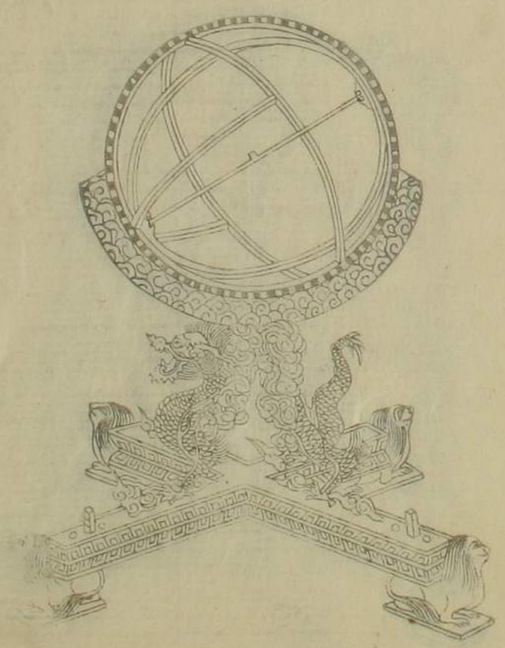


天體儀之圖

漢初洛下閎造渾天儀後漢張衡製渾象隋志云渾天象者其制有環而無衡本朝康熙十二年製天體儀即古之渾象也鑄銅為球徑六尺兩端中心為南北極以鋼軸貫之面刻黃赤二道平分十二宮布列星漢以肖穹象其外為子午圈徑六尺一寸兩面刻去極度東面兩極開半圓孔以受天體之軸列以半圓合而固之其下為地平圈徑與子午圈等面濶七寸用為水渠外刻四象限度及地平時刻方位下施四足承以圓座設螺柱以取平南北正中嚮西開關口以受子午圈半入地平下半出地平上自天頂設高弘帶地平遊表以■諸曜地平經緯度北極安時盤定於子午圈設遊表於極極令能自轉以指日度又能隨天旋轉以指時座下又設機輪使北極能升降則各地天象隱見之界皆可瞭然尤古制所未及焉

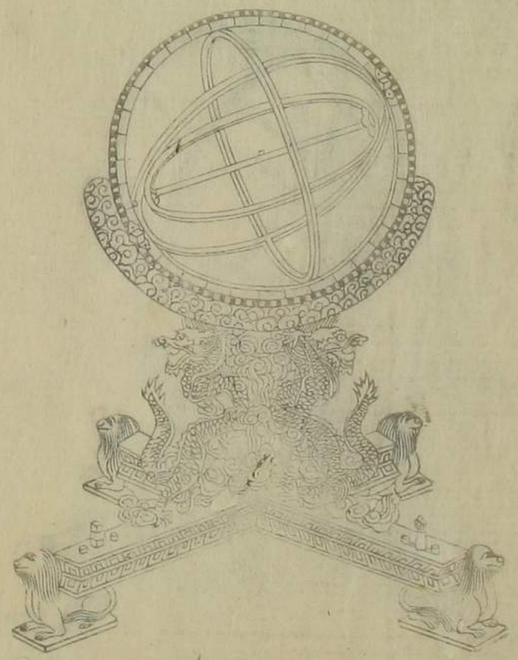
赤道儀之圖

渾天儀制為儀三重外曰六合儀次內曰三辰儀最內曰四遊儀凡七圈本朝康熙十二年製赤道經緯儀三重凡三圈蓋合三辰於六合而又省一地平圈也其外正立為子午圈外徑六尺一寸兩面皆刻去極度數京師天頂距北極五十度五分北極出地南極入地各三十九度五十五分兩極側面各安鋼軸以半圓合而固之距兩極各九十度橫直赤道緯圈外徑五尺九寸內規面及上側面刻周天時刻外規面及下側面刻周天度分又自南極兩旁承以兩象限弧使不傾墊次內為赤道經圈外徑五尺六寸四面刻赤道緯度貫於南北極之兩軸其內又為通軸徑一寸中半安橫表長三寸赤道上設遊表對直軸以測赤道經度經圈上設遊表對橫表以測赤道緯度其下為半圓雲座以龍架承之



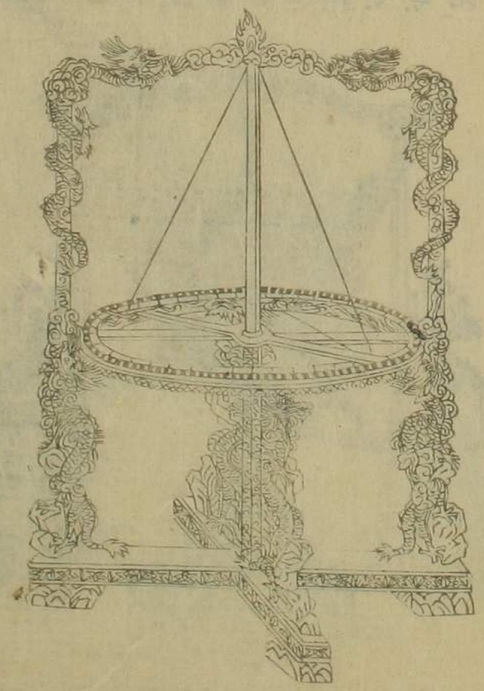
黃道儀之圖

渾天儀制有黃道緯圈而無黃道經圈本朝康熙十二年製黃道經緯儀三重凡四圈其外正立為子午圈制與赤道儀子午圈同次內為過極至圈外徑五尺五寸規面濶二寸三分側面厚一寸一分兩面皆刻去極度數貫於南北極之兩軸以象天之左旋距赤道極二十三度三十一分三十秒為黃道極距黃極九十度橫置黃道緯圈其徑及濶厚皆與過極至圈等四面皆刻黃道經度以象七政之右旋又次內為黃道經圈外徑五尺一寸四分規面濶九分側面厚二寸三分四面皆刻黃道緯度以鋼軸貫於黃極以象黃道之四遊而極安直軸徑一寸中半安橫表長三寸緯圈上設遊表對直軸以測黃道經度經圈上設遊表對橫表以測黃道緯度其下為半圓雲座以龍架承之



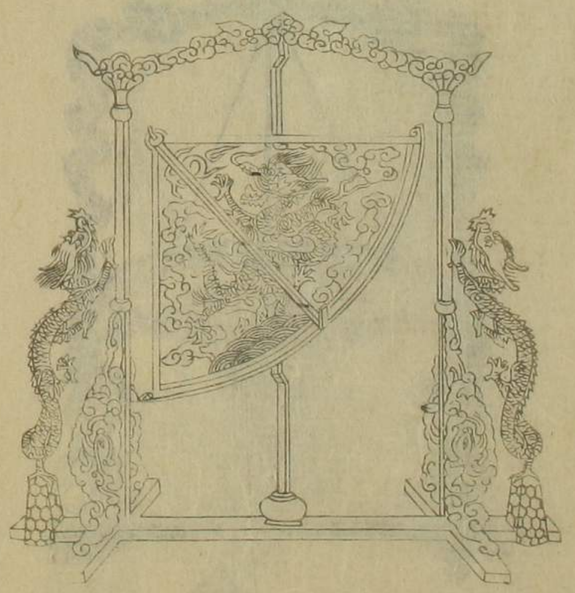
地平經儀之圖

渾天儀制有地平圈能測三辰當地平之經度而不能測地平上之經度本朝康熙十二年製地平經儀平置地平圈外徑六尺二寸濶二寸四分厚一寸二分上面側面皆刻四象限度上面自南北起初度側面自東西起初度東西設通經下設圓盤四面以立龍承之地平圈之下中心安立柱高與地平圈等適當地平圈之圓心上出圓軸地平圈之上東西植二龍柱結為橫梁中心開孔下與圓心相直中間安立表長四尺四寸上應天頂下應地心立表之末結十字橫表與地平圈相切長與地平圈全徑等立表中空上下設倒正小圓柱頂開一孔旁開二孔中結直線斜貫於橫表之兩端成兩三角形凡測日月星無論距地平上若干度但將橫表推轉令三線與所測參直視橫表所指度分即得各曜之地平經度焉



象限儀之圖

渾天儀制有地平圈而無地平經圈元郭守敬簡儀設立運圈以測三辰出地之度即地平經圈也本朝康熙十二年製象限儀為全圓四分之一亦名地平緯儀其制上正方角為圓心縱橫兩邊皆為半徑各長六尺濶二寸一分厚一寸一分象限弧濶二寸六分厚一寸一分正面刻九十度分外規面刻度數字其數自上而下者以紀地平高度自下而上者以紀距天頂度中間鏤以雲龍背面正中為立軸以運之立軸與儀之直邊平行長九尺七寸濶二寸一分厚一寸七分圓其兩端東西立柱高九尺四寸上下為橫梁濶七尺八寸飾以雲龍正中設圓孔以受立軸東西運轉圓心安橫軸長一寸三分軸本安遊表濶二寸一分厚三分長與半徑等遊表之末設立耳以測地平緯度較之全圓尤便焉

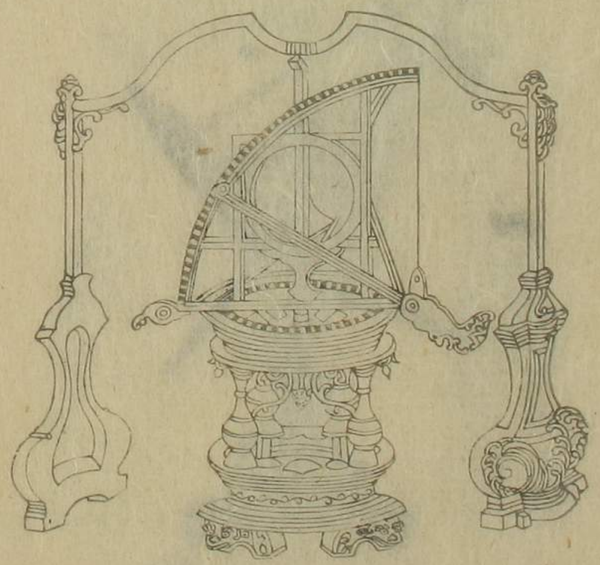


紀限儀之圖

諸曜在天之度赤道經緯以南北二極為宗黃道經緯以黃極為宗地平經緯以天頂為宗至於兩曜斜距之度古無測器本朝康熙十二年製紀限儀亦名距度儀其制一弧一幹弧為圓周六分之一通弦六尺面濶二寸五分中至兩旁各列三十度幹為圓之半徑長亦六尺幹末安柄以便推移半徑上端為圓心設立柱以安遊表長與半徑等遊表之末設立耳為測一曜之用弧背左右各設窺表為別測一曜之用又於幹之兩旁設兩立柱相距應弧背之十度以為借則之用儀面斡以流雲背安樞紐可使低昂表以半圓周施輪齒可使平側其下立柱入於儀座可使轉旋而凡兩曜相距之度皆可測焉

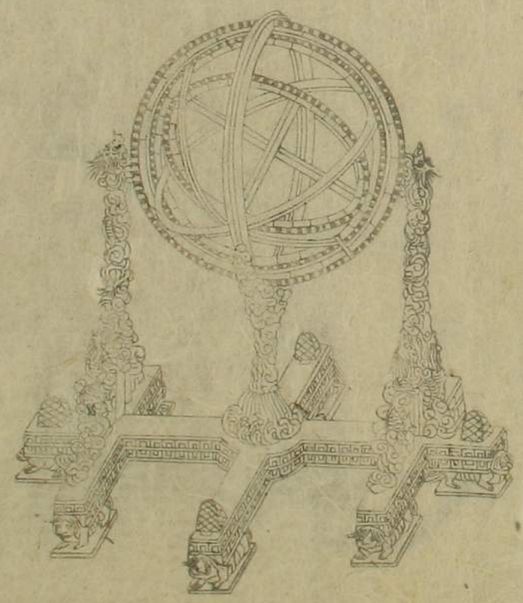
地平經緯儀之圖

康熙五十四年聖祖仁皇帝命監臣紀利安製地平經緯儀合地平象限二儀而為一其制平置地平圈外徑五尺濶七寸七分周圈刻四象限度下設四柱以圓座承之地平圈之中心倒安螺柱上出立軸東西安立柱高一丈一尺上結曲梁正中開孔以容立軸之上端中間安象限儀圓心在下半徑六尺弧濶二寸七分正面刻九十度中辨方圓及弧矢形背面結於立軸以運之圓心安虛表長八尺本設橫耳末設橫柱以備仰窺而測諸曜將象限儀推轉又將遊表低昂令與諸曜參直則橫半徑所指即地平經度遊表所指即地平緯度是一測而經緯悉得矣



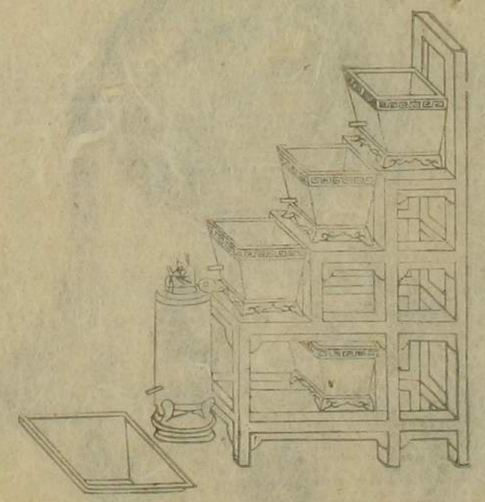
璣衡撫辰儀之圖

虞書舜典在璿璣玉衡以齊七政孔疏曰璣衡者王者正天文之器漢世以來謂之渾天儀者是也乾隆九年御製璣衡撫辰儀徑六尺其外即古之六合儀而不用地平圈正立子午雙環為天經兩面刻去極度數以雲座承之北極出地三十九度五十五分天頂距北極五十度五分距而極九十度結赤道單環為天緯兩面刻周日十二時九十六刻以龍柱扶之次內即古之三辰儀而不用黃道圈兩極綰赤經雙環兩面刻去極度數中要結遊旋赤道而面刻周天度分以象七政之運行最內即古之四遊儀通徑設直卑中心施窺衡以測七政之經緯架座施縹柱以扳平天頂施垂線以取正體制仿乎渾天之舊而時度倍為整齊運量同於赤道新儀而重環更能合應至用遊表窺測則上下左右無不宜焉



漏壺之圖

隋志云黃帝創觀漏水制器取則以分晝夜其後因以命官周礼挈壺氏則其職也宋志有求壺復壺廢壺建壺及平水壺之制本朝因前明舊制播水壺三形方承以木架上名曰天壺即宋之求壺水欲常滿上濶一尺九寸下濶一尺三寸高一尺七寸次名夜天壺即宋之復壺次名平水壺高濶皆遞減一寸分水壺一如平水壺之度置於平水壺後稍下即宋之廢壺受水壺一形圖徑一尺四寸高三尺一寸置於架前地平上名萬水壺即宋之建壺播水三壺前面近下皆有龍口以次漏於萬水壺平水壺後面近上開孔洩於分水壺以平其水而均其漏萬水壺蓋安銅人抱時刻漏箭下安箭舟浮於水面水長則箭上出周日水盈箭盡則啓其下口洩之於地而時刻復起午正壺安室內各設水甃龍口小管以玉為之



尚泰久勢ひろく勢ひろく嶽駕～てこれを委じ其餘の細ダるありて冊立ぬ。

成元日寅の刻圓の魁圀のごとくめて祝る方角をまもりて祝る方角をまもりて其祝る方をまもりし時刻ゐ若て奏聞ス日くの時雨の如く冊立ぬ。

儀せざるべし。○京師直衙及外省衙署の郡縣朝鮮等の日出入の時刻小板出地の度數と計節氣の早晩等の差を計てこれを定むる事ありて外圀を冊封をる附ス天隨室圀の製をこゝに記す。

圭表の圖

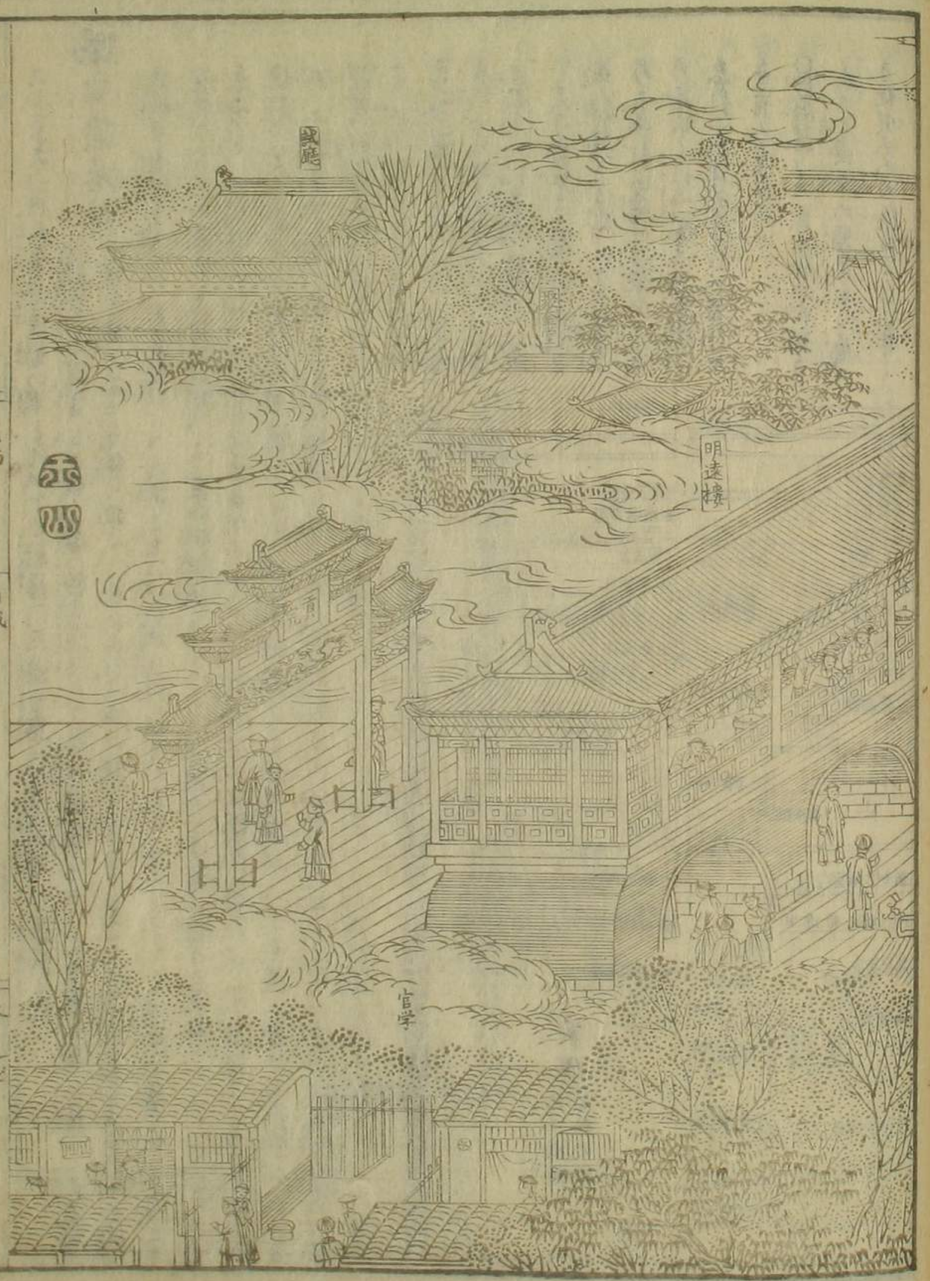
周礼考工玉人土圭尺有五寸以致日求史云何承天始立表候日影前明堂南北平置銅圭於石臺上長一丈六尺二寸濶二尺七寸周設水渠以為平準南端植銅表高八尺上設橫梁用影符以取中影清朝加二尺表高一丈上端安銅片中開圓孔徑二分午正太陽之影自孔射至圭面成楕圓形南界為日体上邊之影北界為月体下邊之影中心為中影京師夏至之影長二尺九寸四分八厘是為最短過此則漸長冬至之影長一丈九尺九寸四分是為最長過此又漸短因圭長不及長影之數又於北端設立圭高三尺五寸冬至之影上立圭二尺七寸四厘用以比例太陽高亦同於平圭之比例焉

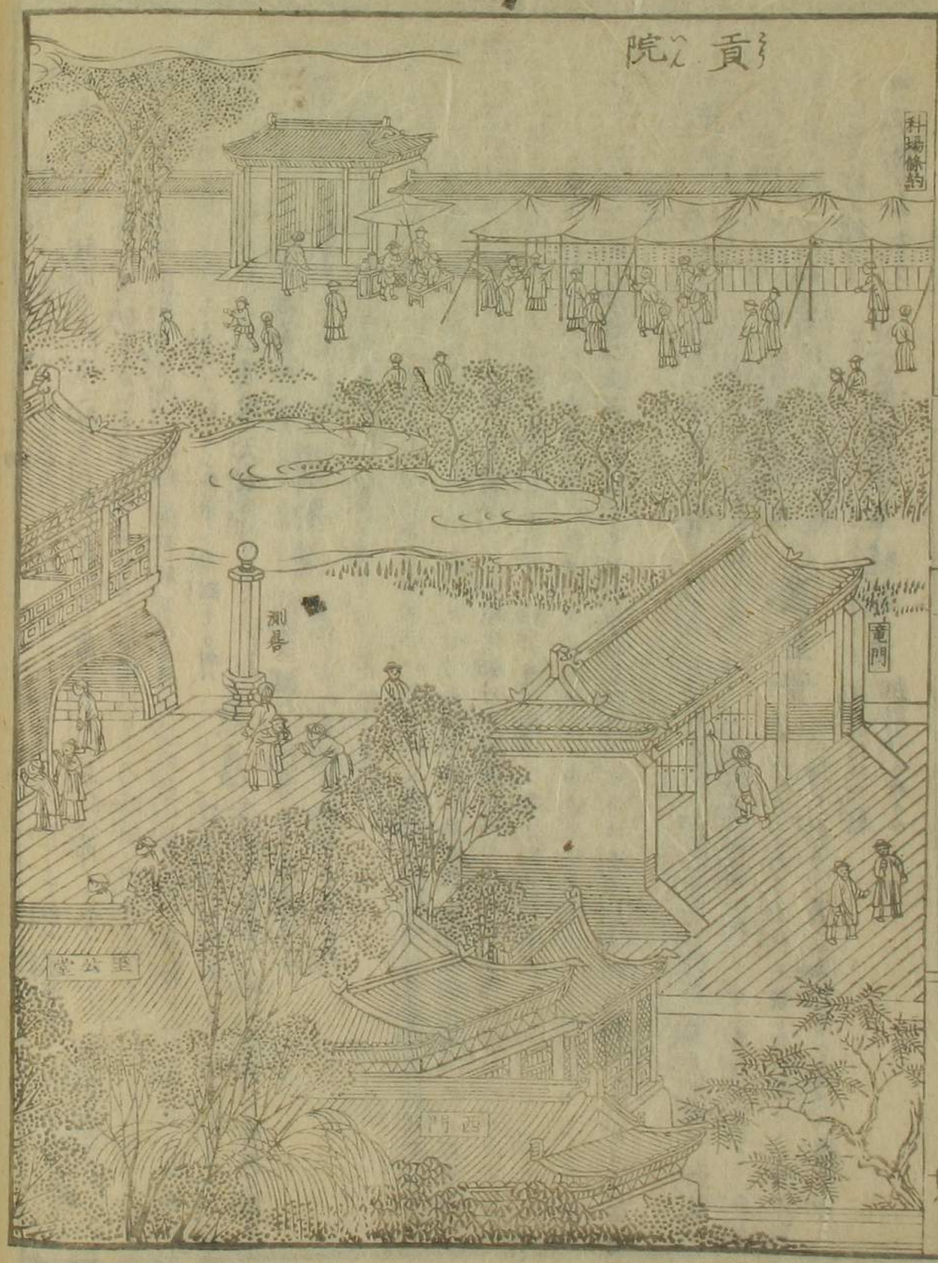
景影堂　別室三楹內立圭一ありて石臺の上に置く日の長短を測る所なり。

○貢院　國子監の東隅にあり貢舉をとるの所なり元代此地を借りて貢院とせしを國初に及びて永樂の九年帝貢院を御製をもて七言律詩を賜ひ後ひ石を勒して石碑の傍に建てり乾隆の御製。

○聚奎堂　貢院の中にあり明代王圖ともに者のり庚戌取士の詩と紀ありて其詩を碑上に勒して石碑の間に建つ。

○正藍旗護軍統領署　崇文門の內乾隅にあり。


武殿
明遠樓
宣武門


貢院
科場號舍
衡鑑
龍門
至公堂
西門

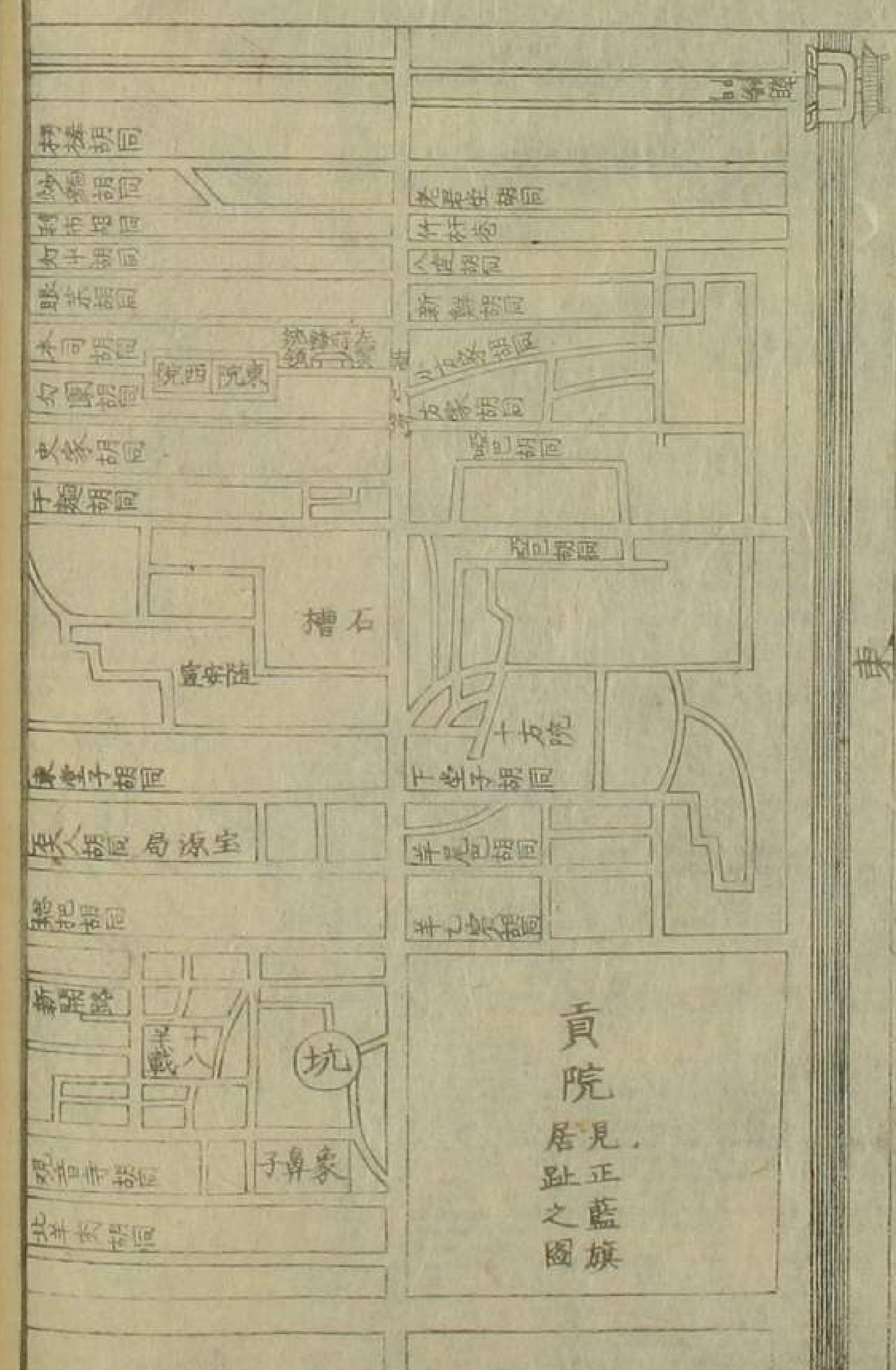
以上ハみな文门内正藍旗護衛の界とん以下ハ朝陽门内鑲白旗乃護衛軍乃居址とん

鑲白旗居址

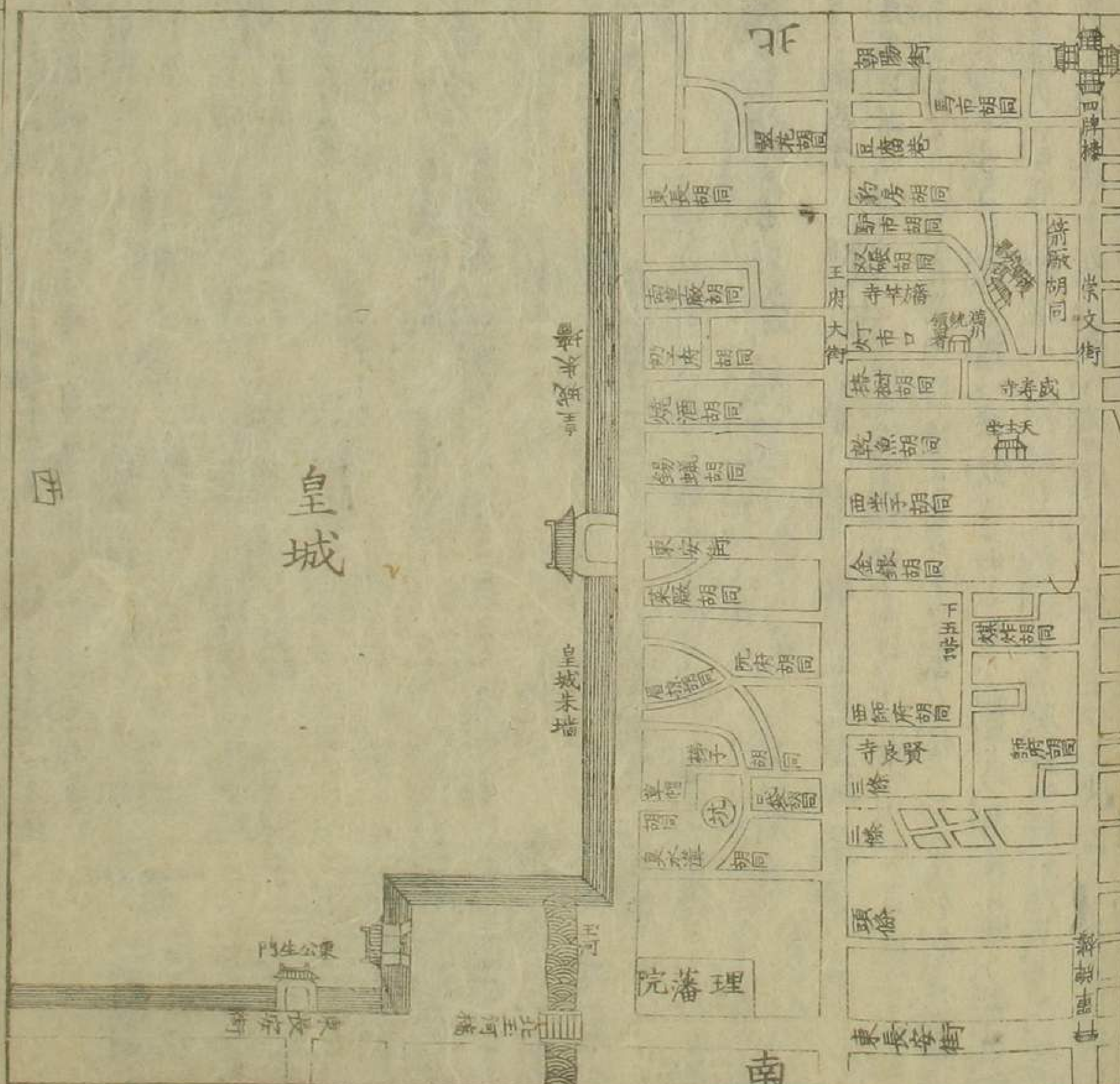
滿洲蒙古漢軍三の鑲白旗ハ豹房胡同より南单牌楼ぇ至り正白旗と界を接し正藍旗と界を接ゝ东ハ皇城乃根より东に向ひ内城乃根ぇ至る其中ハ滿洲蒙古漢軍ハ参領佐領の居址をわかつ东長胡同より大街ぇまさぐひ南沈府胡同乃东口ぇ至るまでを滿洲の頭参領ハ属せる佐領十七人乃居址とん沈府胡同より長安街牌楼ぇいたるまでを滿洲の二参領ぇ属せる佐領十六人乃居址とん又东長大街の西銭粮胡同支廠胡同东長胡同奶子胡同燒酒胡同煙濠後胡同以上を滿洲の三参領ハ属せる佐領十八人乃居址とん長安街牌楼より东に向ひ单牌楼ぇ至るまで滿洲の四参領ぇ属せる佐領十七人乃居址とん燈市口大街の西より东四牌楼大街を南に向ひ椿樹胡同乾魚胡同西堂子胡同金銀胡同椿樹胡同師府胡同頭條二條三條の胡同を滿洲の五参領の屬せる佐領十六人の居址とん凡滿洲鑲白旗乃参領五人佐領八十四人軍丁二万五千三百余人なり

○四牌楼より南にむかひ大街ぇ沿ふて堂子胡同ぇいたるまでと蒙古の頭参領ぇ属せる佐領十二人の居址とん總捕胡同から单牌楼ぇ至るまでを蒙古の二参領ぇ属せる佐領十二人の居址とん凡蒙古鑲白旗の参領二人佐領二十四人軍丁七千三百人なり

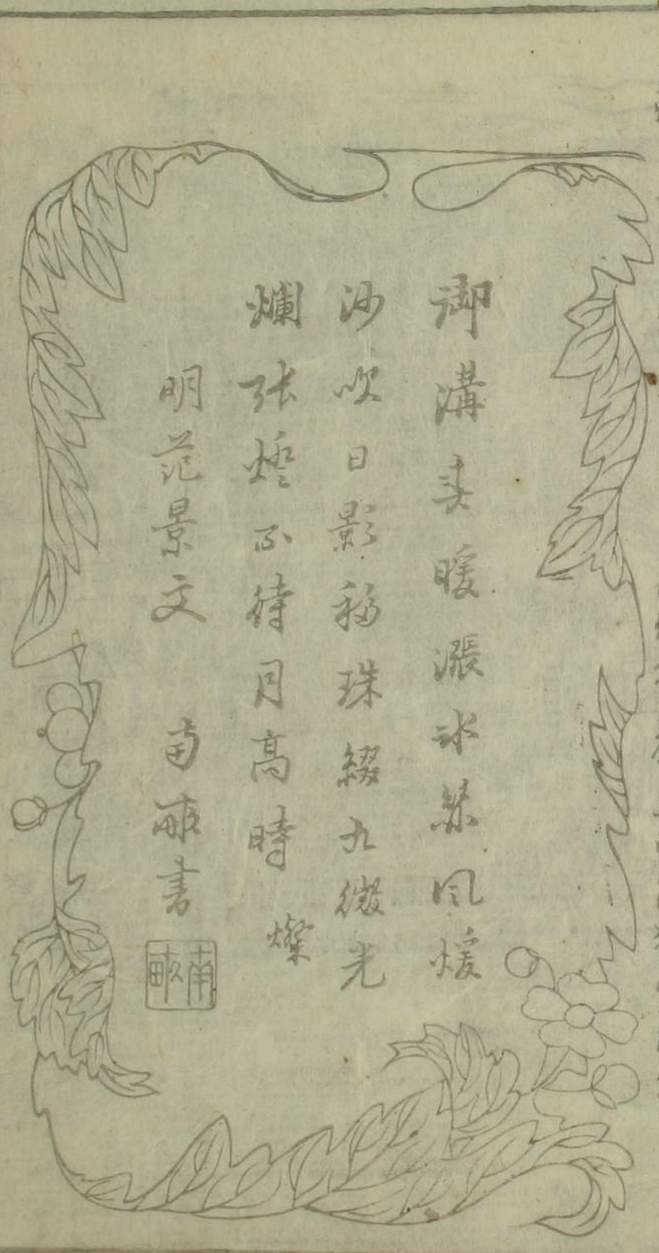
○四牌楼より东ぇ向ひ小街ぇ至るを漢軍の頭参領ぇ属せる佐領五人の居址とん小街より



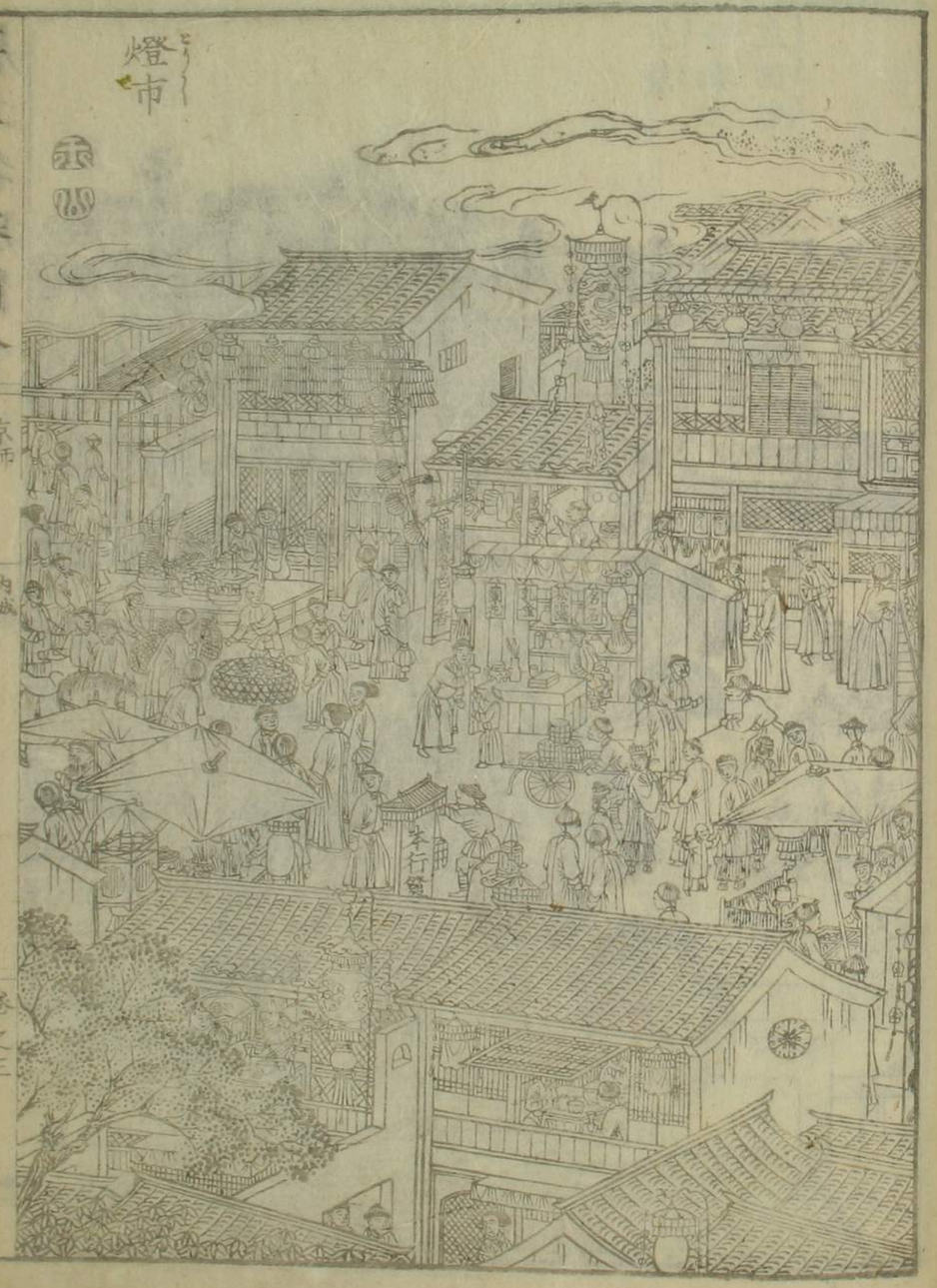
朝陽门ぇ至るまでを漢軍の二参領ぇ属せる佐領七人の居址とん祿米倉周圍の啞巴胡同方家胡同を漢軍の三参領ぇ属せる佐領七人の居址とん小街の東史家胡同乾麪胡同小啞巴胡同を漢軍の四参領ぇ属せる佐領七人の居址とん羊尾巴胡同石大人胡同羊乙寅胡同總把胡同を漢軍の五参領ぇ属せる佐領五人乃居址とん凡漢軍鑲白旗乃参領五人佐領二十五人軍丁六千六百人三軍合て三万九千余人朝陽门内護衛の屯兵とん

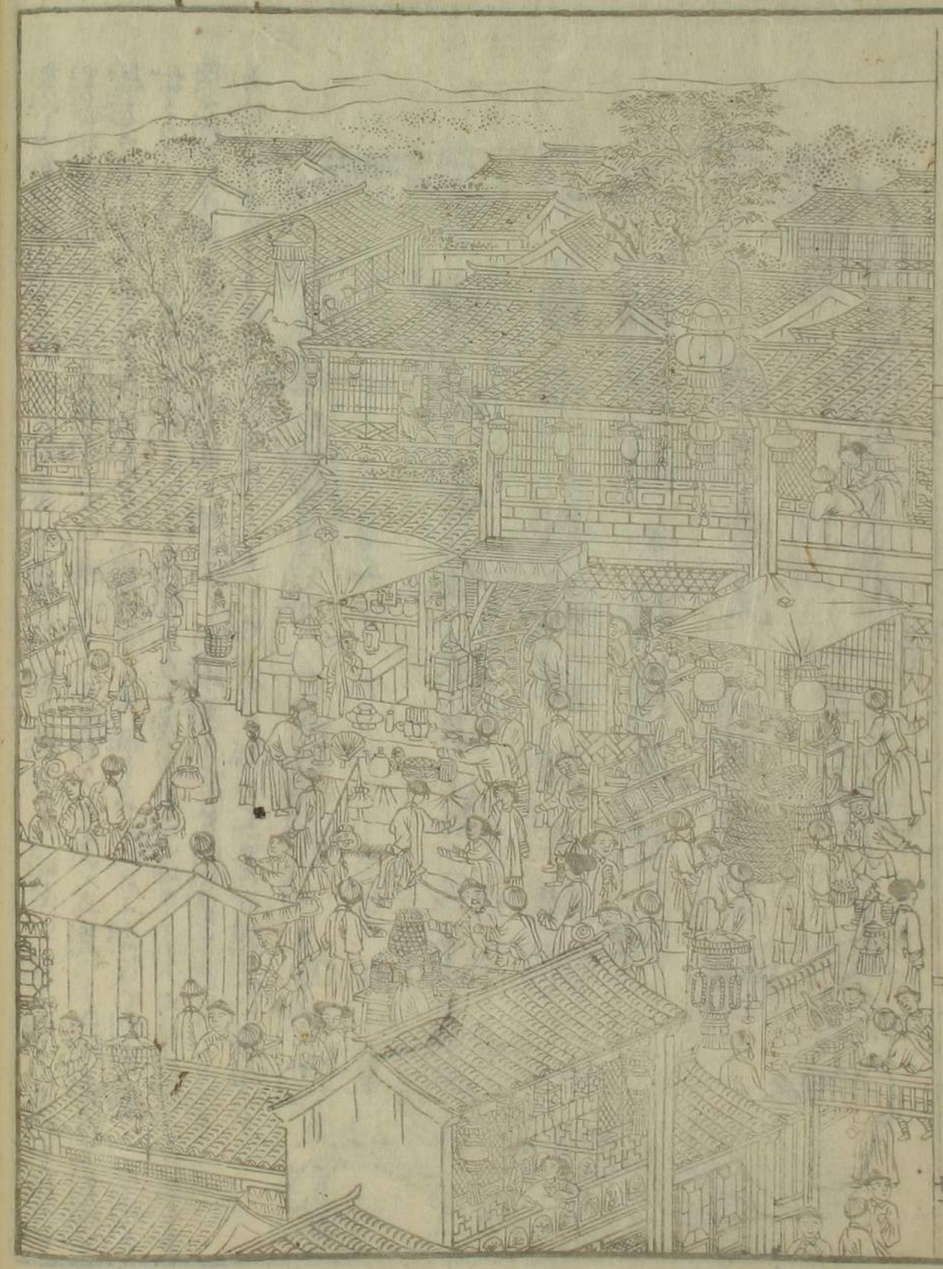


○王府街　皇城の東安門外南の街なり。明の永樂十九年、十王邸を建圖じ玆に
八王三百六十餘の豪徳の國公等の府三百を擇定めらるゝ處なり。
○會同館　王府街よりあり。在京の
諸蕃の名ある驛亭なり。○豫親王府　東單牌樓の西
三條胡同よりあり。○寧郡王府　東單牌樓の
北大街にあり。
○正覺禪寺　皇城東安門の東南。
大頭胡同よりあり。○橋竿寺　東安門外南府胡同よりあり。雍正十二年
此寺にて飯を施し粥を施し藥を施し給ふ。
施飯寺ともいふ。○賢良寺　東安門外南府胡同よりあり。雍正十二年
世宗憲皇帝御製の碑及び乾隆帝御
書の心經あり。○崇真萬壽宮　蓮葉胡同よりあり。元の至元間造建し猴留孫眞人
の眞人相嗣いで此宮に居り。猴留孫を祀て擧げていふ。また神仙華相の相あり。
宮前眞人
猴留孫天師より終に都の地に住ゐ
しより、此宮を建て猴留孫が居
室と定めり。世人皆猴留孫を天師の孫と稱す。○嶽白旗蒙古都統署　東安門王府大街の東崇文衙の西にあり。二里許
の間兩廂にわかれ一一連りうち、
化華門内に時憲書を頒つ處此寺と建甚分
翻譯揮師と往ゐせしむ。○燈市　東安門王府大街の東崇文衙の西にあり。二里許
の間兩廂にわかれ一一連りうち、
凡猿玉器等より一切日用の雜物まであらゆる品を賣る。燈市の
名あるをもて夜に入れば燈火を掛ならべ、
其あたりの婆童の袴を拾ふもの心得ありて
[illegible]

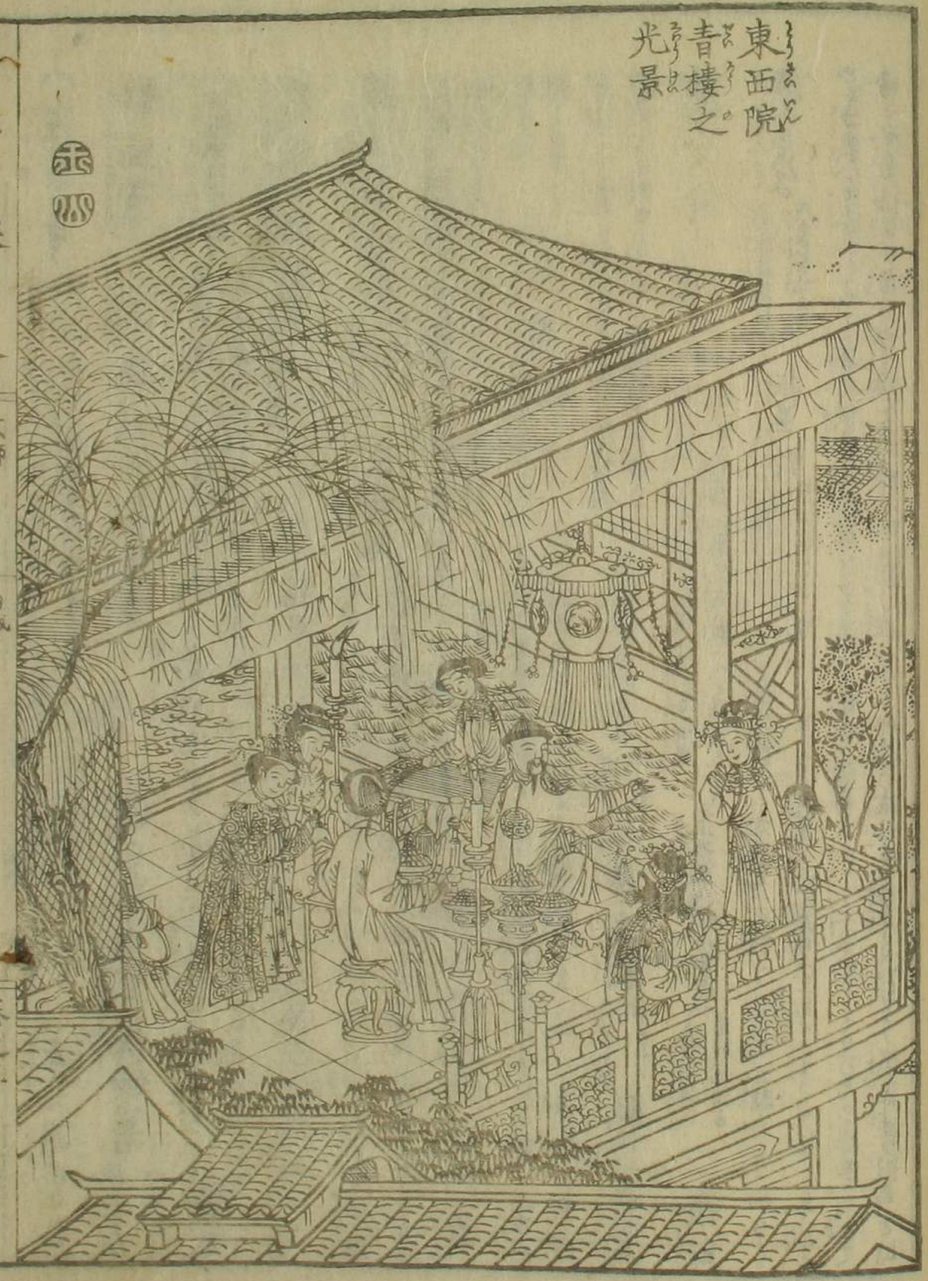


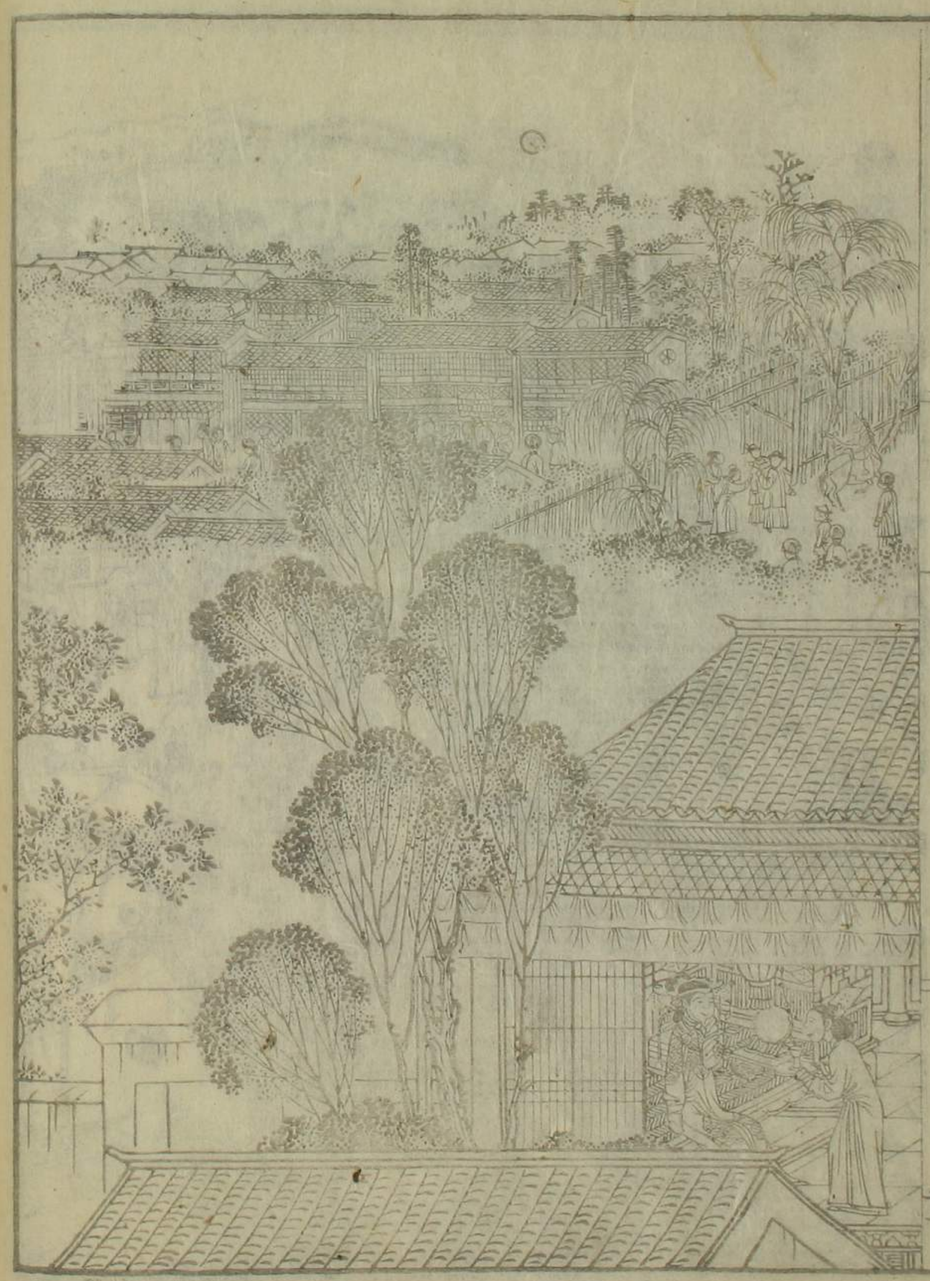
燈市（とうし）





東西院青樓之光景





○法華寺 豹房胡同にあり。明の景泰年中、大監劉通といふ者、自ら宅地を捨て建る所也。天啓間范経画書と編人又学士葉立椿の碑あり。○正白旗蒙古都統署 ○正白旗漢軍都統署 共に豹房胡同にあり ○鑲白旗護軍統領署 錢市胡同にあり ○報恩寺 錢市胡同にあり。寺内に大鐘一あり。明の宣徳の字を鋳る。天啓の間寺号を崇寧寺と改む。又小鐘一あり。報恩寺と鋳る。大鐘は其より後に鋳るなり。○鑲白旗漢軍都統署 炒豆胡同にあり ○左翼前鋒統領衙門 本司胡同にあり ○正藍旗滿洲蒙古漢軍三都統署 燈市口胡同にあり ○東西院 燕華坊の東院本司胡同にあり。本司とは教坊の事也。京師の倡妓東西院籍にて教坊に隷し、宣徳の遺民なり。其東院の妓女は隠れて籍とし、西院の妓女は琵琶をいれて籍とす。此両院は勲戚の人の狎ざるところにして、貴遊の子弟と同く燕飲することを禁なり。○鑲白旗滿洲都統署 燈市口大街にあり ○二郎廟 燕華坊の燈市口大街の東にある小殿なり。二郎神は秦の蜀将李冰の子也。曾て離堆江を鑿て功あり。蜀の民祀て李二郎を祠る。清の雍正五年詔して李冰を敷澤興濟通祐王に封じ、李二郎を承續廣惠英顯王に封ぜらる。既に康熙の間重修す。○左翼宗学 燈市口にあり ○雙忠祠 石大人胡同にあり。乾隆御製雙忠の詩の碑あり。都統一等伯諡襄壮傅清・左都御史贈一等伯諡壮果拉布敦二人を祀る。○正藍旗官学 東四牌楼の南新開路にあり ○鑲白旗官学 齊化牌楼胡同の内務府坑にあり ○銅馬坊 朝陽門の外にあり。姜容隱といふ者驊騮一疋を飼う。其毛色雪白なり。愛して年を重ること十九年。後是に騎り、力衰へども老者いよく寿し。僕其馬の霊あるを感じ、鮑氏が驄馬に比し、工に命じて其馬の像を銅にて鋳させ、自ら讃の辞を作り、頌を其像の側に刻り誇しむべし。此像の成日、其馬俄に死せり。僕即其銅馬をとりて此地に葬る。依て銅馬坊の名あり。今其銅馬亡び、其古地も又其事はあらはにして、西直徳勝二門の外なるべしと呉長元が宸垣識略にはいへり。いづれ其詳ならざるを以て、此に記して好事者の考に備ふ。

郡國志云。薊城南北九里。東西七里。開十門。燕慕容儁鑄銅為馬。因名銅馬門。

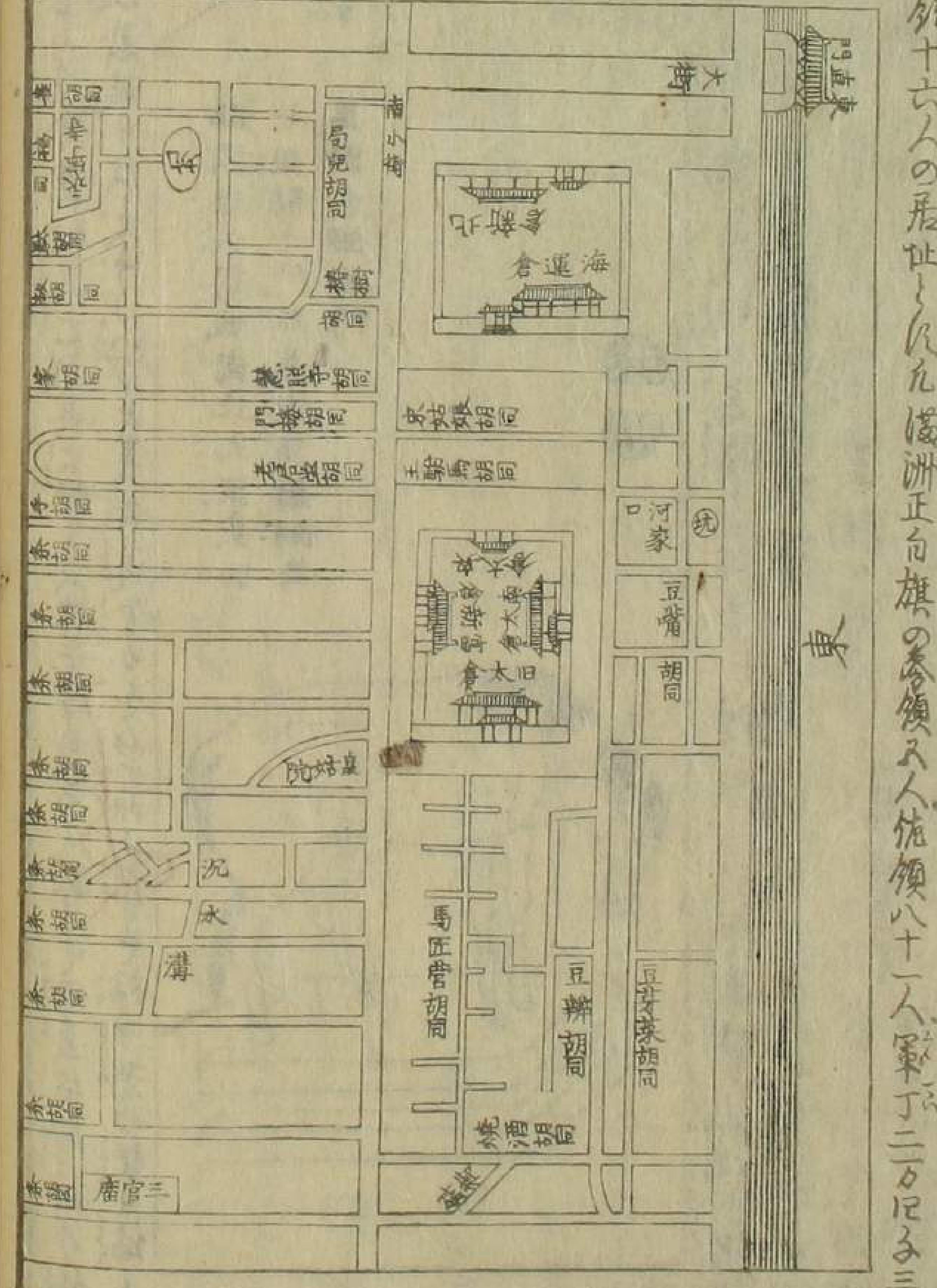
○關帝廟 羊尾巴胡同にあり。殿一あり。明の萬暦乙巳の年修る所なり。又碑一あり。是も萬暦癸丑の年建る。○維摩庵 燕華坊の小經巴胡同にあり。明の元亮詩が碑あり。○清泰寺 大經巴胡同にあり。明の正徳の間清泰の額を賜ふ。文嘉靖中鴻臚寺序班王璋が重修のいしぶみあり。○寶慶寺 燕華坊にあり。元代の古跡。雍正の間再び修あり。○智化寺 燕華坊の祿米倉の東にあり。明の宦官王振が建る所なり。天順の間詔して王振が像を作りて寺中に置けり。清の代となりて御史沈廷芳といふ官人、王振は元圜の罪あり、何ぞ像を作りて祀ることとせんやと、其像を毀つ。又寺より西に石碑二あり。明の武宗の遺址といふ。○祿米倉 南小街にあり ○正白旗官学 朝陽門の内南小街新鮮胡同にあり ○證因寺 南小街竹竿胡同にあり。明の天順六年の碑一あり。○老君堂 朝陽門の内南小街路ひがしにあり。以上朝陽門内鑲白旗護衛の界とし、以下は東直門内正白旗護衛軍の居址とす。

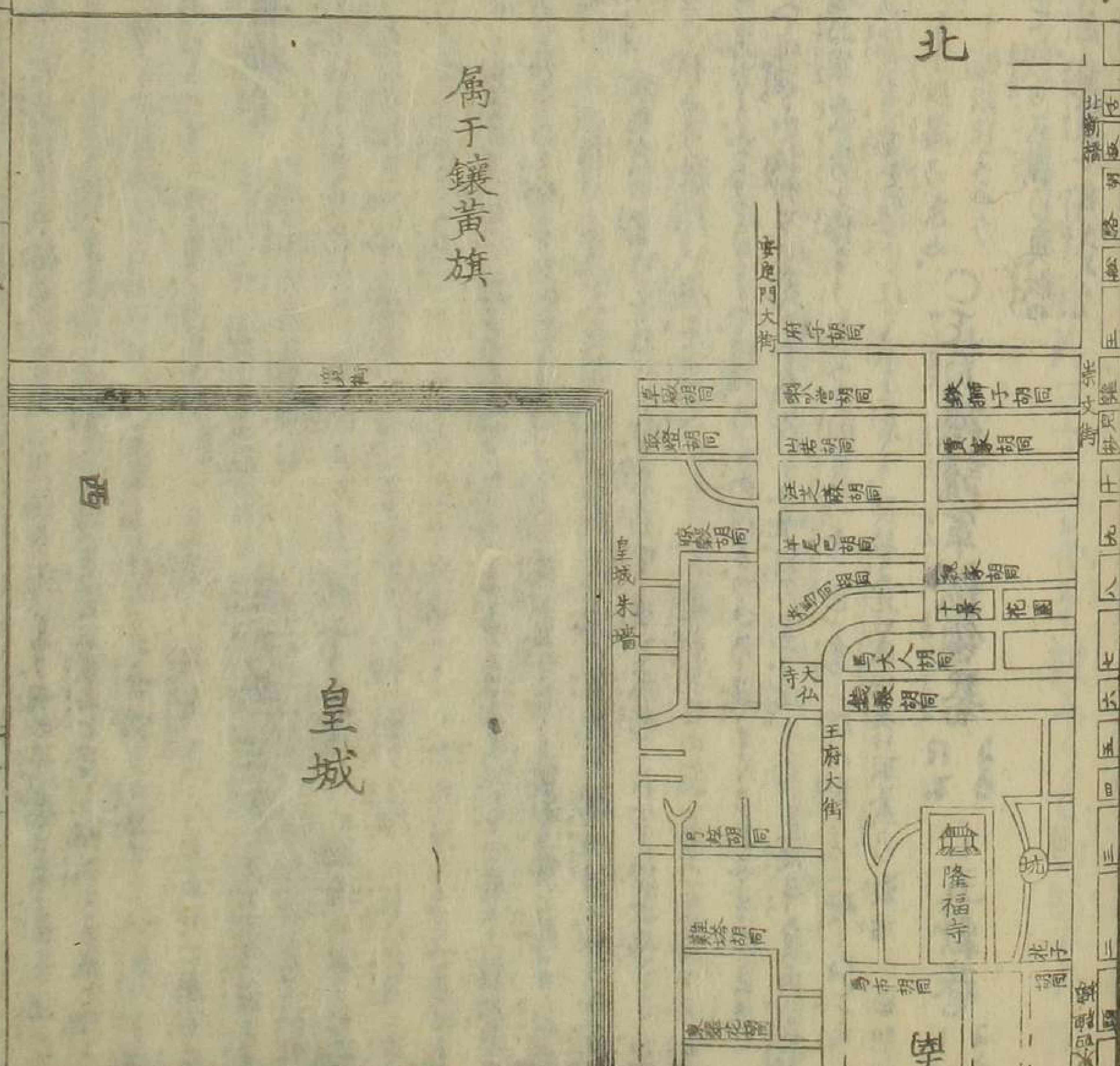
正白旗居址

満洲蒙古漢軍三の正白旗、鑲黄旗と界を接るなれ。府学胡同より南へむかひて牌楼、豹房胡同をきはめ、摘花胡同、循大街より大佛寺の西小の角へいたるまでを満洲の頭参領の属せる佐領十七人の居址とし、大佛寺西小の角より豹房胡同の西口をきはめるまでを満洲の二参領の属せる佐領十六人の居址とし、皇城東辺の寛街、芝麻胡同、取灯胡同、嗦嚢胡同、弓弦胡同、双塔胡同等を満洲の三参領の属せる佐領十六人の居址とし、両大街にあるなれの鐵獅子胡同、賈家胡同、汪芝麻胡同、魏家胡同、十景花園、馬大人胡同等より老児胡同、喇叭営にいたるまでを満洲の四参領の属せる佐領十六人の居址とし、馬市口より東にむかひて牌楼、隆福寺の周圍にある細小胡同にいたるまでを満洲の五参領の属せる佐領十六人の居址とし、凡満洲正白旗の参領五人、佐領八十一人、軍丁二万凡そ三百人なり。

○府学胡同の東口より大街にいたりて北へまがりて又條胡同にいたるを蒙古の頭参領の属せる佐領十五人の居址とし、又條胡同より牌楼にいたるまでを蒙古二参領の属せる佐領十六人の居址とし、凡蒙古正白旗の参領二人、佐領二十九人、軍丁八千七百人なり。

○新橋大街より東直門にいたるを漢軍の頭参領の属せる佐領十人の居址とし、新倉、海運倉、興平倉、南新倉、舊太倉、富新倉の六倉門に相近きあたりを漢軍の二参領の属せる佐領十人の居址とし、東直門の南小街の北口より板廠胡同にいたるまでを漢軍の三参領の属せる佐領十一人の居址なり。小新橋大街の六條、七條、八條、九條、十條胡同を漢軍の四参領の属せる佐領九人の居址とし、小小街の頭條、二條、三條、四條、五條を漢軍の五参領の属せる佐領九人の居址とし、凡漢軍正白旗の参領五人、佐領に十九人、軍丁一万に七百人なり。満洲蒙古漢軍の三軍都合に万七千七百人なり。





○大隆福寺 仁壽坊の東、牌樓の大市街の西、馬市の北、隆福寺街にあり。明の景泰三年、景帝詔して一万の人夫を揚ひて是を建て、且先帝英宗の饗を廃し人を南内の木石を穿ち翔鳳等の殿を毀ちて其白石の基圍を移して此隆福寺を建立せしむ。雍正帝御製の碑あり。○毎月九日十日の両日此所に市あり。商賈軒をつらね名付けて廟市といふ。又京師の諸市此所にまされる者なし。○善徳寺 俗大佛寺と称し、王府街の小米市の西に稍南にあり。○順天府儒學 教忠坊府學胡同にあり。此地旧の報恩寺といへる刹なり。元の季此寺破壊して僧あり。相議して湘潭の地に移り材を募り材を集めて京に帰り既に修理を加へ其の造営いまだ半ばならざるに明の軍京師に入り元の且士卒よりはじめて曰く孔聖の廟なりと、此寺は擾りに乱れをくらべこと所にて此寺修造まりて安全せん。寺僧明軍の命を受けて孔聖の本像と儒者を寺中に安て孔聖の廟と称し是を他の佛閣多く乱妨せらるといへども此寺のみ全きをたもつ。故に明朝統一の後ぬさく佛像を除き秋に遂に儒學と為すなり。○文丞相祠 府學胡同にあり。文丞相は文山と号し元明の宣徳の間有司に命して春秋両度の祭りをなさしむ。景泰中、遂と忠烈とたまふ。其の像を改めて丞相の衣冠せし姿に彫り代へ、清朝に謚を忠肅とたまふ。元歴代忠臣の祠と其一不の府尹の祭るところなり。近世も祭典して祭る事甚なりといへども此祠の祭祠まつるの儀なくこれをまつる。文山が若く日様の書相伝へて此祠にて板刻せしが其石も今にならびて唯祠の青きに破れる屋の三間斗なる内に衣冠まする座像あり。唐の雲麾将軍李秀が像あり。則唐の李邕が書る碑の断たる二礎となして像置。秘に文丞相の石刻の像あり。燕を報てこれを銘を刻す。其銘に孔曰成仁孟曰取義の数語を彫刻む。

○正白旗覺羅宗學 東に牌樓の東北十條胡同にあり。○正白旗護軍統領署 同所にあり。○五嶽菴 同所にあり。明代羽士ここに居りて玉を入れて僊ある五嶽の眞形の圖を供せり。嘉靖間工部侍郎張憲が碑文あり。

○大慈延福寺 思城坊東直門大街にあり。明の成化年中に建る所也。乾隆三十六年重修ありて御製の碑あり。○天地水府の三元神を祭る。

朝陽門 内城東の大門なり。元の代には齊化門といふ。明の正統年中今の名に改む。元の代の末乃時明の大将人を遣して元朝の臣丁好禮といへる者を召出し、好禮義を守りて肯ず。終に明の兵士等強ひて好禮をとらへて東に来らせこの齊化門まで至りしに好禮縊れて死せり。○元の代寅賓里の大廟の西に安祭寿房といへるあり。居士房安正の建る所なり。居士は山陽の人なり。至元の間乱あり兵の為に駆られて開平といふ所に至る。唯其老母ありて相別るゝの悲みしに朝夕南方を望みて歎くこと間なし。是より葷酒を絶て佛を念じに至りて遂に寺乃僧禅師の名を学ぶ。後母の死しありしを聞て安祭寿房を建てて亡母の菩提を弔ひ其いとまある時は母と父の圖にありて念ひつゝ恭木を植て世を楽しむ。至元二十七年四月廿日沐浴し衣を改め頭を剃りて佛の来迎を待つ。時に空中より白き虹あらはれたちまち房中に至りて翁のごとし居士端座拱手して逝去りぬ。安祭寿房も廃して今なしといへども翁の寓し寅賓里といへる地は今の思城坊の東にして此所なる安寿房の旧地なるべし。

○正白旗滿洲都統署 老君堂胡同にあり。○六倉 南新倉 舊太倉 富新倉 再平倉は倶に朝陽門の内小街の北。海運倉 小新倉は小街の西。東直門の近きにあり。

○慧照寺 小街の北口にあり。其巷を慧照寺胡同といへり。明の成化中傍延信といへる者、永寧伯譚氏が私宅を棄て是を建る。

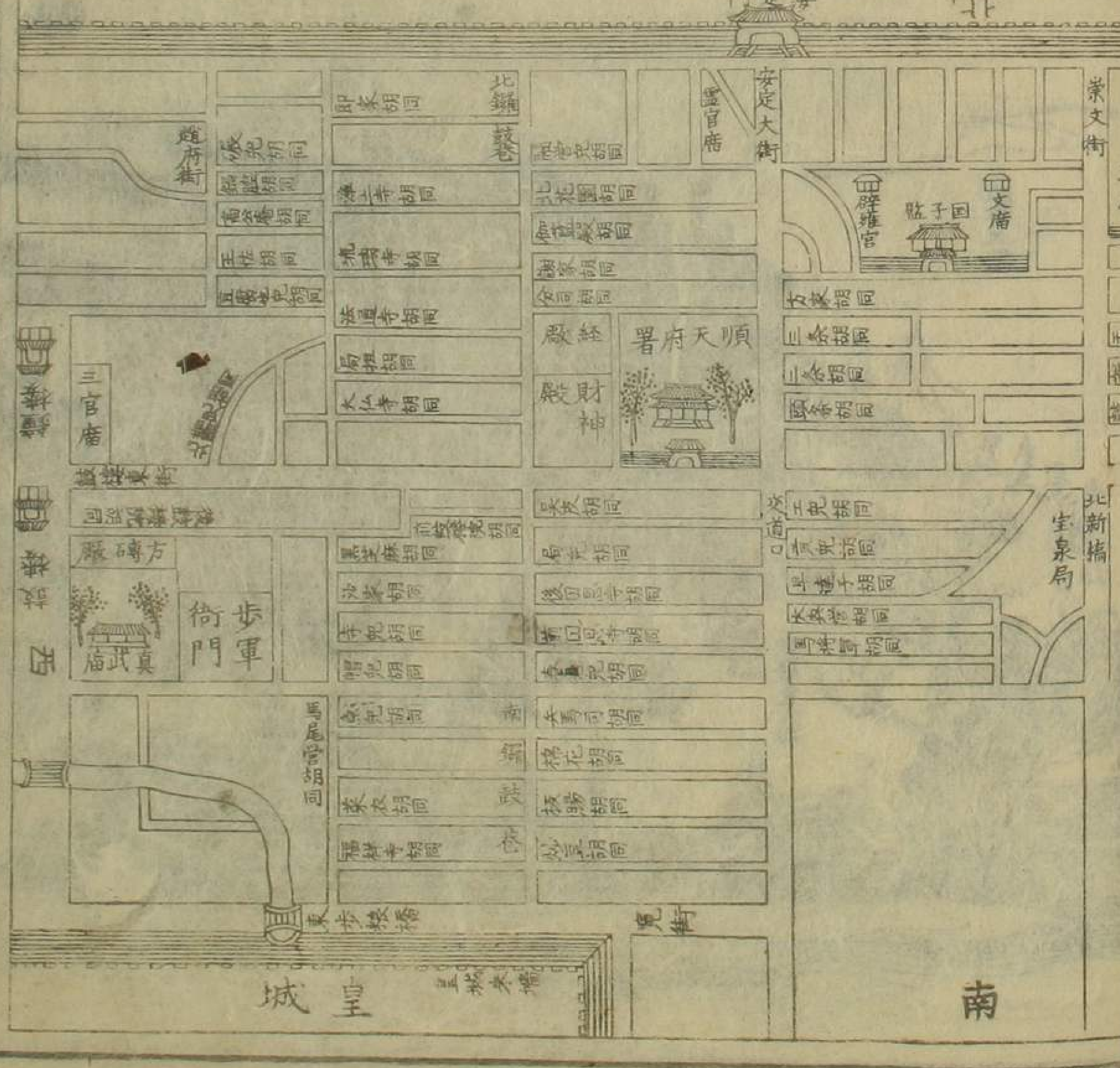
○以上東直門内正白旗護衛の界とし、以下は安定門内鑲黄旗護衛軍の居址とし

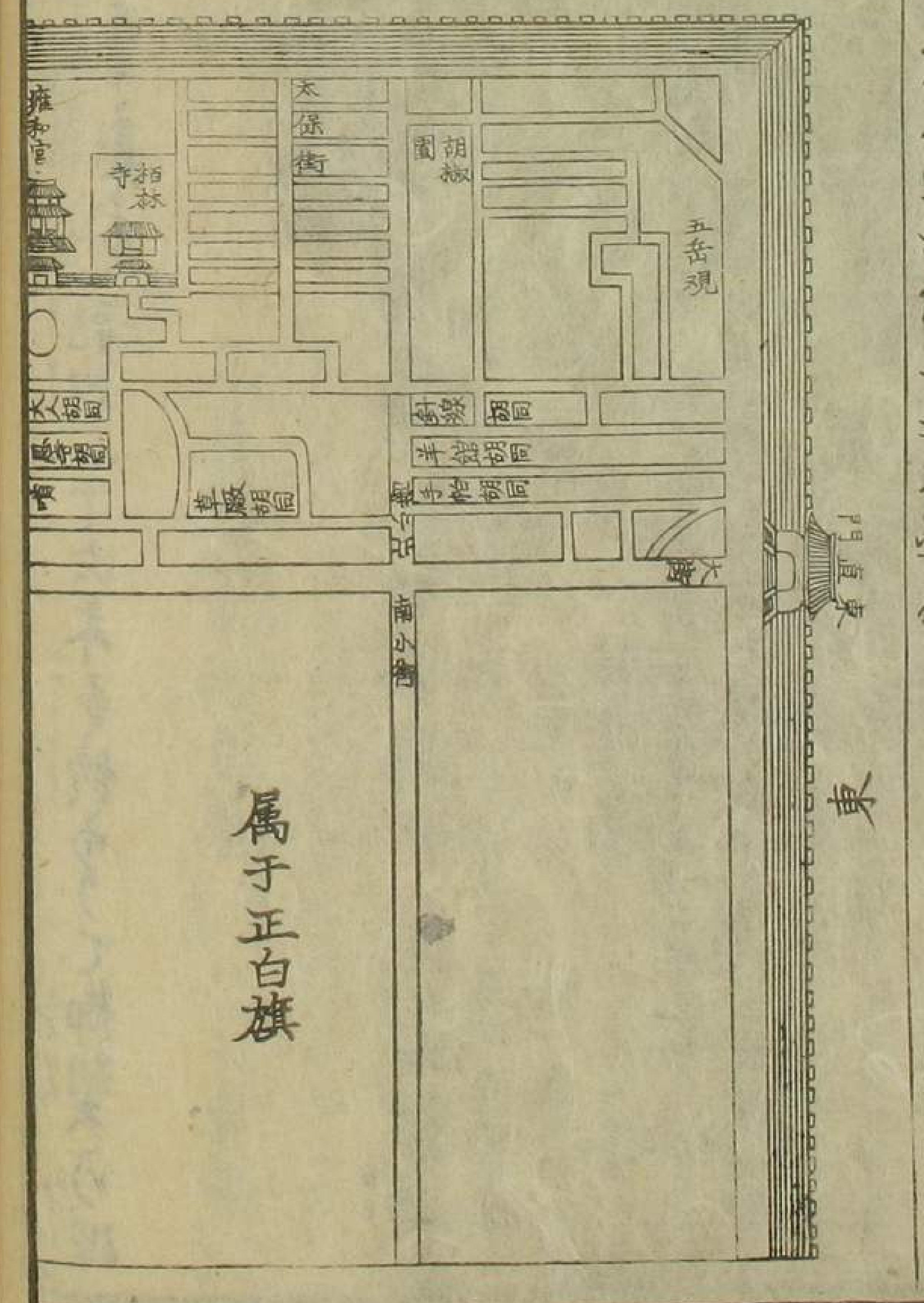
○鑲白旗正白旗の下に解府第寺院廟祠等其説の記すべき多くあれども皆略して此に載せず。

鑲黄旗居址　満洲蒙古漢軍三の鑲黄旗ハ鼓楼より東にあたり、新橋にあり。新橋大街の北口、城根より南にあたり府学胡同にいたる。正白旗と界を接ゆゑに鼓楼より東にむかひ大街にいたりて経廠にいたるまでを満洲の頭参領に属せる佐領十七人の居址とし、経廠より交道口にいたるまでを南に循り棉花胡同にいたるを満洲の二参領に属せる佐領十七人の居址とし、南羅鼓巷の北口より南口にいたるを満洲の三参領に属せる佐領十八人の居址とし、交道口大街より東にむかひ新橋に往ひ南に折し香児胡同にいたるを満洲の四参領に属せる佐領十七人の居址とし、香児胡同の東口より南にむかひ府学胡同より鐵獅子胡同にいたるを満洲の五参領に属せる佐領十七人の居址とし、凡満洲鑲黄旗の参領五人佐領八十六人、軍丁二万又千八百人なり。

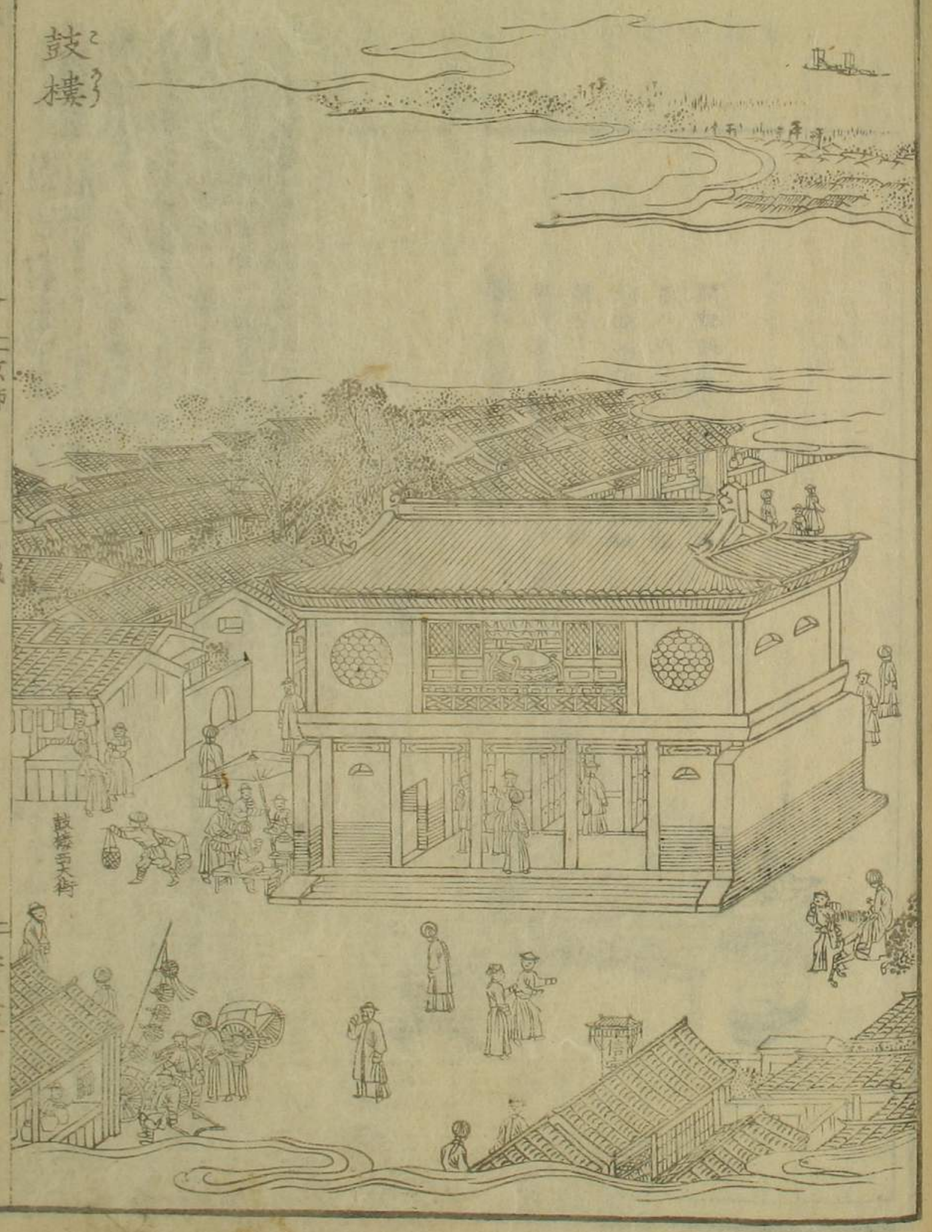
○交道口大街より北にむかひ安定門にいたるを蒙古の頭参領に属せる佐領十〇人の居址とし、小羅鼓巷より西辺にいたるの仍海胡同・経擬教子胡同・伽藍殿・法通寺・浄土寺・豆腐池児胡同・高古菴・郎家胡同・碾児胡同を蒙古の二参領に属せる佐領十〇人の居址とし、凡蒙古鑲黄旗の参領二人佐領二十〇人、軍丁七千三百人なり。

○新橋大街より北にむかひ方家胡同にいたるを漢軍の頭参領に属せる佐領十〇人の居址とし、方家胡同より北にむかひ城根にいたるを漢軍の二参領に属せる佐領十一人の居址とし、国子監の東後頭條二條三條胡同・方家胡同・国子監大溝巷・蕭家胡同にいたる漢軍三参領に属せる佐領十二人の居址とし、柏林寺の東の鼓楼胡同・東廠王大人胡同にいたる漢軍の四参領に属せる佐領十一人の居址とし、小街の南口より城根の胡椒園の周囲・香餌胡同・緑線胡同を漢軍の五参領に属せる佐領十一人の居址とし、凡漢軍の参領五人佐領十三人、軍丁一万五千九百人なり。満洲蒙古漢軍合して四万八千九百人なり。





鼓樓



○鐘樓　今皇坊の東にあり。昔の鐘樓は今の護國寺の中にあり。明の永樂年中の建。其後火災に罹り、清の乾隆十年改建。南ホの御道最廣濶なるを以て八溝に水の多き。毀壞高明東西凡六丈餘、二層にして各三間あり。上層に掛る所の鐘は、其形容きりゝとして壯く、聲遠く響き、布爾宇哈蒙古の語にて佛のこと。像の面を刻りたるを以て名づく。

○慈善寺　皇坊の東にあり。明の永樂年中の建。其後火災に罹り、清の乾隆十年改建。

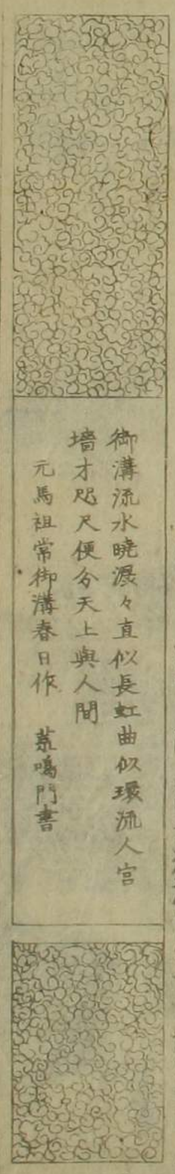
清の聖祖皇帝御書の額あり　○顯佑宮　皇城地安門の西にあり。真武の神を奉祀。明の永樂年間の建。成化間修造。清朝雍正九年重修。額併に御製の碑あり。

乾隆帝御書の額并に御製の碑あり　○萬寧寺　皇城地安門の西にあり。明の永樂年間の建。成化間修造。清朝雍正九年重修。額併に御製の碑あり。

○後殿　正殿の北にあり。三間基九尺、高一丈五尺。左右各七間。

○步軍統領衙門　後殿の東にあり。三間、門の外に牌坊を建つ。

○萬寧橋　後樓の南にあり。澄清閘より流れ、即今後門橋と稱す。水源西北河より來り、東南に流れ、積水潭に注ぐ。



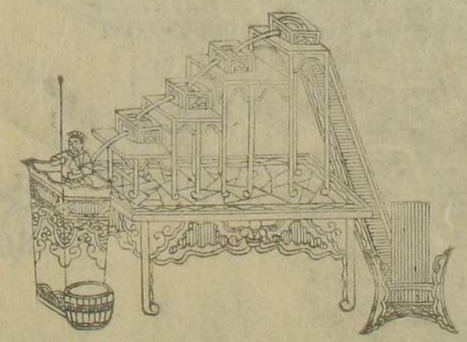
御溝流水曉潺々直似長虹曲似環流入宮墻才咫尺便分天上與人間

元馬祖常御溝春日作　葦鳴門書

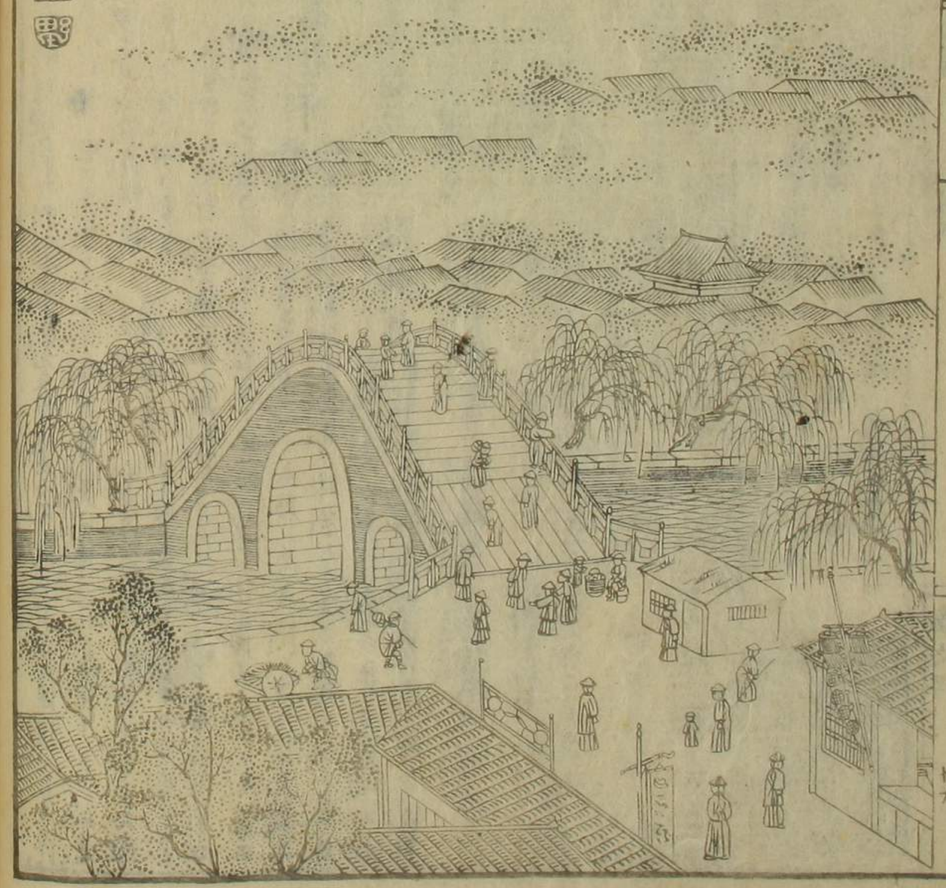
○鼓樓　地安門の內にあり。昔は皇城の上に有りて俯して鐘樓と對峙せり。今は皇城の下に在り。其製梯を以て登る。其の高さ數丈。時辰香十炷を燃して刻漏を測り、以て時を報ず。

○鼓樓の都城の中にて最高き所なり。南海、北海、瓊華島、萬壽山、西山、玉泉山、香山、碧雲寺、黑龍潭、白塔山、玉河、紫禁城、皇城、內城、九門の內外、一望の中に在り。

漏刻之制為銅漏壺四上曰天池次曰平水又次曰萬分下曰收水中安銕神設機械時至則每刻擊鎖者八以壺水漏為度漏則隨時增添冬則用温水云



萬寧橋



○福祥寺 鼓樓坊の北にあり。舊名は慶元寺と號す。明代の碑二あり。

○文昌宮 鼓樓坊の西にあり。舊名は西廣慕廣の祠堂なり。

寺 明の正統の間、今其堂宇順天府治の西にあり。明の正統の間、

佛寺 右祥寺の号を賜ふ。德勝門の北小石佛寺。

○寶珠菴 舊名は慈悲庵。

○徽黃旗官學 北鑼鼓巷にあり。

○法通寺 佛寺。

清朝康熙年中修營を加へ、淨業寺と改稱す。

順天府署 鼓樓の東靈椿坊にあり。

書の額あり。肅清畿甸と云。

天心堂 順天府署の後にあり。

○劉猛將軍祠 順天府治の西にあり。

○靈椿坊 北城の民家を繞る坊なり。是は古靈椿坊なる城の西にありしといふ。又涿州にありしともいへり。今北城の靈椿坊は疑くは元代竇十郎が旧宅成べしといへり。

元 張翥 買屋靈椿坊詩

五槐濃緑蔭門前東宇西房十數椽不是衰翁買屋住歸時留作催船錢。

○鑲黄旗滿洲都統署 安定門大街交道口にあり

安定門 内城北の東にある大門なり。元代安貞門といふ。永楽の間今の名にあらたむ。安定門の内道に南教忠坊あり。秦の薊縣の地なり。遼は此地を析津といふ。金は大興といふ。元明清皆大興といふ。○鑲黄旗漢軍都統署 安定門の大街にあり ○大興縣署 安定門内にあり ○鑲黄旗蒙古都統署 小新橋大街にあり ○鑲黄旗覺羅学 安定門胡同にあり

○宝泉局 小新橋南大街の路西にあり。後に瀋陽倉になる。○柏林寺 安定門の東南教忠坊にあり。小新橋の路西にあり。唐の開元年中に建る所の古刹なり。明の代勅して崇明寺といふ。清の乾隆三十年重修し勅して慈壽寺と改め給ふ。○國子監 成賢街にあり。元の代の旧学なり。明の永楽の間改て國子監といふ。中を彝倫堂といふ。康熙帝御書の額 御製聖廟の文 雍正帝御書の額あり。文行忠信といふ。東の廊を繩愆廳とし又數房あれば別に率性堂 誠心堂 崇志堂あり。西を博士廳とし又數房あり。修道堂 正義堂 廣業堂あり。及び乾隆帝の宸翰なり。又御製の碑あり。○凡國子監祭酒滿人漢人名一人司業官滿蒙古漢人名一人ありて成均の法を掌り以て國子及び後選の士に教ふ。又監丞官あり学規を掌り 博士官あり經説を闡明にし 典簿官あり簿書を掌る。典籍官あり文籍の出納を掌る。滿漢の學官あり。又八旗官学あり。

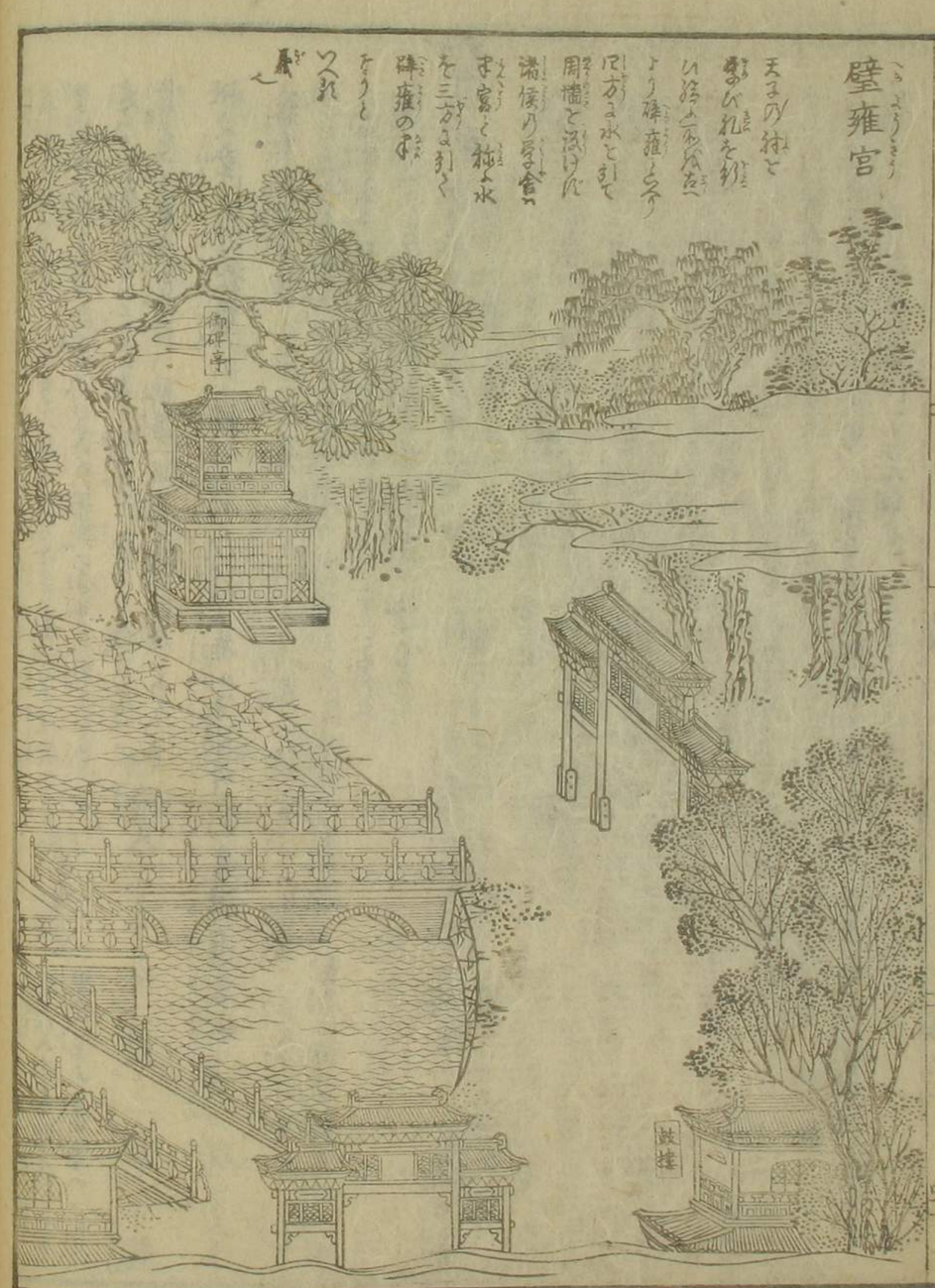
官滿人十六人蒙古八人を置て八旗の子弟に教ゆ。又法館あり。學生らに算法を教ゆ。俄羅斯学あり。俄羅斯の子弟を教ゆる事を掌る。辟雍宮 乾隆五十年辟雍宮を國子監の集賢門の内に建らる。宮制は正方にして宮の周り環池あり。橋四ツを架し丹墀をうつし旅樹の瑠璃の牌樓一 碑亭二 鐘鼓樓二あり。乾隆五十年春二月上丁皇帝親ら此に幸して釋奠の禮を行ひ終て御製國學新建辟雍圜水工成の碑を記あり。又釋奠の後新に辟雍に臨み講ずる御製の詩に有及び御製三老五更の説あり。此に勅して國子監の集賢門の内に藏む。蔵其亭の記 論語の王氏組か丁番宛の諸の石刻 元の代の名の碑三 明代の名を刻せる碑七十六と称む。○國子監の庭上に古柏樹あり 元の祭酒許衡が植る所なり。

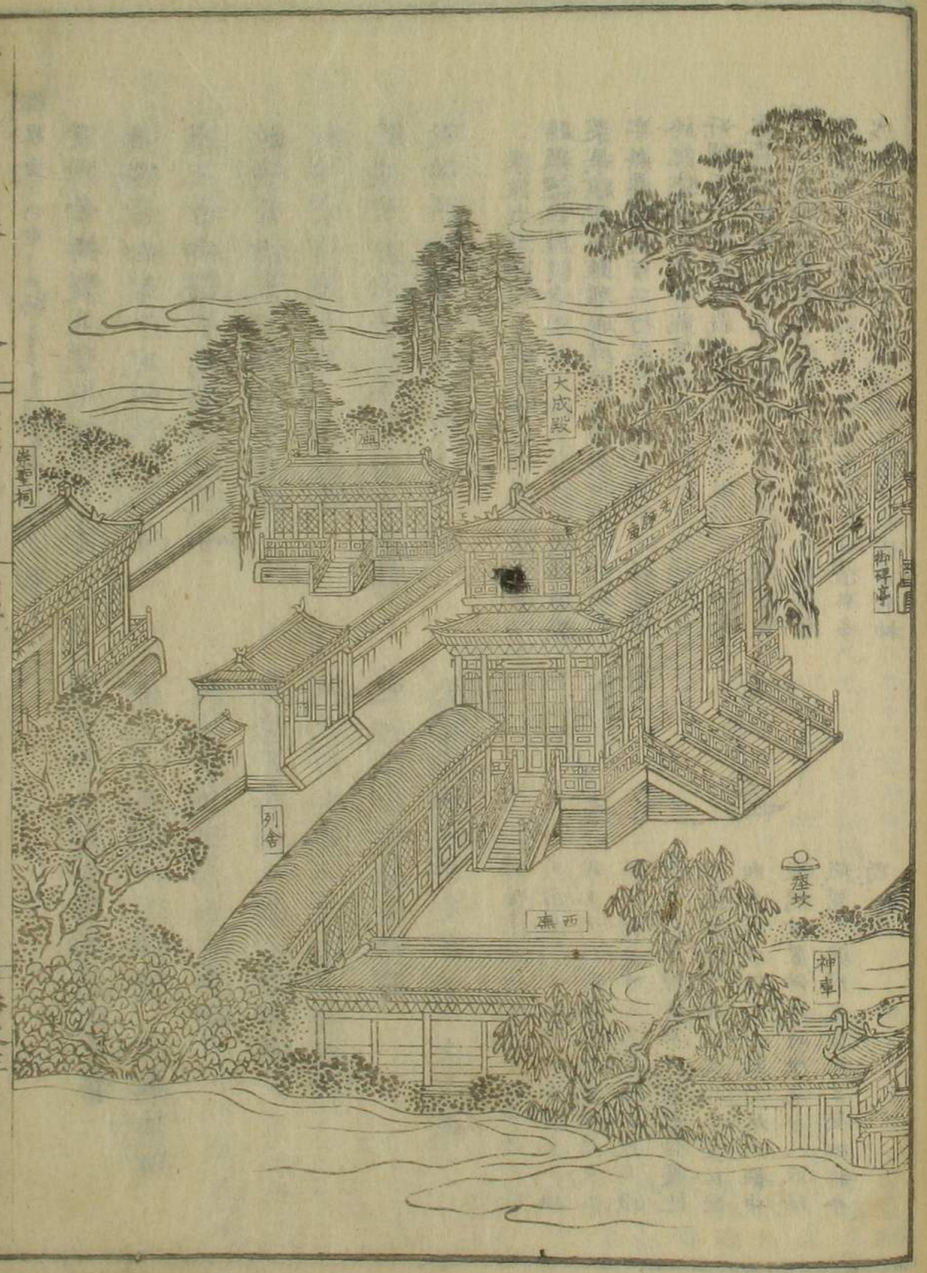
先師廟 國子監の東にあり。南に欞星門 大成門

三間西を持敬門といふ。一間西にむかふ。大成門 五間基石闌中は三門 左右に三の陛あり。右に戟二十口 石鼓十 石鼓の音訓摺一を刻む。右の門名二門内東西の列舎名十一間 大成殿 先師孔子 十哲子思孟子の神位を奉る。殿の廣さ七間基石闌 三の陛 正面は十二級 東西は各十七級 兩廡 各十九間 東と西よりむかふ。殿の東西の列舎名十一間南より西廡の南に燎爐一あり。西北に瘞坎一あり。御碑亭 甬道の左右にあり 又八の亭あり。神廚 大門東の外にあり。神庫 致齋所 又間東西の門の外西にあり。元正殿正門御碑亭は諸黄琉璃の瓦を覆ふ。餘屋は皆しく覆ふとも櫺柱門楹丹飾なり。黒漆に更に又采を施しこうり。崇聖祠 正殿五間東西の廟門三間南に向ひ圓垣一を門とす。門よく西に向ひ元正殿正門は皆しく緑琉璃の瓦を覆ひて其門楹は丹漆なり。廟街門の外東西に下馬牌各一あり。毎歳春秋仲月上丁天子親ら此所に詣で釋奠の禮を行ひ給ふ。○禮器 雷紋壺 子爵 内言卣 康侯鼎 盥盤 雷紋觚 名仲簠 素洗 犧首罍 皆周の代の法物なり。乾隆三十年大成殿の座につらね給ふ。

壁雍宮

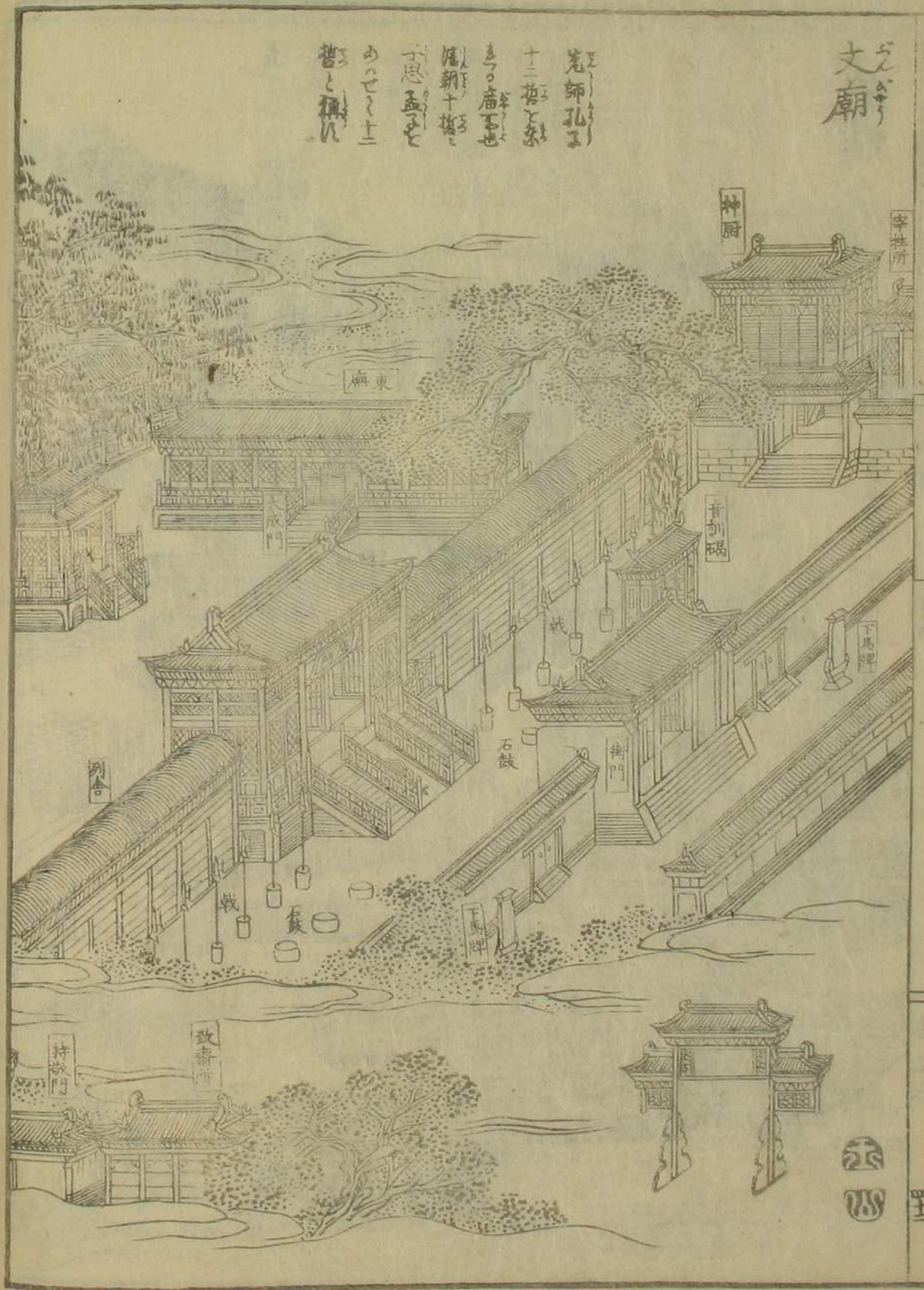
天子の祀と學び礼を行い給ふ所なり
よう雍雍とやわらぐ
四方より水として周圍を流れ諸侯の學舎まで
を三方より引く辟雍のまなり





文廟

先師孔子
十二哲を祀
る。唐の廟号
は貞觀十一
年、太宗、
めいで、十二
哲と稱ス

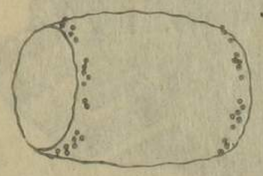


御碑亭の中之れ記す

康熙帝御製至聖先師孔子贊
康熙帝御製平定朔漠告成碑
雍正帝御製平定青海告成碑
乾隆帝御製釋奠詩凡五碑
乾隆帝御製重修　文廟碑
乾隆帝御製平定進噶爾告成碑
乾隆帝御製平定回部告成碑

康熙帝御製顏曾思孟四子贊
雍正帝御製仲丁詣祭　文廟詩碑
乾隆帝御製臨雍紀事碑
乾隆帝御製太學古槐詩碑
乾隆帝御製平定金川告成碑
乾隆帝御製伊犁勒碑
乾隆帝御製平定兩金川告成碑

○陳設大成門内石鼓之圖并吳苑石鼓之歌



明慎蒙名勝記云石鼓在國子監文廟戟門内左右世傳周宣王獵碣凡十辨類風雅字畫蓋籀文大徑尺餘高可三尺其形似鼓而頂微圓初在陳倉野中唐鄭餘慶遷置鳳翔縣學而亡其二宋皇祐間向傳師求得之十鼓乃足大觀中徙開封置辟雍詩康末金人取歸燕置大興府文廟元皇慶初移今所

碑亭　内藏の中の文ヲ抄ス

○陳設大成門内石鼓之圖并吳苑石鼓之歌

辟雍鐘鼓羅俊奇恭瞻六館重皐比廟楹洒掃釋菜畢顧視石鼓環廡墀彭亨菌蠢數盈十刻画文字無虧缺文百二行字五百從甲至癸完無遺始終記述漁狩事中載筆命諸臣詞細文淺刻堅且好閱三千載光娥義曾經次韜受風雨豈用墻負奉籀史草韓二蘇涂大筆助流宝氣長赫曦周宣王時史籀作車攻吉日堪肩隨篇章排比類吉甫体源質古超相斯誰何小儒恣評駁不究根本多然疑先秦西魏駕空說嗤黜欲使成瘢痕自來神物多隱見晚出往々千秋歷局官左氏佑六籍邺侯專門叢訛誅至今首冠甲乙庫儒生摸搨如拳拳撫茲鼓質袁厖厚堋琢山骨窮巖廛雍城々南久托迹蛟鼉鳳鸑環湫辞嚴義密難諷讀句奇語重誰忍維鴻生鉅学莊不識任春烟鎖秋風吹縱敲牧火砭牛角却免摸捐傷皮肌譬如深山石掌確歲月久遠無成虧文王紐在禹追蝕其故豈屋声音為自唐迄今始的據日星雲漢光天造高駝巨艦凡四徃終然巷置文宣祠百靈呵護神作合傳万々世遐無期方今天子開絶学玉函金版皆繙披詎惟鬼辞追雅頌直使鉄畫俳頽芝翻帷丹扆多制作慶雲五色紛葳蕤黄支烏弋遠受吏海外来学航於越戴々髦士拂芹茆軌度肅整趨委蛇聖讃文治四洋溢浩蕩臣邺無津涯誦嵬前制載編牒或按周典揚戈壁威霊宣暢讐函夏琱弓形矢斑陸離従臣才藝敢詩詔稽首拜献成功詩天球琳琅刻金石潤色鴻業華姚姒炳麟煌煒照六合煒然此事有戦司研捜故実更参考名為石鼓良秉宜建康天発石三載豎禹廟嘆苦旁推石形似鼓制非鼓徇迹忘本差毫厘摩挲彷彿古人意定作閲武岐陽碑

○雍和宮

門あり門内に天王殿雍和宮の扁額あり後に永佑殿ありて永康閣あり○雍和宮の西の後に周帝廟あり石の観音数体を安置す後に堂あり中の後と如き室と如き室と二室と五間堂と其後に延邊西洋樓閣の如き高臺あり○小長房ありて雍正帝の御書の額あり高右梅林と云即康熙帝の宸翰也

○梅林寺

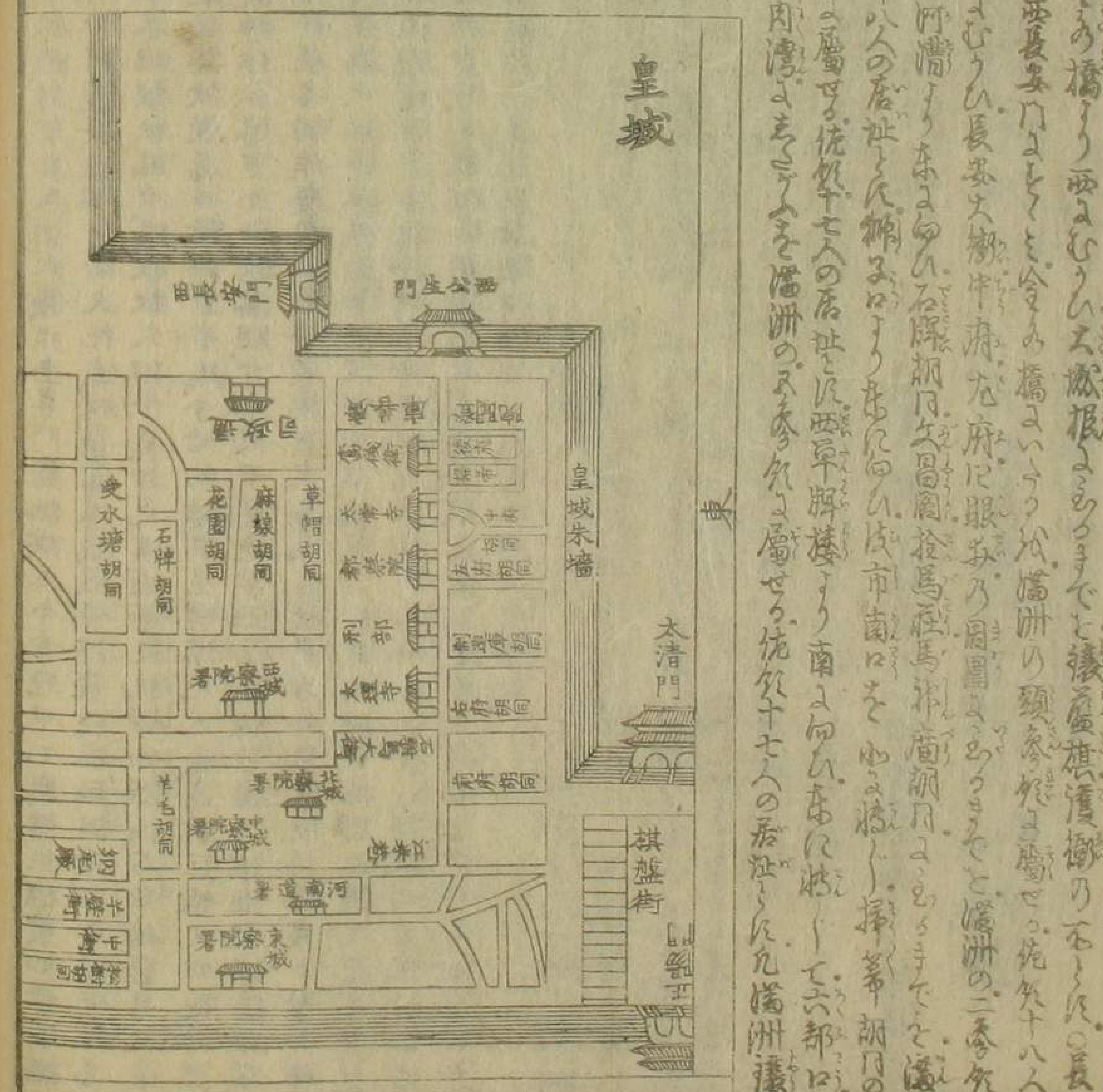
國子監の西にあり雍正帝の潜邸なり今雍和宮と称す近代慶際の両修餘殿の額し皆雍正乾隆両帝の御書なり乾隆の間重修ありて御製の碑あり○西に幻影室ありて御製の碑あり○五岳観五岳観所々にあり観の東科給多中吳文煒が創建する所也

東直門　内城東の中の北の門なり　○　以上北京の門内濃黄瓦濃漆塗扉の男なり以下皆濃黄瓦門内濃漆塗扉の若干なり

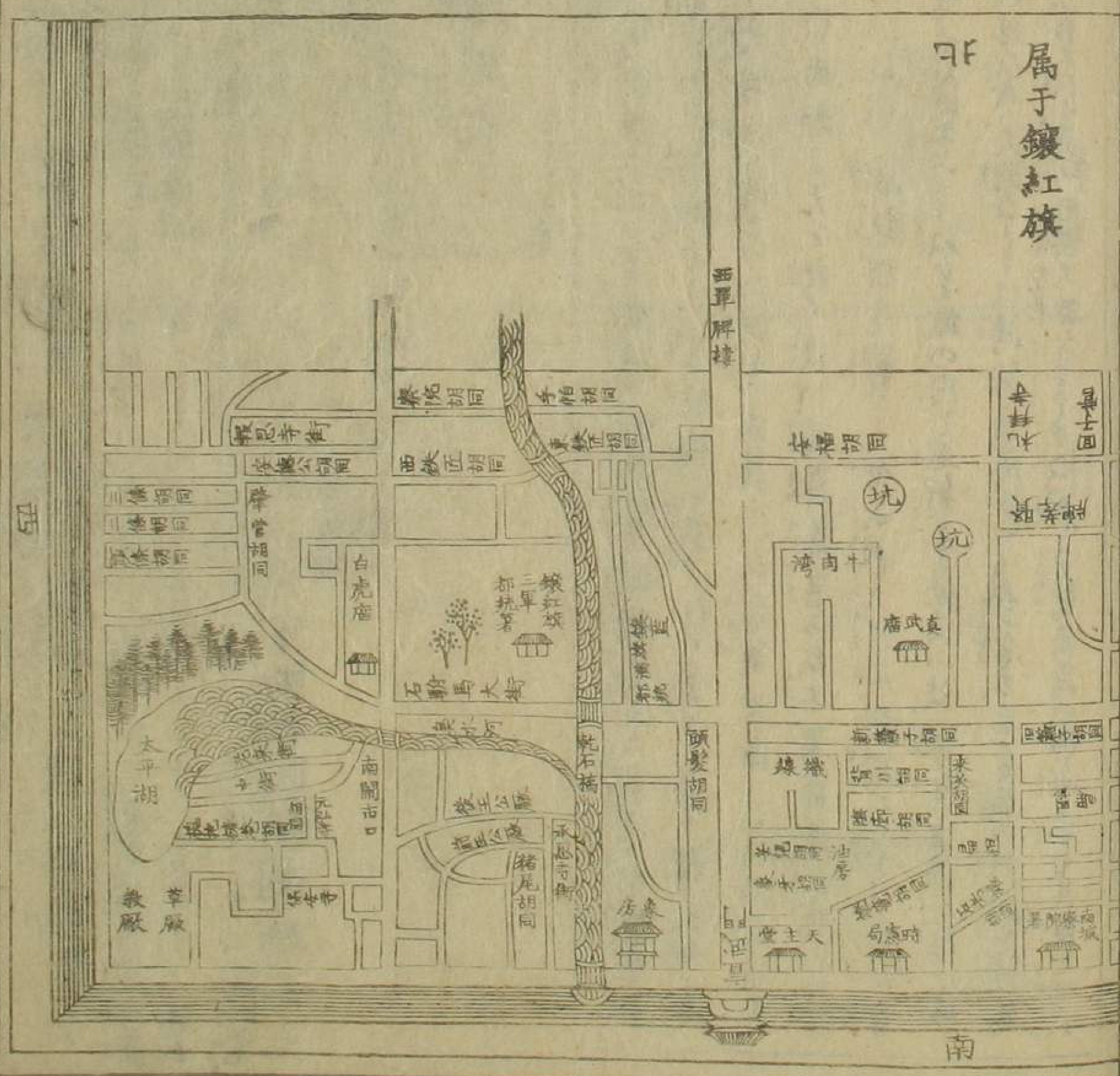
鑲藍旗居址　滿洲并に漢軍の三の鑲藍旗ハ此の方界を鑲紅旗と接る西單牌樓より宣武門にいたり金魚の橋より西にむかひて太平湖根にいたるまでを鑲藍旗滿洲の界とし○長安街牌樓よりひがしに向ひ西長安門にいたるを今の橋にいふなり滿洲の頭參領に屬せる佐領十八人の居址とし小米巷よりゆきむかひ長安大街中府尤府に服む乃周圍にいたるまでを滿洲の二參領に屬せる佐領十六人の居址とし河漕より東にむかひ石駙馬胡同文昌閣捨馬莊馬神廟胡同にいたるまでを滿洲の三參領に屬せる佐領十八人の居址とし獅子口より東に向ひ城市南口を北に避けて撥筆胡同の西よりむかふ滿洲の四參領に屬せる佐領十七人の居址とし西單牌樓より南に向ひ東に折れて六部口抽屜胡同關帝廟胡同牛肉灣にいたるまでを滿洲の五參領に屬せる佐領十七人の居址とし凡滿洲鑲藍旗乃參領官五人佐領八十八人軍丁二万六千八百人なり

○宣武門より城隍胡同の西に沙家胡同南捨馬莊翠花胡同象坊橋にいたる蒙古の頭參領に屬せる佐領十三人の居址とし中街太僕寺街細瓦廠彰儀子胡同青廠子胡同をかぎる蒙古の二參領に屬せる佐領十二人の居址とし凡蒙古鑲藍旗の參領官二人佐領二十五人軍丁七千五百人なり

○西單牌樓より抱子街東口より西口にいたるを漢軍の頭



參領に屬せる佐領五人の居址とし牛肉胡同の東より西口にいたるを漢軍の二參領に屬せる佐領五人の居址とし鐵匠胡同の東口より西口にいたるを漢軍の三參領に屬せる佐領六人の居址とし石駙馬大街東口より楊毛胡同にいたるを漢軍の四參領に屬せる佐領五人の居址とし城隍廟胡同の東口より西に向ひ真武廟胡同にいたるを漢軍の五參領に屬せる佐領六人の居址とし凡漢軍鑲藍旗の參領官五人佐領二十二人軍丁六千八百人なり凡三軍合して凡万七百人なり。



○振武坊 正陽門の内棋盤街の西にあり。西長安街の東にあり。○鑾儀衛署 闕の西西三座門の西にあり。本ハ明の時錦衣衛とす。雍正帝御書の額あり。膽恭輿衛といふ。掌衛事内大臣満洲人二人漢人一人總官として乗輿の供奉鹵簿の儀序を掌る。屬する所左右中前後の五所あり。又馴象所あり。旗手一衛あり。其左所ハ輦輅の事を掌り、右所ハ繖蓋、儀刀弓矢、槍殳戟等の事をつかさどる。中所ハ麾氅、幢幡、旌節、仗馬を掌る。前所ハ扇、拂、瓶、盒、香、盒、杌、椅、埋、鞭、仗等の事を掌る。後所ハ旗、纛、吾仗を掌る。馴象所ハ儀象騎駕鹵簿の事を掌る。旗手衛ハ金、鉦、鼓、角、鐃、歌、大樂を掌る。

皇帝大駕鹵簿圖式

鹵簿ハ天子乃天地を祀る盾及び朝日夕月耕耤先農の祭或ハ朝會或ハ巡行等に設けらるゝ行列なり。鑾儀衛の署これを掌りて陳ね設く。鹵簿に四等あり。大駕鹵簿といひ、法駕鹵簿といひ、鑾駕鹵簿といひ、騎駕鹵簿といふ。凡皇帝南郊に天を祀り及び萬壽節などには大駕鹵簿を陳ね、北郊に地を祭り及び太廟社稷を饗し、堂子朝日夕月耕耤を祭り大朝會等ハ法駕鹵簿をつらね、皇城の内を巡行し、遠くへ出ては鑾駕鹵簿を陳ね、遠く省方を巡狩ある或ハ大閲などには騎駕鹵簿をつらね、又皇太后皇后の行列と儀駕鹵簿とあり。各大同小異にして其大概かくのごとし。此に大駕鹵簿の圖を出て其餘を略す。

一 黄龍大纛 一

二 導象 四
民尉二十八人

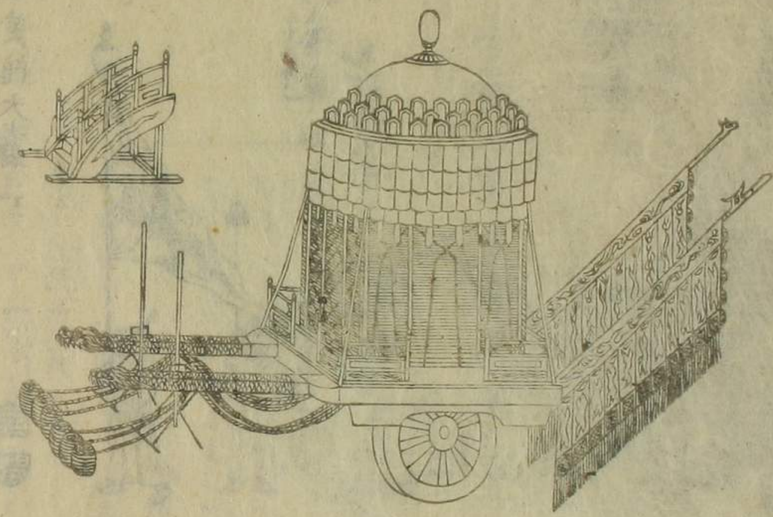
三 寶象 五
民尉八十八人
雲麾使一人
治儀正二人

四 仗馬 十
民尉十四人
治儀正二人

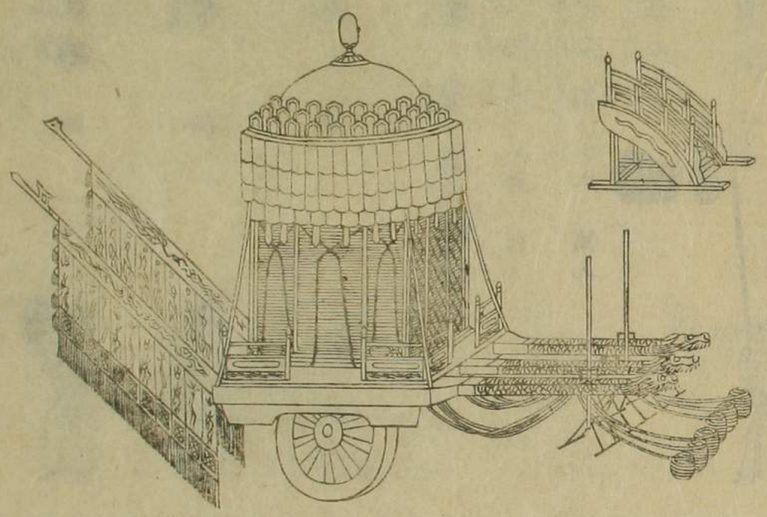
五 静鞭 四

六 前部大樂
大銅角 四
小銅角 四
金口角 四
和聲署史十二人

七 革輅一 駕馬四 民尉三十三人



八 木輅一 駕馬六 民尉三十二人



九 象輅一 駕馬八 民尉三十二人

十 金輅一 駕象一 民尉四十四人

十一 玉輅一 駕象一 民尉四十四人 雲麾使一人 治儀正二人

十二 鐃歌大樂 金二 鉦四 鼓二 鼗四 笛四

雲鑼　二

管　二

笙　二

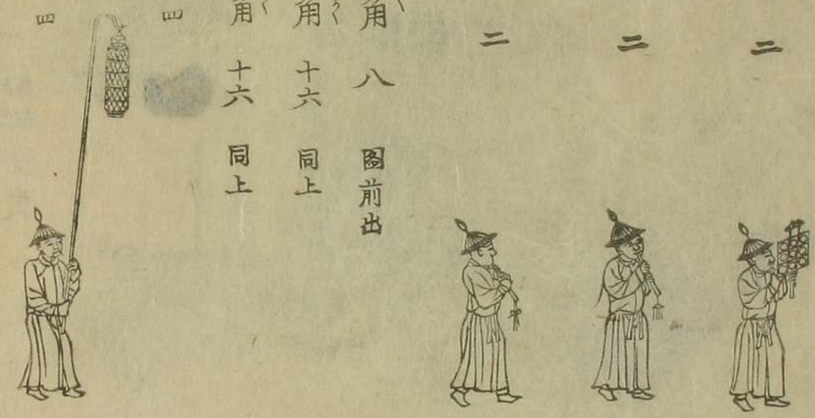
金口角　八　圖前出

大銅角　十六　同上

小銅角　十六　同上

金鉦　四

紅傘　四



十三　引仗　六

十四　御仗　十六

十五　吾仗　十六

十六　立瓜　十六

十七　臥瓜　十六

畫角　二十四

掬鼓　四十八

笛　十二　圖前出

拍版　四

仗鼓　四

金　二　圖前出

署吏　四十八人　民尉　百八十八人

冠軍使　一人　整儀尉　二人

十八　星　十六

十九　鉞　十六

二十　出警旗　一

二十一　入蹕旗

旗尉　九十人　民尉　六十七人

三二 五色金龍小旗 青色 黄色 赤色 白色 緑色 各八

旗尉 三十人 民尉 四十人 雲麾使 一人 整儀尉 二人

三三 翠華旗 二

三四 金鼓旗 二

三五 門旗 八

三六 日月旗 各一

三七 五色雲旗 五

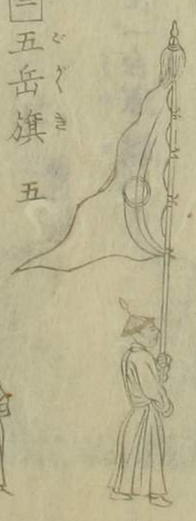
三八 五色雷旗 五

三九 風旗 八 每旗繪乾坎艮震巽離坤兌八卦

三十 甘雨旗 四 民尉 七十二人

三一 列宿旗 二十八 每旗繪二十八宿

三二 五星旗 五



三三 五岳旗 五

三四 四瀆旗 四

三十五 四神旗 四民尉九十二人

青龍

白虎

朱雀

玄武

三十 赤熊旗

三十一 黃羆旗

三十二 白澤旗

三十三 角端旗

三十四 遊麟旗

三十五 彩獅旗

三十六 振鷺旗

三十七 鳴鳶旗

三十八 辟邪旗

三十九 犀牛旗

四十 天鹿旗

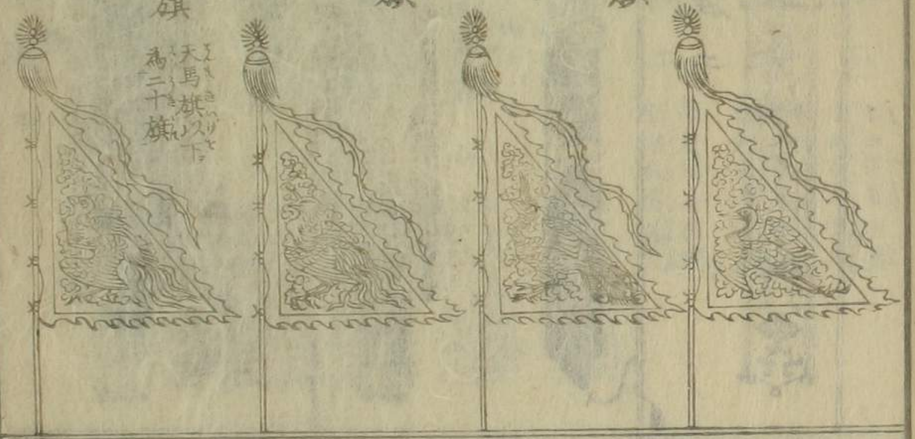
四十一 天馬旗

五十一 雲鶴旗

五十二 孔雀旗

五十三 儀鳳旗

五十四 翔鸞旗 天馬旗以下為二十旗



五十五 八旗護軍纛 八

五十六 八旗驍騎纛 二十四

旗尉 四十人
雲麾使 一人
整儀尉 二人

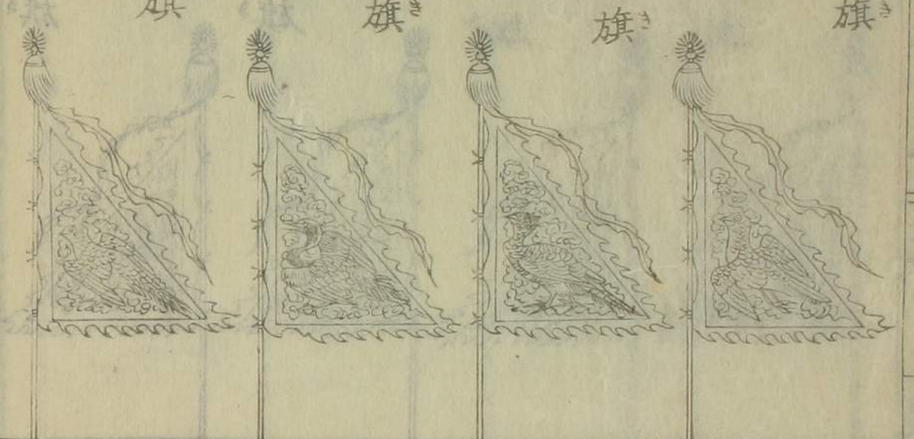
民尉 百二十人
治儀正 二人

五十九 赤烏旗

六十 華蟲旗

六十一 黃鵠旗

六十二 白雉旗



六十三 五色金龍旗 四十

民尉 四十人

六十四 八旗前鋒纛 八

六十 黃麾 四

六一 儀鍠鞚 四

六二 金節 四

六三 進善旌 二

制如進善旌補金納言清漢文

六四 納言旌 二

制如進善旌補金納言清漢文

六五 敷文旌 二

制如進善旌補金敷文清漢文

六六 振武旌 二

制如進善旌補金振武清漢文

六七 褒功懷遠旌 二

制如進善旌補金褒功懷遠清漢文

六八 行慶施惠旌 二

制如進善旌補金行慶施惠清漢文

六九 明刑弼教旌 二

制如進善旌補金明刑弼教清漢文

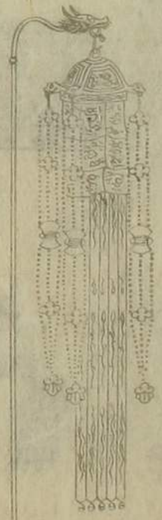
七十 教孝表節旌 二

制如進善旌補金教孝表節清漢文

七十一 龍頭竿旛 四

七十二 豹尾旛 四

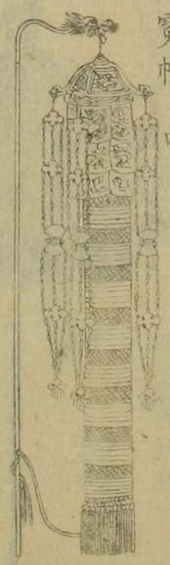
七十三 絳引旛 四



七十四 信旛 四

七十五 羽葆幢 四

七十六 霓幢 四



七十七 紫幢 四

七十八 長壽幢 四

民尉 六十四人

雲麾使 二人

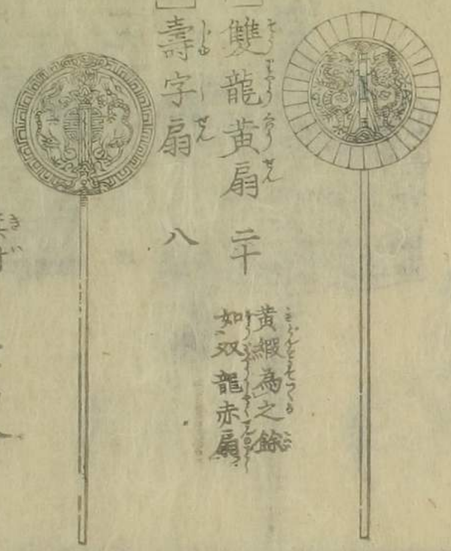
治儀正 二人

整儀尉 二人

皇朝禮器圖式

卷之三 內務 京師

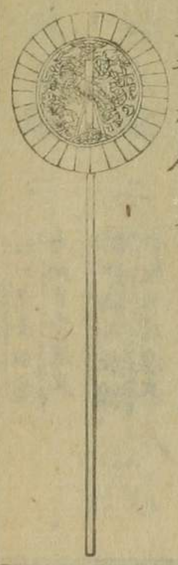
儀仗



八十九 鸞鳳扇 八

八十 雉尾扇 八

八十一 孔雀扇 八



八十二 單龍赤扇 八

八十三 單龍黃扇 八

黃緞為之餘如單龍赤扇

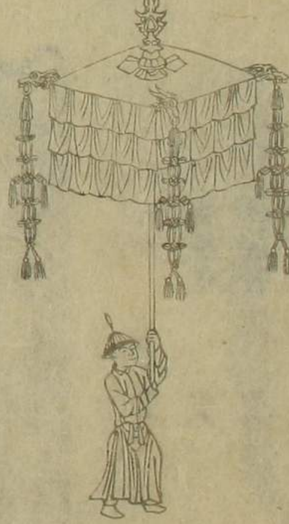
八十四 雙龍赤扇 八

八十五 雙龍黃扇 二十 八

黃緞為之餘如雙龍赤扇

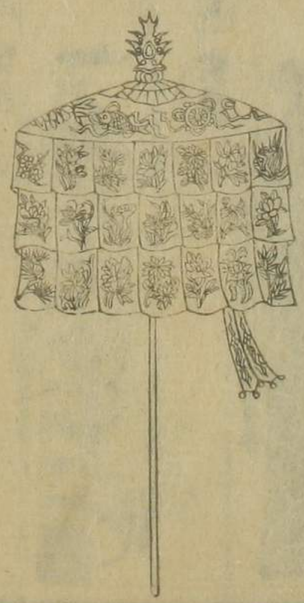
八十六 壽字扇 八

旗尉 二十四人
民尉 百二十人
雲麾使 一人
治儀正 二人
整儀尉 二人



八十七 赤素方織 四 紅緞為之

八十八 紫素方織 四 紫緞為之



八十九 五色花蓋 二十 間以五色

九十 五色九龍蓋 十 與花蓋相間

旗尉 三十人
民尉 八十四人

黃緞為之餘如五色九龍蓋

九十一 九龍黃蓋 二十

九十二 紫芝蓋 二

五十五　戟　四　親軍八人

五十六　叉　四　親軍八人

五十七　豹尾槍　三十　護軍六十人

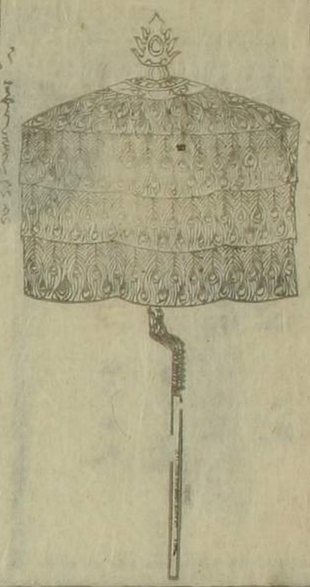
百一　金交倚　一

方几之圖

百　金方几　一

交倚之圖

九十四　翠華蓋　二



九十五　九龍曲柄蓋　四

旗尉　三十人　民尉　八十四人
麈儀使　一人　雲麾使　一人
治儀正　二人　整儀尉　二人

九十八　弓矢　三十　親軍六十人

九十九　儀刀　三十　親軍六十人

雲麾使　一人
治儀正　二人
整儀尉　四人

百　仗馬　十　國前出

護軍　二十人
驍軍使　二人
雲麾使　二人

百三 金水瓶 二

陳設水瓶之圖

百四 金盥盆 一

陳設盥盆之圖

百五 嚏壺 一

百六 香合 二

陳設香合之圖

百七 提鑪 二

陳設提鑪之圖

百八 拂塵 二

自立夏至立秋用此拂塵

百九 九龍曲柄導蓋

旗尉 二十二人

治儀正 二人

雲麾使 一人

掌蓋 四人

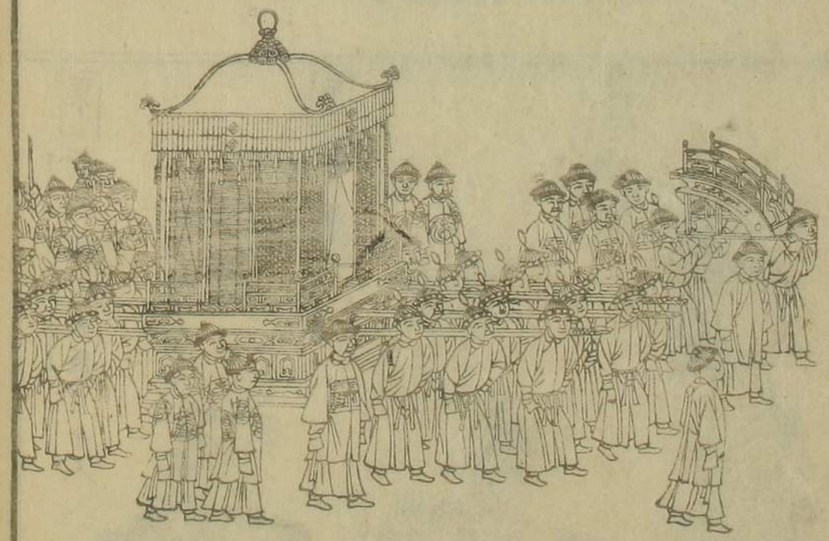
司蓋 四人

百十 前引佩刀大臣 十人

百十一 寶璽

百十二 提鑪 二

王輦
奉輦鑾儀使 四人
扶輦冠軍使 二人
雲麾使 二人
治儀正 四人
整儀尉 四人
旗尉 三十六人
氏尉 三十六人
後扈佩刀大臣 四人
豹尾班執豹尾槍侍衛 二十人
佩儀刀侍衛 二十人



佩弓矢侍衛 二十人
後管敬秩大臣 二人
前鋒護軍統領 二人
給事中御史 四人
各部郎中 八人
各部員外郎 八人
侍衛班領
署侍衛班領 二人
領侍衛內大臣 二人
敬秩大臣 二人
司讎侍衛什長 四人

京師

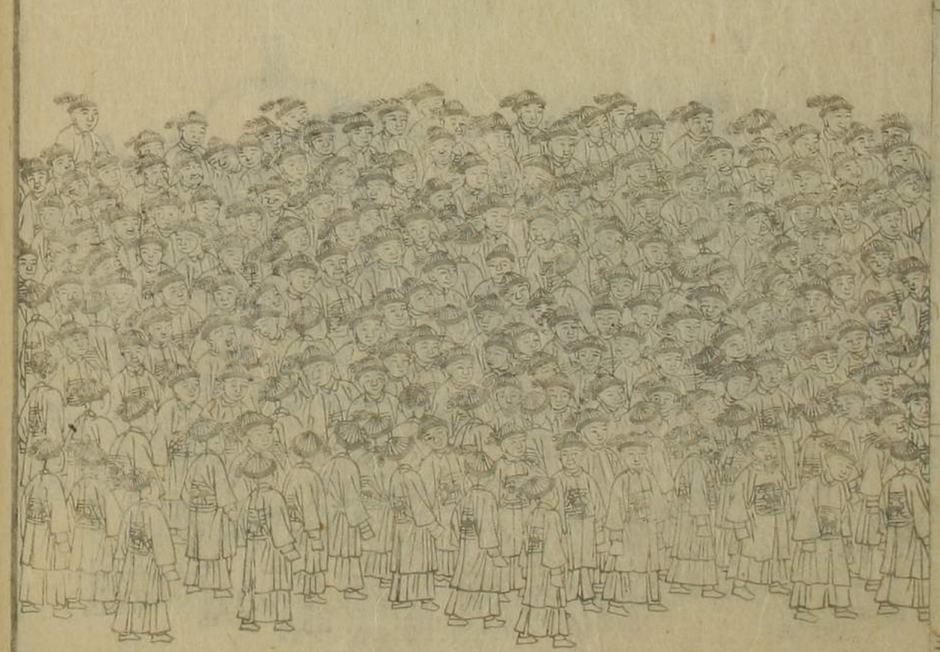
內城

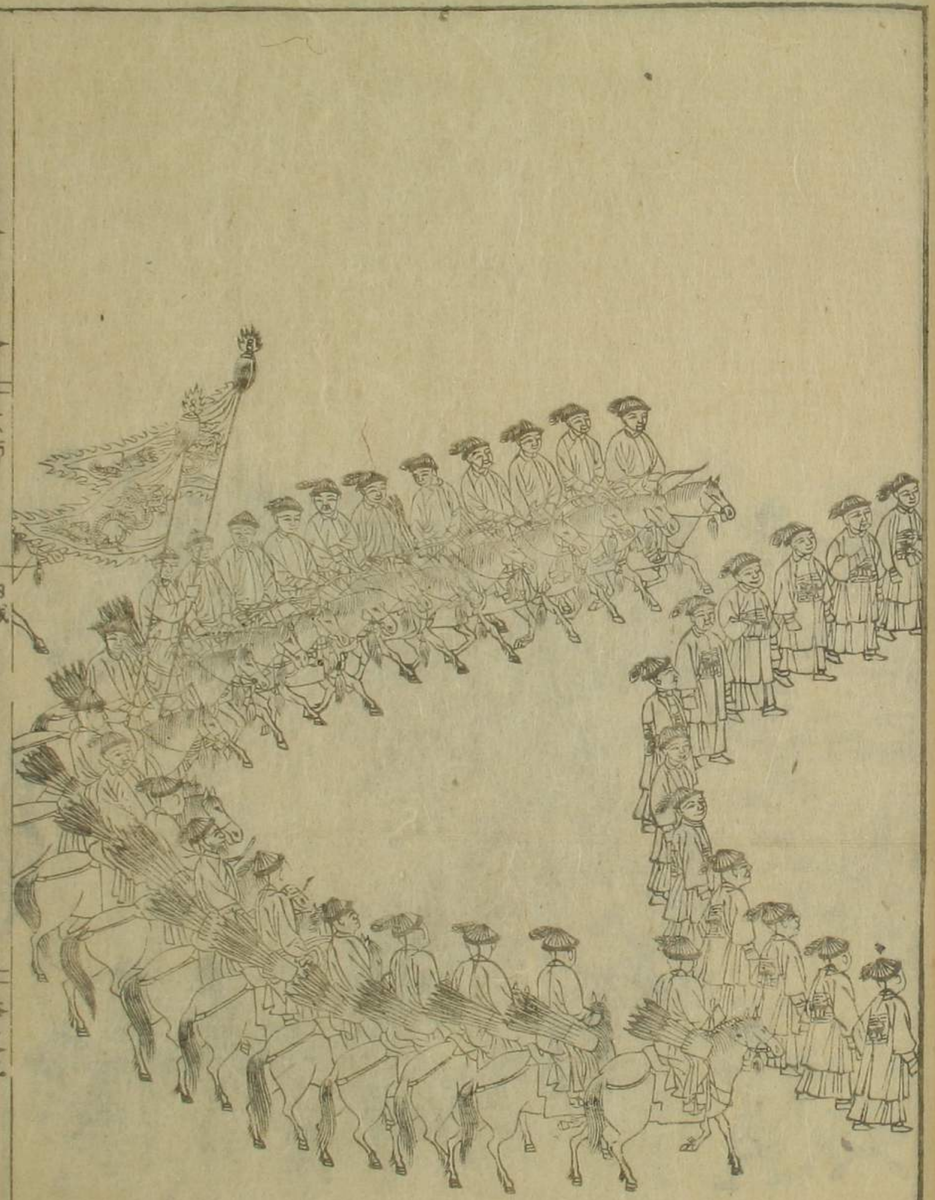
扈蹕名勝圖會

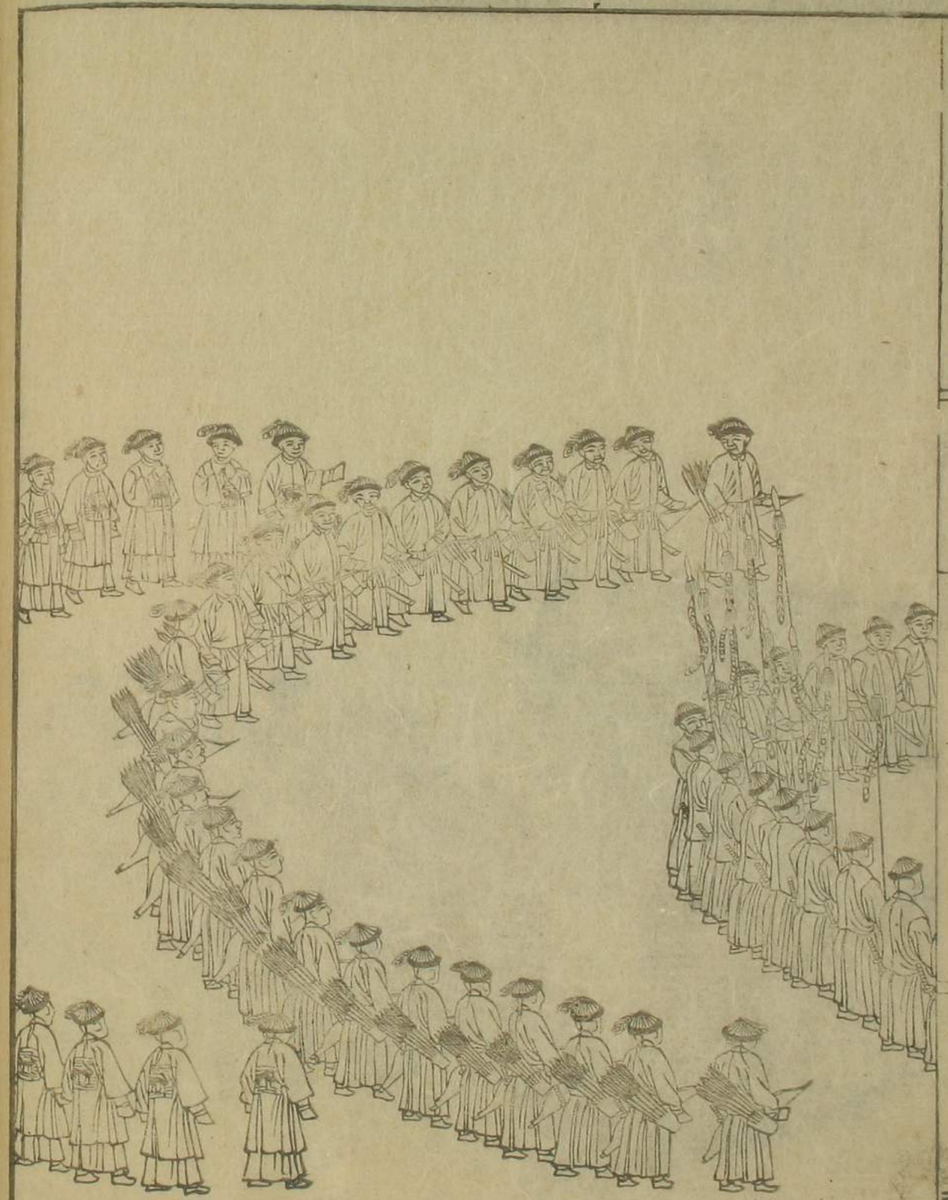
建壽親軍　八人

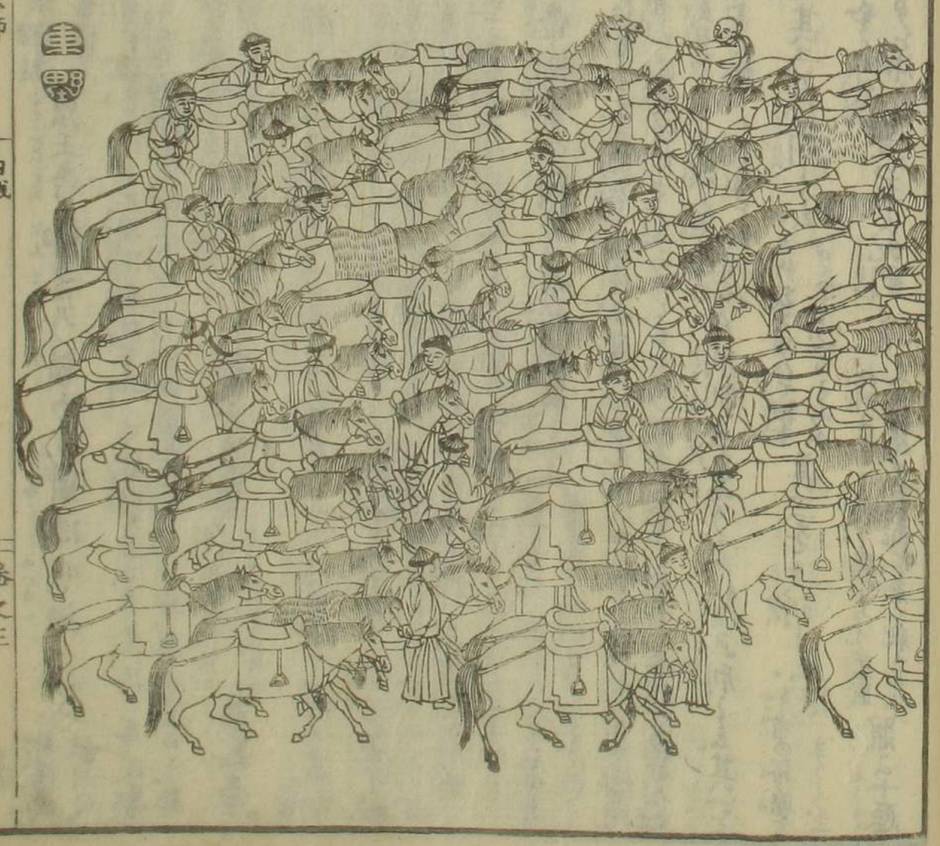
佩鳴螺親軍　十二人

右護玉輦左右









○太常寺署　闕の西牆儀衛署の南よりて東面す。雍正帝御書の額あり。粛祗明禋と云ふ。郷漢名一人。少卿漢名一人。こしをを帯て壇壝廟社を掌て、祭祀をなして其おこたりを糾し、とりをもて更官博士官漢祝官贊禮郎あり。掃除序列、陳物撃柝を掌る。司庫庫使の官あり。樂のことを掌る。協律郎あり。樂の節奏を掌る。○都察院署　闕の西右掖門の南よりて東面す。康熙帝御書の額を都命呼帰と云ふ。この御製の碁布箴あり。一ハ清字一ハ漢字也。都察院署　長安街の西よりて刑部と左右相対す。漢名二人。左右都御史。滿漢名二人。左右副都御史。滿漢名二人。都察院の總憲にして、官常を整粛し、綱紀を振飭し、糾劾し、滿署の文巻と、注銷と、文移出納とを掌る。京畿道河南道江南道浙江道山西道陝西道湖廣道江西道福建道貴州道各の十五道各掌印監察御史あり。滿漢各二人。左右侍郎。滿漢各一人。刑紀署の總裁として、法律刑名を掌る。以て邦の憲を粛しむ。屬として各直隷奉天江蘇安徽江西福建浙江湖廣河南山東山西陝西四川廣東廣西雲南貴州各の十七都名倶変司郎中、各一人あり。各省の刑名を掌る。凡て都察院の文移を受ては、分て十八司諸名に都の尚書の綜して刑維を執行ふ。九刑制と五あり。こんを一刑と云ふ。其一を笞刑と云ふ。大竹板を用ひて臀を撻つ。其数十より三十に至る。其二を杖刑と云ふ。笞者の撻數を倍して一等より三等に至る。其三を徒刑と云ふ。杖刑の二あり。終と物うり若くは鞭背して役に服せしむ。其四を流刑と云ふ。遠國に遷して役に服せしむ。其五を死刑と云ふ。罪之十悪の者は、

あり。犯す者の原注に一を謀反と云ふ。社稷を傾けんと計る者をいふ。二を謀大逆と云ふ。本朝山陵宮廟闕を毀んと計る者をいふ。三を謀叛と云ふ。本國を背て番に投ん事を謀る者をいふ。四を悪逆と云ふ。祖父母父母を殴り及び人をして殺さしむる者と、祖父母父母の喪を匿し、及び夫の喪を匿して嫁する者と、祖父母父母及び夫を詈る者をいふ。五を不道と云ふ。一家非命に三人殺し及び人をして殺さしむる者と、斬刺し、蠱毒、魘魅して人を殺す者をいふ。六を大不敬と云ふ。御寶を盗む者と、乗輿の御服を偽造する者と、御膳の誤つて禁忌の物を入れたるを知て供進する者と、及び天子の使を詐る者をいふ。七を不孝と云ふ。祖父母父母の喪を匿して哀を発せず、及び夫の喪を匿して哀を発せず、及び喪中に嫁娶する者をいふ。八を不睦と云ふ。祖父母父母を殴り及び人をして殺さしむる者と、祖父母父母を詈る者と、及び祖父母父母と別居し及び財を異にする者をいふ。九を不義と云ふ。本属の府州縣の官を殺し、及び吏の喪を匿して嫁する者と、及び吏の喪を発せず、楽を作す者をいふ。十を内乱と云ふ。姦淫の者をいふ。又八議の典あり。其一を議親と云ふ。宗室の人をいふ。二を議故と云ふ。その故人たりし者をいふ。三を議功と云ふ。国功ある臣をいふ。四を議賢と云ふ。賢者世よばえある人をいふ。五を議能と云ふ。勤めて怠らざる人をいふ。六を議勤と云ふ。外藩の王公等、國の賓客の人をいふ。七を議貴と云ふ。仕ふる官高爵ある位の人をいふ。八を議賓と云ふ。前代の帝王の後裔をいふ。凡そ八の者罪を犯すと雖も、常人のごとく擅に笞杖を加ふることなし。必ず聞を経て旨を待ち而して后死罪同じく犯収本の罪と雖も、妻妾又は妻四人いる縁の罪と犯したるときは、かくのごとし。唯十悪を犯したる者は、此律の例にあらず。

せらるべし。又議者の親族従僕する其ハ主人の威勢に倚て其民を虐け罪を犯せし者ハ人よりも罪一等重きことを加ふ之。又贖刑あり。贖刑とは罪の軽き者或は財を出して其罪をあがなふとも或は年七十以上十五歳以下の者罪あるも幼弱なれば是を贖しむ其外廃疾歩行の自由ならざる者又流刑以下軽き罪ある者又婦人乃罪ある者ハ贖を出して免るしむ。されども其婦人も姦婬盗竊不孝なる乃大罪を犯しもの贖刑を免さざる諸法のごとく赦せらる。其余ハ天文学を遂したる諸生又ハ過て人に傷ある者なるのすべて杖笞の刑以下の者ハ悉く銭を出せば罪を贖ひ免るしとなり。又其以下罪の軽き者ハ贖刑と同て贖銀の定めありてこれをもつて罪を免さる。勢力ある官員の正妻又ハ婦人等の軽き罪ハ准贖とて贖銀を出して罪を免さる。其一等重き罪ハ納贖と名けて身上の大小に応じて贖銀を出して罪を赦さるもあり。とる分限に応じてこれを贖しむ。○官の者の軽き罪あるハ贖罪とて悉く贖銀を出して罪を免さる。盗竊詐欺の罪ハ免さるゝ事なく又官に叙せらるゝ以前に犯したる罪ハ贖銀を出し免ることなし。其中に受贓の罪ハ小なりといへども免されず。受贓とハ官にありて非理の遺物を受たるをいふなり。又刺字の定あり。刺字とは罪ある者に黥して印とするなり。凡其職を捨て身をのがるゝ者又ハ盗をする者又ハ謀殺せらるゝ者又罪を再び犯せる者其外捕人を拒ぐ者人を殺せし者死罪の定ある者なり。八旗の軍人ハ臂を刺し其奴僕ハ面を刺し庶民の後刑に死せらるべき以上の罪を犯しきるハ先も面を刺し杖罪に死せらるべきより以下の軽き者ハ臂に刺せらる。又罪を再び犯せる者も面に刺ハ其面の刺ハ鬢の下顎のうへに刺れ臂に刺するハ腕の上肘の下に刺せらる。職を捨てのがるゝ者ハ逃罪と名けて左の臂を刺し其余の罪ハ皆右の臂を刺す。○流刑後刑の二ハ罪の名と地の名と右の臂に刺罪の名地の名しるは何ゝの罪を犯し何乃国何の所に流徒せらるゝといふ事を行ふてさまに刺す。字の大さ一分五釐其全体ハ一寸五分乃内に書るなり。

刑具

刑具六あり。板といふ、枷といふ、杻といふ、鐐といふ、夾棍といふ、拶指といふなり。○板ハ竹篦を用ひてこれを造る。板に二あり。小竹板ハ大きさ一寸八両、潤さ一寸五分、大竹板ハ重さ二斤、潤さ二寸、長さ五尺五寸、根より梢まで竹の細きを又分。○枷ハならびに乾木を用ひて造る。長さ三尺、潤二尺九寸、重さ二十五斤なり。頭ハ縄て識をしるし罪枷ハ罪を護罪人の就を止しめ是を受索として長さ七尺重さ五斤なり。凡罪乃軽重を論ぜず罪を繋獄せらるゝ者ハ悉くこれを用ゆ。○杻ハ手を擬へ械之乾木を用て造る長さ一尺六寸厚さ一寸。死罪重罪乃者これを用ゆ。○鐐ハ足を繋ぐ鉄をもつて造る其形連環のごとし。重さ一斤。徒の罪より以上の者これを用ゆ。○夾棍ハ真具なり。乾木をもつて造る。中なる木長三尺四寸。旁木長さ三尺。棍ハ圓く径一寸八分、根ハ方にして潤二寸三本相合して完なり。完の径一寸六分余にて七分なり。重罪乃者実を吐ざるに此ハ其具を用ゆ。○拶指ハ圓木五本を以て造る長さ七寸圓囲に分又厘婦人重罪を犯し実情を吐ざる小此具をもつて拶る。其外夾棍拶指等の二法とて共に悉皆を定の用ふるなり。

獄　刑部署の堂の後西南と西北の両所に獄舎を建置。西南なるを内監と云ひ、西北なるを外監と云ふ。凡死罪の者を禁獄せらるゝ内監に囚禁ず罪流以下乃罪ハ外監に禁らる。又強盗十悪謀故殺等の重罪の犯しと犯しべき者ハ頭と手足とに各三の械を施しきびしく禁獄す。又窃盗闘殴其外罪流徒乃罪情の軽き者ハ頭に手足に各一の械を繫く禁獄す。又罪の軽く杖笞の刑に止る者或ハ婦人の軽き罪を犯し者ハ手足の械をもつて免る。罪の者ハ頭に械をするのみを手足ハはぶし。婦人罪あるときハ別に獄舎を設けて禁囚し男子と同室に居らしめず。○老さると幼きと廃疾の者ハ禁獄ゆるく禁獄をせずして看守らせしむ。又官人の罪を犯して其罪流刑より以下のものと私罪其刑杖罪より以下の者も又悉く禁獄せず。此所の図ハ外監の東面に大楡樹あり。明の楊継盛がみづから植る所なり。

明代乃刑部署ハ長安街の西にあり。今も依然として刑部街と称す。嘉靖の間李攀龍王世貞徐中行が事を曹に官たり。相集りて詩を論し則ち川寺の内に白雲楼を建てり。其の人これを外藩林と称せり。査嗣瑮

雑詠詩　甘露飛来綴柏枝、白雲楼下坐談詩、時平刑措原無事、間数西曹似鳳池。

来の時憲書乃ち之を頒つ。[illegible]月一日より其式を直省に頒つ。[illegible]

[illegible]

宣武門

内城南の右門なり。元代順承門と呼ぶ。[illegible]

[illegible]

衙署

[illegible]

工部製造庫

[illegible]

書吏頓可喫古のにまり額あり。

[illegible]

城察院署

[illegible]

南城察院署

[illegible]

西城察院署

[illegible]

中城察院署

[illegible]

河南道署

[illegible]

雍和宮

[illegible]

時憲局

[illegible]

教房

[illegible]

內城

象房

宣武門の西南の隅に王恭厰胡同の積緩あり。明代此所に火薬厰あり。今は廃せり。明の天啓六年五月初日の辰の刻、此王恭厰の地震ひ裂け、平地陥て二の坑となる。長三十歩、潤十三尺歩、深さ二丈計。其響雷の震ふがごとく、崩れ倒るゝ民家一万九百三十軒、壓れ死する男女五百三十七人。此時一道の旋風吹来り、風の内に一点の火光ひらめくと見るやいなや、忽ち火薬厰に移りて、瀰漫に火気を生じ、満城火となり、紫煙もくもくと焼開き、火焔空中に飛んで、黒烟八隅に覆ひ、百雷の電の鳴るがごとし。厰中火薬を製する人夫三十余人、悉く死せり。唯其中二つ入る者一人、恩沢ありて其全き事を得たり。このとき尤も怪むべきは、此辺の大木巨樹、根より抜けて、半里一里の外へ飛行しに投落しも、又焼ざる所なし。石獅子其長さ数十丈の、完に飛行したるも、庫車牢系の類は雨のごとし。又石獅馬御に有りし石獅子其重さ五千余斤なるものゝ、遠く順義門の外に落ちたり。就中此日京師の婦女輿に乗りて往来せる者、その衣服皆飛去て、裸体となりぬ。凡物の飛ぶ、其衣裳を引集めたるが如く、衣服は悉く西山に落て、昌平州の樹にかゝりぬとかや。

○鑲紅旗官学　宣武門の内、象坊胡同にあり。○慈恩律寺　都城の西南、慈恩寺街にあり。○鑲紅旗覺羅官学　慈慶寺街

にあり。○吉祥寺　鷲尾胡同にあり。○天仙廟　南廟市口にあり。○此所より又元弘寺、保安寺、擔抱の後、慈恩寺の右にあり。菴号あり、こゝを寺号ありて巷街の名を称す。

○鑲紅旗満洲並古漢軍三都統署　俗に石湖馬大街にあり。○鷲峯寺　内城の西隅、城隍廟の南にあり。寺の貞観年中に建る古刹なり。唐代には激流寺といへり。又弥仏寺ともいふ。昔は此寺に唐人の石刻心経あり。中に栴檀瑞相の佛像あり。其精製類ひなくして、鋤くがごとし。近世の人のよく辨ずる所にあらず。清朝康熙四年、勅して此栴檀瑞相を弘仁寺より移され、新に祠並の如来を覆ふて安置せり。乾隆二十六年、重修御製の碑あり。○正紅旗漢軍都統署　宣武門内、鷲峯寺の東にあり。廟内に五十六尊の羅漢あり、水塘菴の記あり。○鑲藍旗満洲都統署　華嘉寺胡同にあり。○圓通禅林　雲が撰ひて、水塘菴の記あり。

○以上宣武門鑲藍旗護衛の界とし、以下は阜成門内鑲紅旗護衛軍の居址とす。○居址の図は次に出す。

○鑲紅旗護軍統領署　西單牌樓、抱子街にあり。○雙塔寺　西長安街にあり。今の寺は、金の章宗帝の時に建られしなり。元の代には慶壽寺と称す。双の塔あり。其一は九級、一は七級なり。九級の塔の額は特贈光天普照佛日圓明海雲佑聖國師の塔とあり。七級の塔の額は佛日圓照大禅師可菴靈塔の塔とあり。明の正統の間に重修して大興隆寺と号し、其後寺を廃して禅寺となし、講武堂と名く。又後に此地を演象所となす。清の乾隆の間その残りたる殿廡を重修し、雙塔を今は寺の西偏とあり。

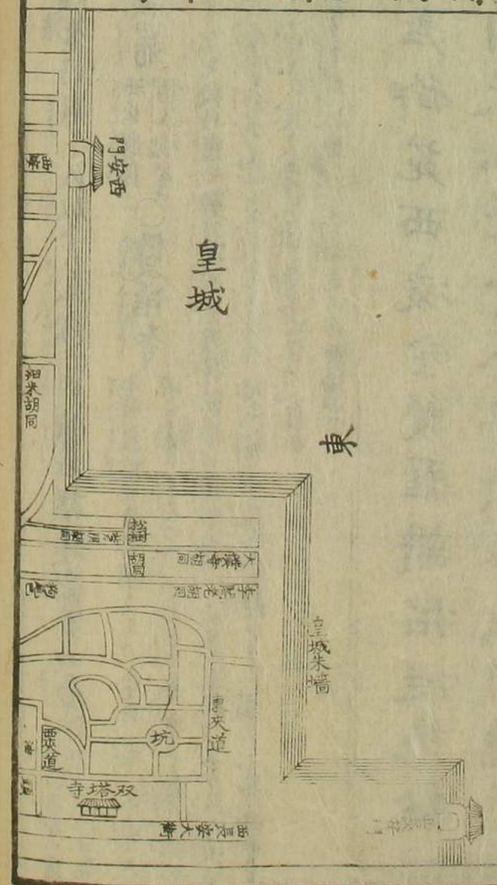
石塔參差御苑西
凌空雙雁識招提
梵鈴風起聲相激
仙筆雲分勢欲齊
似引飛鳧朝帝闕
豈煩鳴馬護禅棲
長安落日馳車騎
何處逢人跡不迷

明呉國倫双塔寺詩　半江田書録

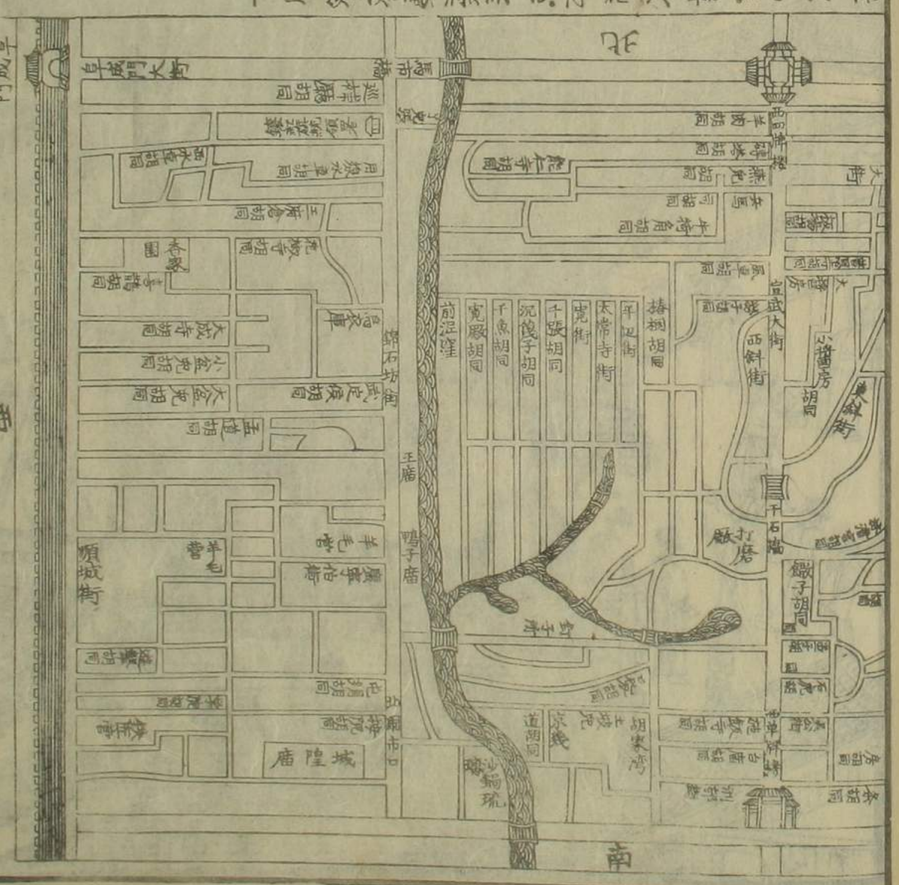
○鑲藍旗漢軍都統署　西單牌樓の東堂子胡同寛街にあり。○鑲藍旗並古都統署　大僕寺胡同にあり。○鑲

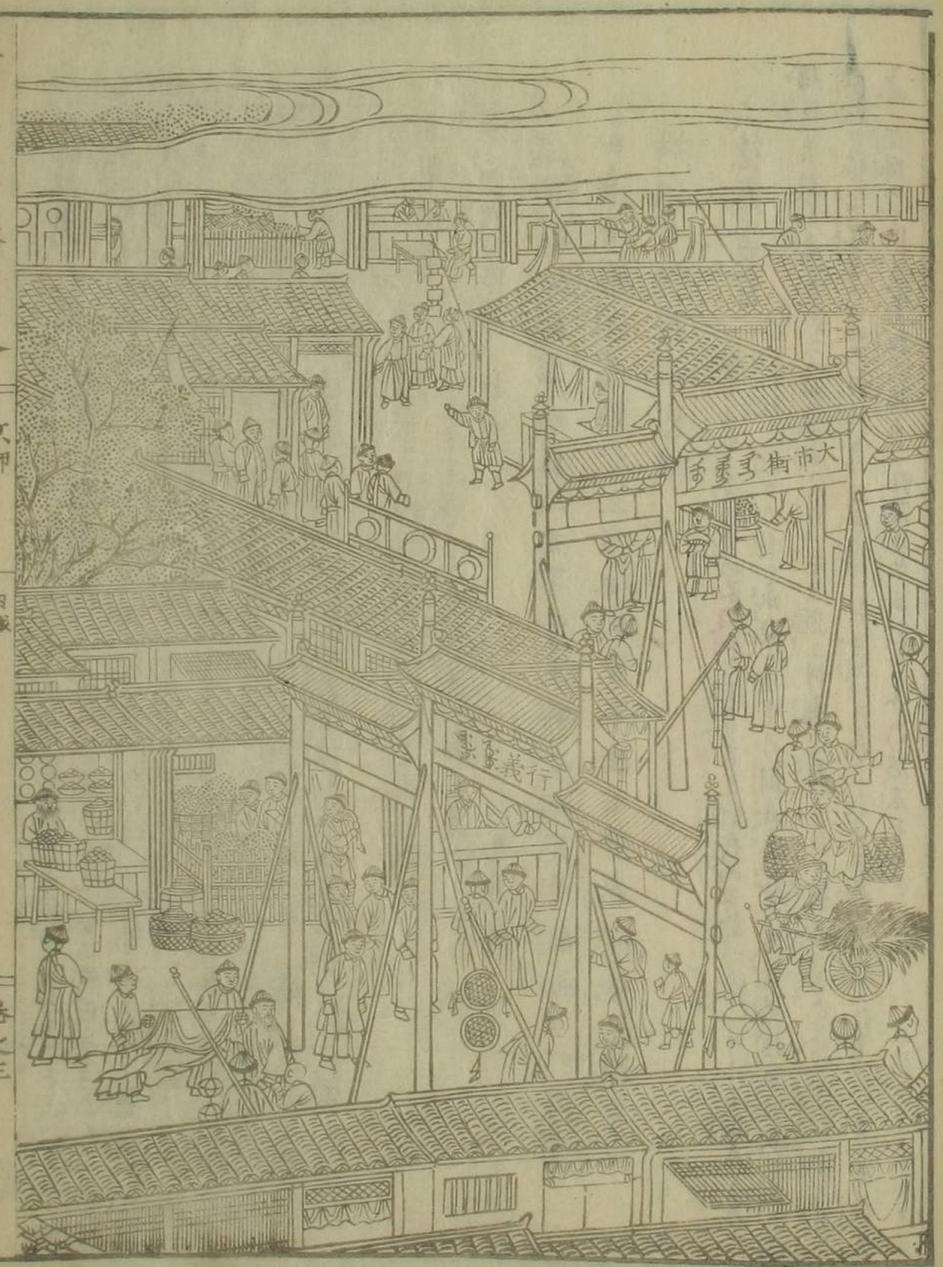
藍旗官学　乾石橋斜街にあり。○顯應觀　宣武大街、乾石橋にあり。乾隆帝御製重修の碑あり。○普恩寺　安福坊の乾石橋の北にあり。

鎮紅旗居址　蒲洲沿革漢軍三の鎮紅旗に屬せる佐領一人の居址と
接るの西の方なり西に牌樓より南の向ひ單牌樓と東の方に
蒲洲の頭參領に屬せる佐領十三人の居址と
日を蒲洲の二參領に屬せる佐領十七人の
日大慢寺衙署圖光胡同まで蒲洲の
向ひ東交道東岳廟演劇所宮殿名
日より堂子胡同石虎胡同燈杆胡同
屬せる佐領十七人の居址と
○正牌樓大街より西の方むかひ
羽尾胡同後泥洼十八まで鎮紅
旗の參領二人佐領二十
二人軍丁三百人あり
○正牌樓大街より西の方むかひ
向廟胡同より東の方に漢軍の
佐領參領に屬せる佐領二人の
居址と



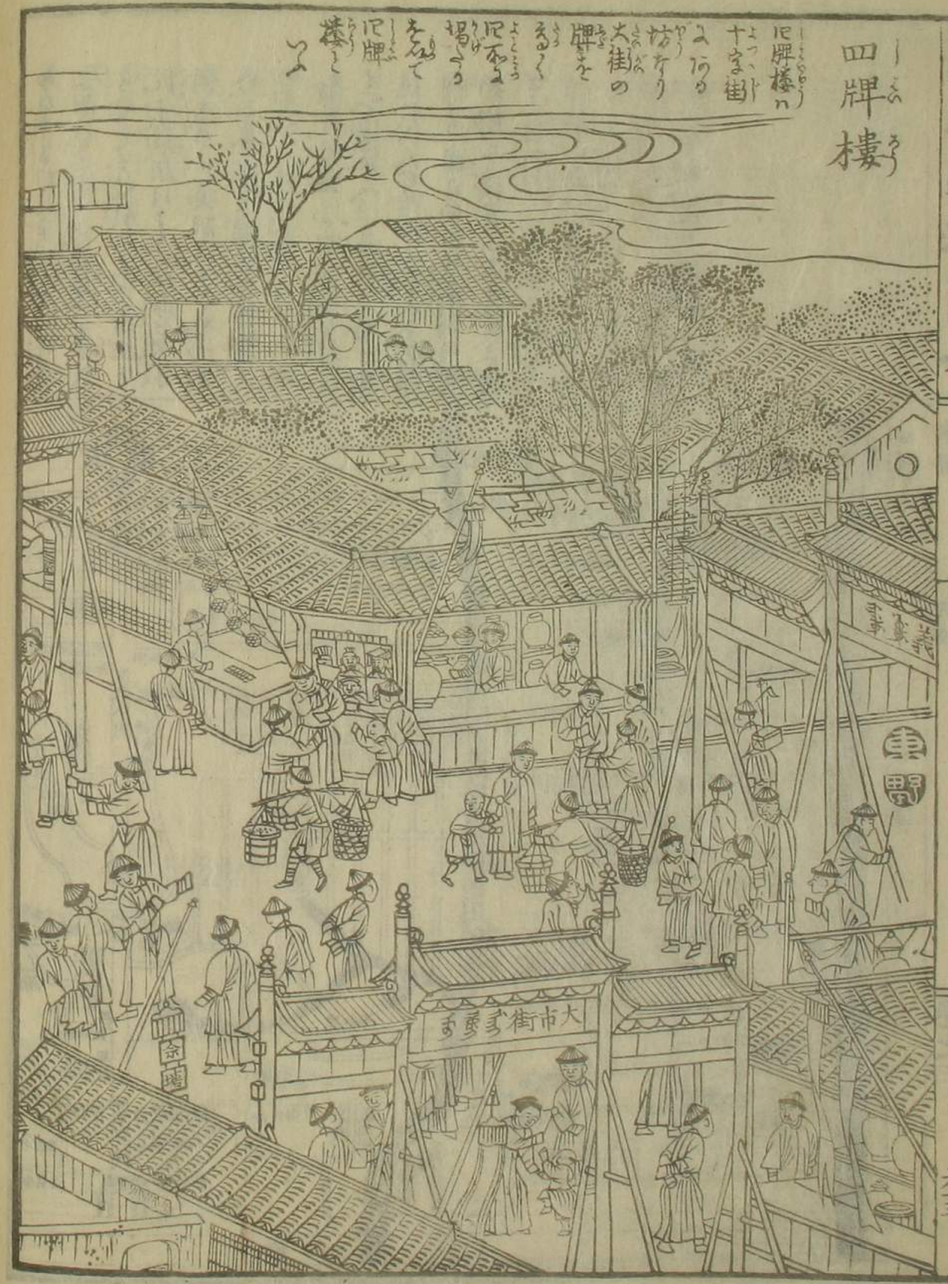
向ひ東の胡同東城胡同泥陸
子胡同より漢軍二參領
に屬せる佐領六人の居址と
千總胡同より北の方鼓樓まで
圍る所は鎮紅旗の參領に屬せる
り三參領に屬せる佐領六人
の居址とし正白旗胡同より旌
旗等收藏する胡同にて東方胡同
まで漢軍の正參領に屬せる
佐領六人の居址と正白旗胡同より
南の向ひ向廟胡同より
南の向ひ單牌樓と東の方に
鄂卿の漢軍の兵參領に屬
せる佐領二人の居址と正紅漢
軍鎮紅旗の參領に屬せる
二十二人軍丁六百八十三
軍合して三万七千八百人鼻
咽内に守衛の官兵とし





四牌樓

四牌樓ハ十字街ニアル坊ナリ大街ノ牌ヲ南ニ望ム場ヲ名ケテ四牌樓ト云フ



○萬松老人塔　西四牌樓の南大街の西にあり。小は即磚塔なり。高さ十余丈にして九級の塔也。此塔の建塔の制度古雅なり。又乾石橋の北に七級の磚塔あり。一丈余の石額に萬松老人塔の字を刻む。もしく老人は金元の間の僧たり。自ら萬松野老と称し燕京の從容庵に住せり。文正王耶律楚材ならびに帰依して参禅せること三年、老人即これに湛然居士の号を授く。老人嘗て文正王に語て曰く、以儒治国以佛治心と。文正王此語を称して萬寿宮禅釈氏新聞の書に序せり。老人乃ち著はす所の従容録を評る。又文正王に琴譜を求む。文正王万松の春雷及び雅玉翁の遺風の譜を老人に送る。又一日文正王孔雀の便面を寄せ附るに詩を以てす。其詩に曰く

風流彩扇出西州　寄與白蓮老社頭　遮日招風都不敢　休從侍者索犀牛

云今日備これを法門に伝へて一附乃佳話とせり。

○大能仁寺　兵馬司胡同にあり。旧名は能仁寺。元の延祐年中に建。明の洪武元年重修して大能仁寺の額をたまふ。

寄大能仁寺還一和尚　　毛奇齢

遥望巌城隔翠微霊山自昔會来稀堂開諦席龍初下門傍閒
田鳥自飛踢足頓穿三宝地閑身不掛七條衣従他法臘年こ
換何日相逢話息機

○大徳顕霊宮　西城にあり。昔此宮の東門此を去る事十里計兵馬司胡同に延しより石額今になって旧門の趾を存せり。明の永楽年中の創建、嘉靖の間後昊極通明殿を建られ、王師殿を建てこれを昭徳殿と号し、西に霊王師殿を建てこれを保真殿とし、又龍虎殿を建て、真武の像を安置す。清の乾隆年間重修す。○西殿の前に古柏の大樹あり。雷に傷毀によりて地に倒れ、今尚枯れずして老松の如く、枝葉屈曲甚だ数百年の故木なり。

道家の書にて崇恩真君姓は薩氏、諱は守堅、蜀の人なり。宋の徽宗皇帝の時、虚靖天師張継先及び林霊素に従ひて道を学び法を伝ふ。人より又隆恩真君と真君に従ひて符法を伝授し、又明の永楽年中杭州の道士周思得といふ者、霊官の法を以て京師に顕す。其術に騐ある事あり。よって宮城の西に天将廟及び祖師殿を建られける。宣徳中に至りて改て大徳観とし、又薩真人を封して崇恩真君と称し、王霊官を隆恩真君として別に一殿を建て二真君を封せり。其庭に崇恩殿右に隆恩殿とし、又成化の初年観を改めて宮とし霊顕の二字を加へ賜ふ。毎歳万寿正旦冬至及び二真君示現の日は朝廷官を遣りて祭りを設る事あり。○霊官が姿像あり。文皇帝東海に猟をし給ふ事あり。舟多く此像を崇拝して寶官の勅せる所とし、征伐にも是れを奉じて此像を祀し給ひ、金川の門に至りて此姿像躍て動く事あるにし、其後も像に向へ誓へて曰く上帝の界止ありと。よりて外国に徒く…べく後今其の像の宝なると云ふ。

○鑲黄旗覚羅宗学　乾石橋の西南。

より元は石佛寺と号し、元の統元元年勅修を蒙て、本廻寺宗睿宗三朝の御容を此寺に奉安し給ふ。

○石佛寺　國宣坊乾石橋の西南鉄帶胡同にあり。寺僧地を堀りて弥勒の石佛一尊を得。

○真武廟　乾石橋の西南大本廟の内にあり。門外に石獅二あり。数百年の物なり。

○蘭若寺　捨飯寺胡同にあり。今の名は法光寺。明の変飯寺と此寺に於て飯を施して貧人を賑られ。

○都城隍廟　城西旧刑部街にあり。南に向ふ。祭像は元の至元年中の創建、大内の閶闔門を順徳門と号す。九三重構く三間左右門各一。殿又同東西に廡あり。各三間廊各二十二間。櫓をつらね祭を通して南を向く。御碑亭一あり。西に燎爐一あり。後殿又同あり。閶闔門の外に濠あり。其門の南に東西への牌樓を設く。殿宇門廡極めて丹雘塗塈を施し、一を旧都の碑を置す。

雍正帝乾隆帝御製の碑の詩あり。元代此廟を佑聖王霊応廟と号し三層に奉りて大都城隍神と加へ封じて護

國朝の初明の永楽中に威霊祠と改む清に及て都城隍廟と称す。○寝殿の内に龍塗の木牌二あり大さ数十石を入べし又萬暦中治を改め換水を造り同じく寝殿の内に又熹帝二の碑を立る今も治を改め二を尚ねぜり換水と二碑は元より此地にもあらざりし事を記す本編を撰て然るに舗人並に本廟の廟に使ふものは此祠を守る者又道士等此處に先祖の沐浴し得べき事を又目と注ぎ都て其廟あり。遊ぶ人をたまふ。所以て集めむとさかる。

廟市

市とつらね元亜の廟の前より東は刑部街まで毎歳五月一日より十日迄の間この都城隍廟の前より三里ばかりが間貨物ひしと列り奇珍の群集夥しく市と同じくあり但しまた廟前に設るを以て市の名とす

祠垣森闃樹蒼〻風馬雲旌儼在堂世仰威靈
閲社稷誰傳姓氏壇于揚四鉤裡祀皇情南第
邑安和帝道昌屹立豐碑垂聖藻騰輸時
雨與時暘
右魏之琇城隍廟詩　閩中陳景山

○關帝廟　都城隍廟の西にあり明代萬暦中に建る碑一あり。又清朝順治中元君殿を建て廣吉士周濟が記一がとあり。

○護國關帝廟　此廟は四牌楼の東にあり信者多く廟を以て

○鑲藍旗護軍統領署　絡胡同にあり。

○右翼炮殿　宣武門内都城隍廟の北にあり。

○普壽寺　錦石坊街にあり勅建の額を掲く此寺同郡乃人都に来る者寓居又門内に小楼ありて宿も遠く同郡の者を詣拝を示す

○正紅旗都統署　阜成門内錦石坊街にあり

○正紅旗蒙古都統署　阜成門内巡捕驢胡同にあり

○右翼前鋒統領衙　門北にあり

○正紅旗官学　阜成門内にあり

○歴代帝王廟　阜成門大街にありて南に向ふ此地保安寺の跡なり明の嘉靖の間此に廟を建歴代帝王及び名臣をまつりたまふ清朝順治康熙の間欽定増祀あり其後雍正二年帝親ら詣て祀祭を行ひたまひ御製の碑文あり乾隆二十九年再び造営ありて黄瓦をもて殿を覆ひ帝親ら行て祀を行ふ御製の詩文あり

廟門三間左右門各一あり石梁三を跨し内を景徳門と云門又三間東基石闌前後三の陛あり中十一級左右各九級なり

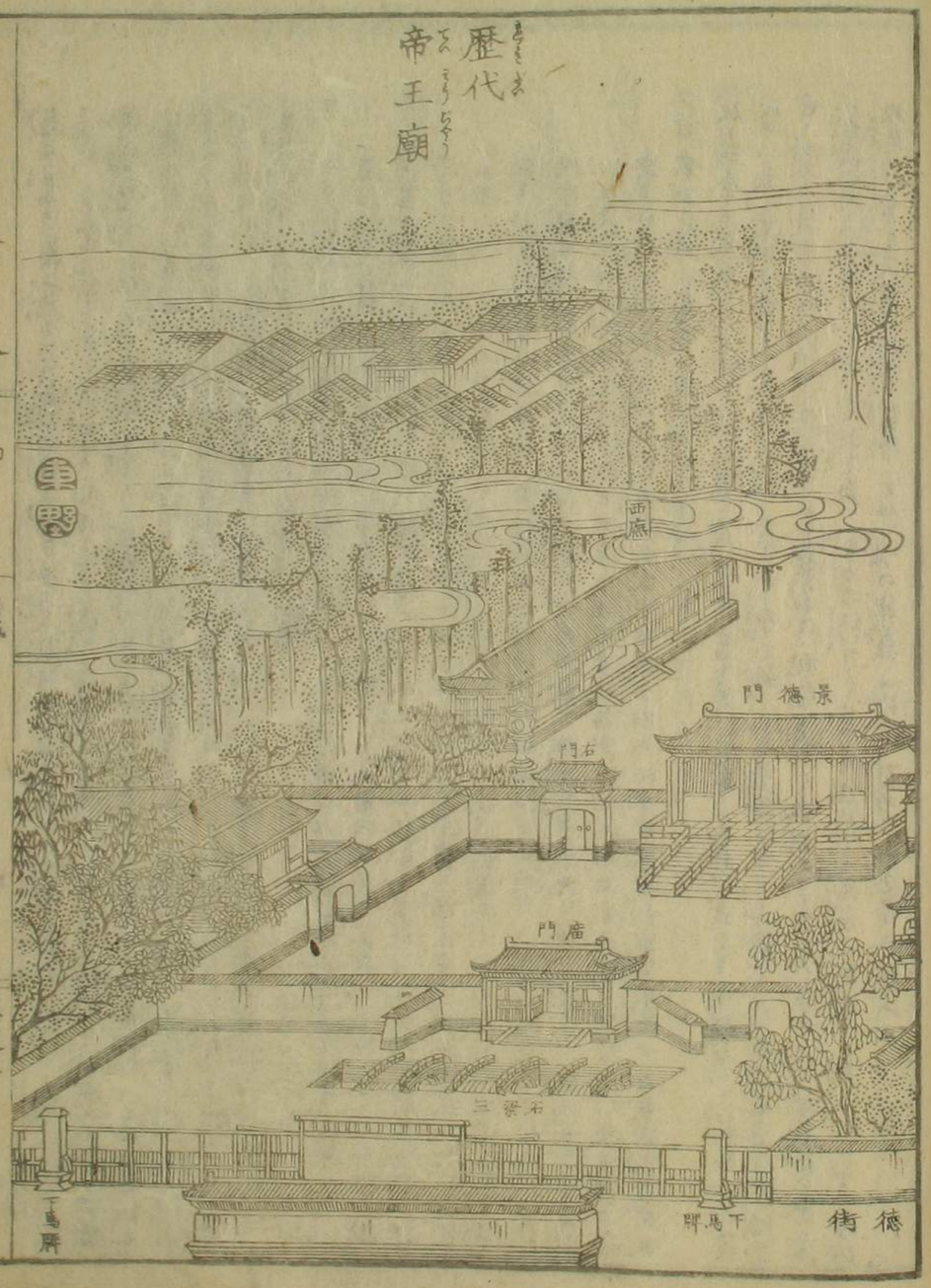
○景徳崇聖殿　門内北にあり則歴代帝王の廟なり殿九間重檐東基石闌南面に三の陛あり中は十三級左右各十一級東西に又陛一あり各十二級なり東西に廡あり各七間歴代の名臣を奉す又燎爐一あり

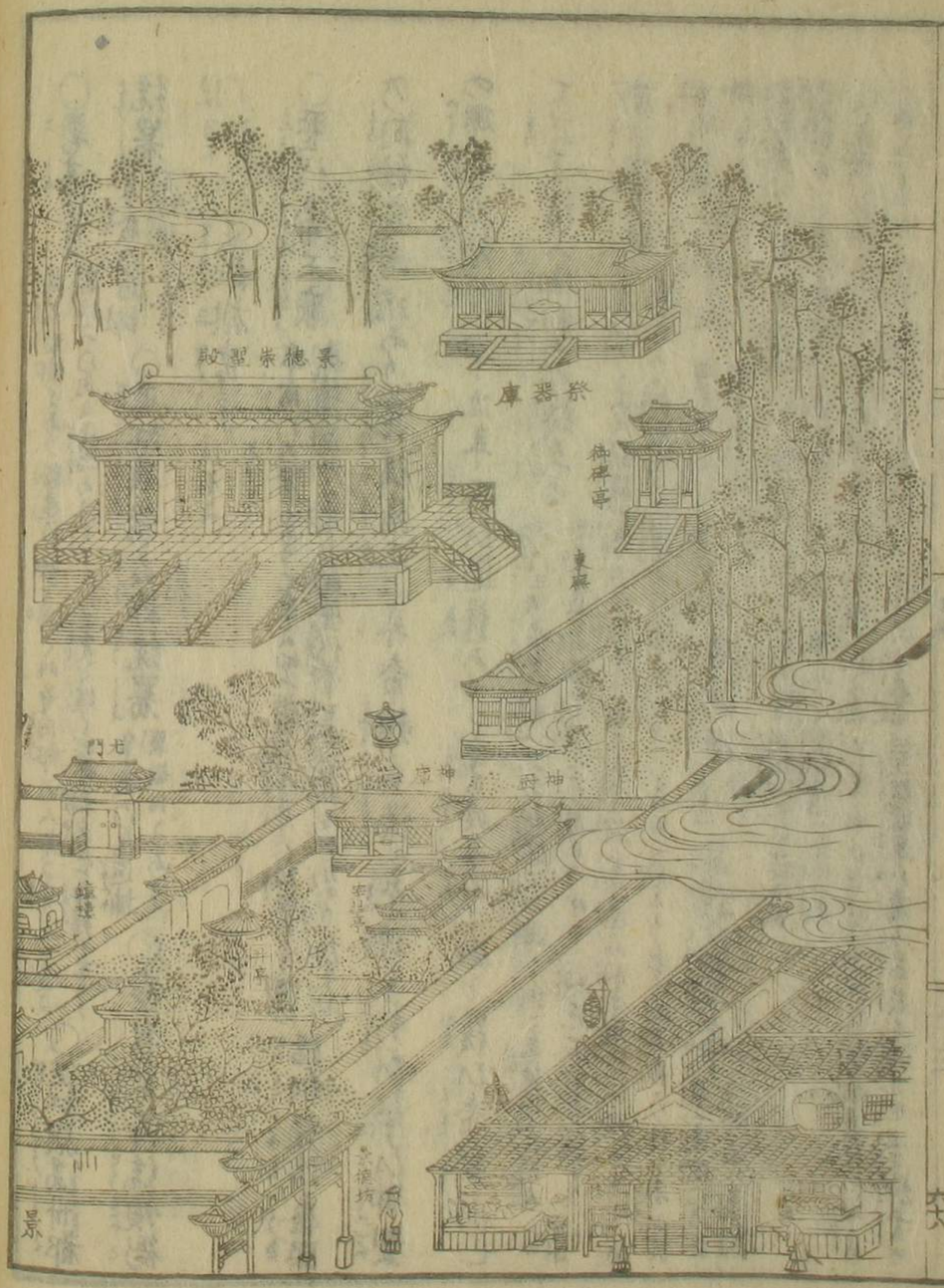
○御碑亭　殿の東にあり又殿の東南に神庫神厨各三宰牲亭井亭あり景徳門の外南の西は鐘楼又其の後に祭器庫あり

宰牲亭一あり圍垣周百八十二丈三尺八寸廟門の外東西に下馬牌各一を建つ廟廡皆く黄琉璃の瓦を以て覆ひ欄は丹を塗る

○凡歴代の帝王の祀りは明の洪武六年廟を金陵の地に建て祀り行ひ後に是を北京にうつし其後嘉靖の始年今の京都に移されしより歴代の祀ることは三皇五帝三王漢高光武唐太宗宋太祖元世祖皆創業の

歷代帝王廟





君を始め給ふ。嘉話の間ふるく、元の業を守り給ふ。今の孫ひろく天下こゝを守り給ふ。何ぞ我中國の始の同再びそれの世祖の祀後を奉じ、この後ありし若悪く此廟のあらし其つゆ無道の君弑せられ、國と共に暖衣の臣も除きなむ。亜蜀漢東西晉元魏後又代々の陵の御ありて蜀の賜烈帝八漢室の正統仁義の君ゝをもて世々崇祀し、歴代帝王の祭文遺會典にのとる。先ゝ

大昊伏羲氏　炎帝神農氏　皇帝軒轅氏　少昊金天氏　顓頊高陽氏　帝嚳高辛氏　帝堯陶唐氏　帝舜有虞氏　夏王禹　成仲康　少康　杼　槐　芒　泄　不降　扃　廑　孔甲　皐　發　○商王湯　太甲　沃丁　太庚　小甲　雍己　太戊　仲丁　外壬　河亶甲　祖乙　祖辛　沃甲　祖丁　南庚　陽甲　盤庚　小辛　小乙　武丁　祖庚　祖甲　廩辛　太丁　帝乙　○周武王　成王　康王　昭王　穆王　共王　懿王　孝王　夷王　厲王　宣王　平王　桓王　莊王　僖王　惠王　襄王　頃王　匡王　定王　簡王　霊王　景王　悼王　敬王　元王　貞定王　考王　威烈王　安王　烈王　顕王　慎靚王　○漢高祖　惠帝　文帝　景帝　武帝　昭帝　宣帝　元帝　成帝　哀帝　光武帝　明帝　章帝　和帝　殤帝　安帝　順帝　沖帝　桓帝　霊帝　昭烈帝　○唐高祖　太宗　高宗　睿宗　肅宗　代宗　徳宗　順宗　穆宗　文宗　武宗　宣宗　懿宗　僖宗　○遼太祖　太宗　景宗　聖宗　興宗　道宗　○宋太祖　太宗　真宗　仁宗　英宗　神宗　哲宗　高宗　孝宗　光宗　寧宗　理宗　度宗　端宗　○金太祖　太宗　世宗　章宗　宣宗　○元太祖　太宗　定宗　憲宗　世祖　成宗　武宗　仁宗　泰定帝　文宗　寧宗　○明太祖　恵帝　太宗　仁宗　宣宗　英宗　景帝　憲宗　孝宗　武宗　世宗　穆宗　神宗　光宗　熹宗　毅宗　○我

以上の帝王殿庭中之位を祀し、春二月、秋八月、官を遣して祭らしむ。武帝　魏　昭烈帝　呉　孫氏　晋　元帝　宋　武帝　斉　高帝　梁　武帝　陳　武帝　後魏　孝文帝　北斉　文宣帝　後周　太祖　隋　文帝　唐　高祖　太宗　後梁　太祖　後唐　荘宗　後晋　高祖　後漢　高祖　後周　太祖　宋　太祖　太宗　真宗　仁宗　英宗　神宗　哲宗　徽宗　欽宗　高宗　孝宗　光宗　寧宗　理宗　度宗　端宗　○金太祖　太宗　世宗　章宗　宣宗　○元太祖　太宗　定宗　憲宗　世祖　成宗　武宗　仁宗　泰定帝　文宗　寧宗　○明太祖　恵帝　太宗　仁宗　宣宗　英宗　景帝　憲宗　孝宗　武宗　世宗　穆宗　神宗　光宗　熹宗　毅宗　○我

東西廡名臣位置左の如し。

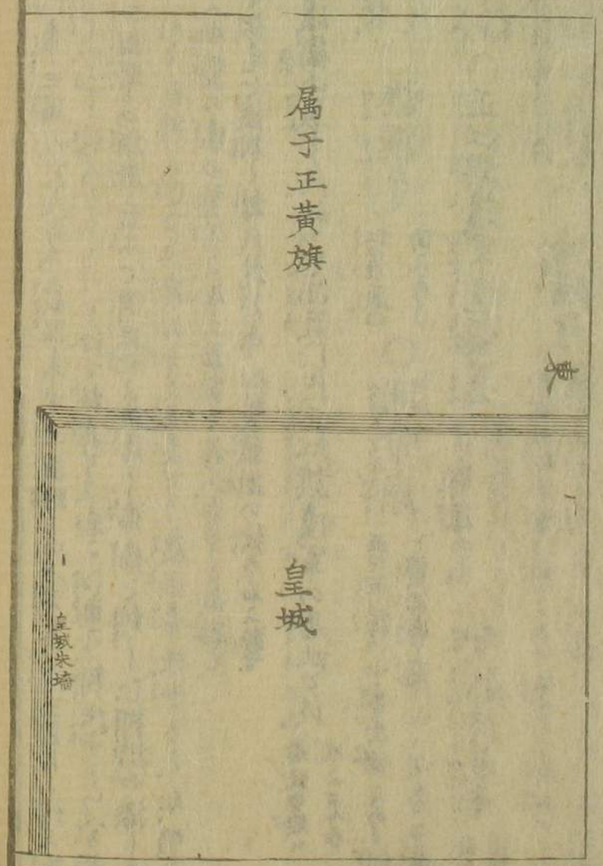
○弘慈廣濟寺　歴代帝王廟の北にあり。康熙年中王國賜として修し撥（撥書本のまゝ抜とすべし）三年を経て帰衲如意ゝ云ふ良工ありて重修す。三年を経て帰衲如意ゝ云ふ良工ありて重修す。帝を始め此像にうけ給ふ。御製の像の光輝寿特堂ゝと藤文字像ゝを織出し、秘府を経て勅額を賜ふ。

○以上皇城門内、鑲紅旗護軍統領署　正紅旗護軍の居址とす。右翼税署　西に胖襖の小衙門あり。○撫檀寺　紅羅廠の南さあり。○關帝廟　西に胖襖の小衙門あり。額と雙関帝廟ゝ云ふ。関帝の像二神あり。合せ祀りをなしてあり。○正紅旗護軍統領署　西に胖襖の小衙門あり。○聖祐隆長寺　西に胖襖の小衙門あり。○白塔寺　阿嘛西坊阜城門外にあり。寺の至る中を修して大殿の正面に釈迦牟尼仏の金像を安置す。乾隆帝御製の碑あり。又乾隆帝御書の心経四体の碑あり。御書の額あり。乾隆帝御書の碑あり。康熙帝御製の碑あり。又乾隆帝御書の碑あり。寺内の額甚多し。乾隆帝御製の碑あり。又乾隆帝御書の碑あり。寺内の額甚多し。乾隆帝御製の碑あり。又乾隆帝御書の碑あり。寺内の額甚多し。

正紅旗居址　正紅旗滿洲第三漢軍の正黃旗と界を接する西の馬快兒胡同の南より西は北小街より東は内城の北垣に至る南は鼓樓斜街に至る此旗の參佐官以下兵丁二万七百人ありと雖も其居址を詳にせず

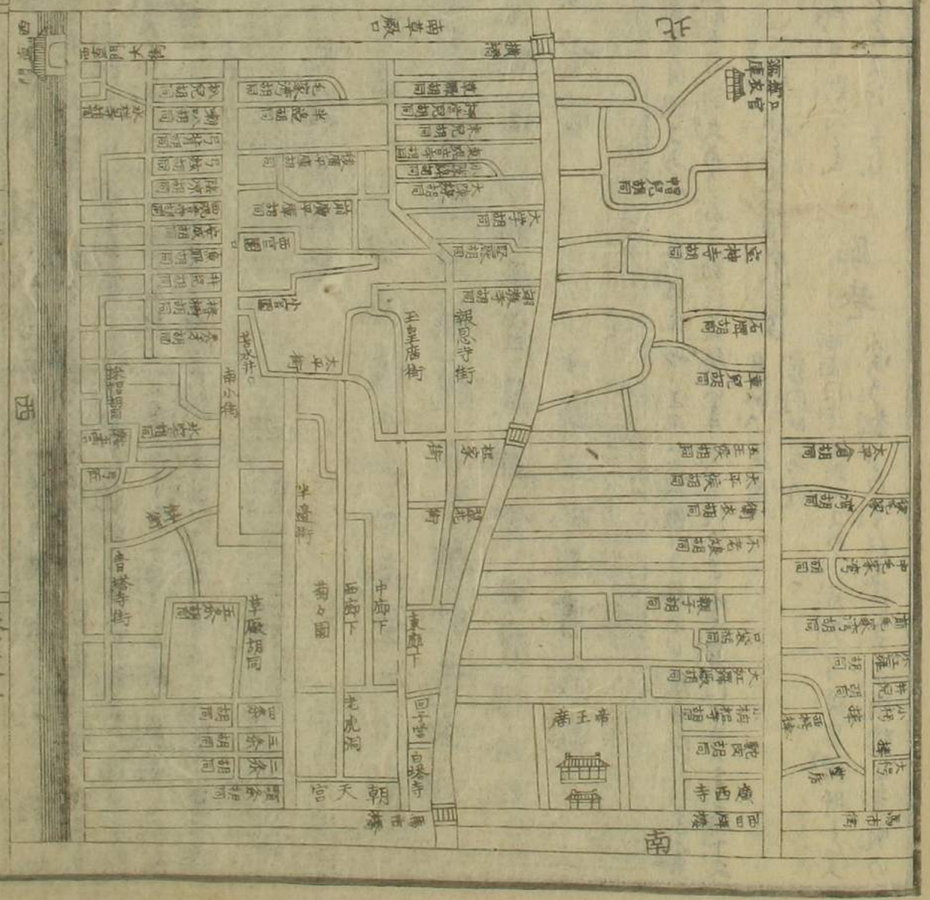
直門大街西の方より觀の如し　彰儀門の内より南は鼓樓斜街に至る此旗の參佐官以下兵丁二万七百人ありと雖も其居址を詳にせず

正黃旗滿洲第一漢軍の正紅旗と界を接する西の馬快兒胡同の南より西は北小街より東は内城の北垣に至る南は鼓樓斜街に至る此旗の參佐官以下兵丁二万七百人ありと雖も其居址を詳にせず



鑲黃旗滿洲第二漢軍の鑲白旗と界を接する西の馬快兒胡同の南より西は北小街より東は内城の北垣に至る南は鼓樓斜街に至る此旗の參佐官以下兵丁二万七百人ありと雖も其居址を詳にせず

鑲白旗滿洲第三漢軍の鑲黃旗と界を接する西の馬市橋小辺羅雅下胡同より西は北小街より東は内城の北垣に至る南は鼓樓斜街に至る此旗の參佐官以下兵丁二万七百人ありと雖も其居址を詳にせず



後又至元通宝の旧字を讀より帝號ひて宣く是至元ハ勝が年號なり佛子歳の元に今の治世を知
る此兆を現ぞることそ滅したる元の戒に希しおしぞくくる数まし時とろる限り也し遂に此塔を修造し
て旧躅ハ玉杵を鍛珠に石闕を布き蓋に華鬘とうけ塔身ハ珠網を纏ひ其制度乃坊なる者
罕なる荘厳なりし元塔の製ハ下廣く上狹きに出ずん此塔ハおのあやまりに上廣り下狹く頂ハ長く尖く
節く真朝り其上に銅盤を設けて羽をそ飾るの小塔を叢り今俸倶たるもなんて白塔と稱し諸
もべし辛未の年十二月十三日雷火に燒る。

雷火焚故宮白塔

數聲起蟄作聞雷驟落千山白雨来恐有怪
龍遭電取未應佛塔被魔災人傳妖鳥生謡
火誰覓胡僧話刼灰豈復神霊有遺恨冷烟
殘燼満荒臺

十洲平光亂書

〇朝天宮 阜成門の内、朝天宮衛にあり。明の嘉靖年中に此に斎醮し給へるの處日に也し宣宗憲宗の両帝御製乃詩文あり石に勒ス天啓六年火災にて至今ハ宮門は東廊下又ハ西廊下ゑるハ人る名のミ残りて纔く民の住居となれり。

〇正紅旗覚羅宗小学 阜成門の内。宮門口にあり。

阜成門 内城の西門なり元代平則門と云。明の正統同今の名にかへらる。

⊖**柳巷** 西直門並阜成門の間にあり若笑山石標宗禅師といふ人あり都下に生れて法を玉泉明聴に受明の

萬暦の始年柳巷に住居し世人其高徳を知る者罕なり一日梵僧来て笑岩禅師に見えて家を
ひろめ地を翻さまじくの秘掴をなして禅師と問答し禅師杖を以て地上に畫し諾て答ふ梵僧
即拝をなして起去る弟子怪しみ其故を問禅師の曰く是阿羅漢西天秘密の偈を答へと云諸
弟子疑ひ敢せざるもの也し嘗て雲棲の株宏といへる者人を遣りて問く吾宗師に投ぜん又笑岩禅師に柳巷に
往べつり敗屋数椽残僧数輩の老なりといへり遂に滋るにおよびて大徳諍ふるやぶると家に仕ゆる弟子僧二三
人の外絶て訪人なし其高き致思ひ見るべし今笑岩が撰希に其偈文の弟子天童密雲山雲棲因
澄昇漢月人の墓を作に西直門の外小西門にあり笑岩終る時年七十になり清新直心の弟子
ふかく其徳を仰ぎたまひ親懐に詣で礼をなし圓月の弟子に命じて私をもしめ給ふ
笑山岩が著ハ書南に収め
集あり今世に行る。

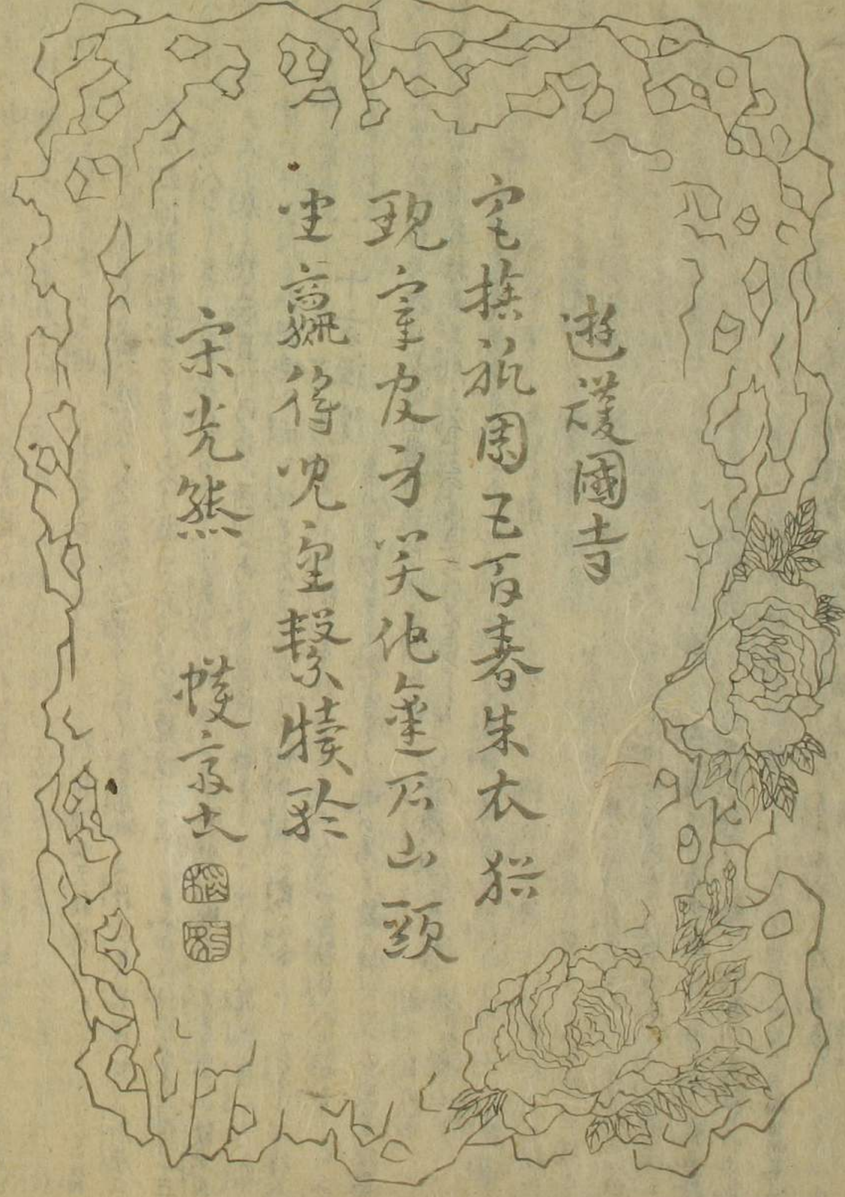
〇十方禅院 西直門小街観音寺胡同にあり其人婦で勧進て小留寺といふ 唐の貞観年中創建せり。明の馬之駿が詩に究在風光裸態
洸水木同慶易沿岸寺稍見著城山藏佛雖徐微逢僧即共
岡滝留無不可携興暮秋還其風色気色の清きを思ひ見るべし。

〇正黄旗官学 朝天宮の西。祖家街にあり。

〇寳禅寺 宝禅寺胡同宗国寺街にあり此地ハ元代の大慈華善慶寺の址なり明の内官廃僧と
いふ者此地を営みて居宅を建んとし附に地中より諸系石が撰したる善慶寺の碑を
掘出せり是に於てはじめて其寺址たるを知りて一寺を造立
せり此の朝廷に奏へて即宝禅の勅額をたまふ。

〇崇國寺 西尺屏接大街の東徳勝門大街の西にあり元代东西崇国寺なり此
寺ハ其西崇国寺なり舊元朝抵克抵桐延の宅地なり明の附大隆善護國寺と改め西番の僧大慶法王
領占班丹大覚法王著肖藏卜等を度し寺に居らしむ〇中殿三尊殿八楼ハ崇命殿あり殿の側に佛舎利
塔二あり又佛殿の前に二像あり老翁の相貌肅しく朱の衣を着せし像と老媼の風冠といひき
朱の帯衣を着たる二像なりしか其もゝへの抵克抵ま婦の像なりといへり毎月七日八日両日此寺に
市あり百貨つらなりて賣物がありけさまとを商市とす
群集せりもとを商市とす

康熙乾隆両帝御製の碑あり。元代明代の碑甚多し繁きをもんてこれを略す



過護國寺

宅接祇園毛吉春朱衣狐
現掌皮牙笑他釐石山頭
重贏得児童繫騏於
宋光然

棲霞老衲 印 印

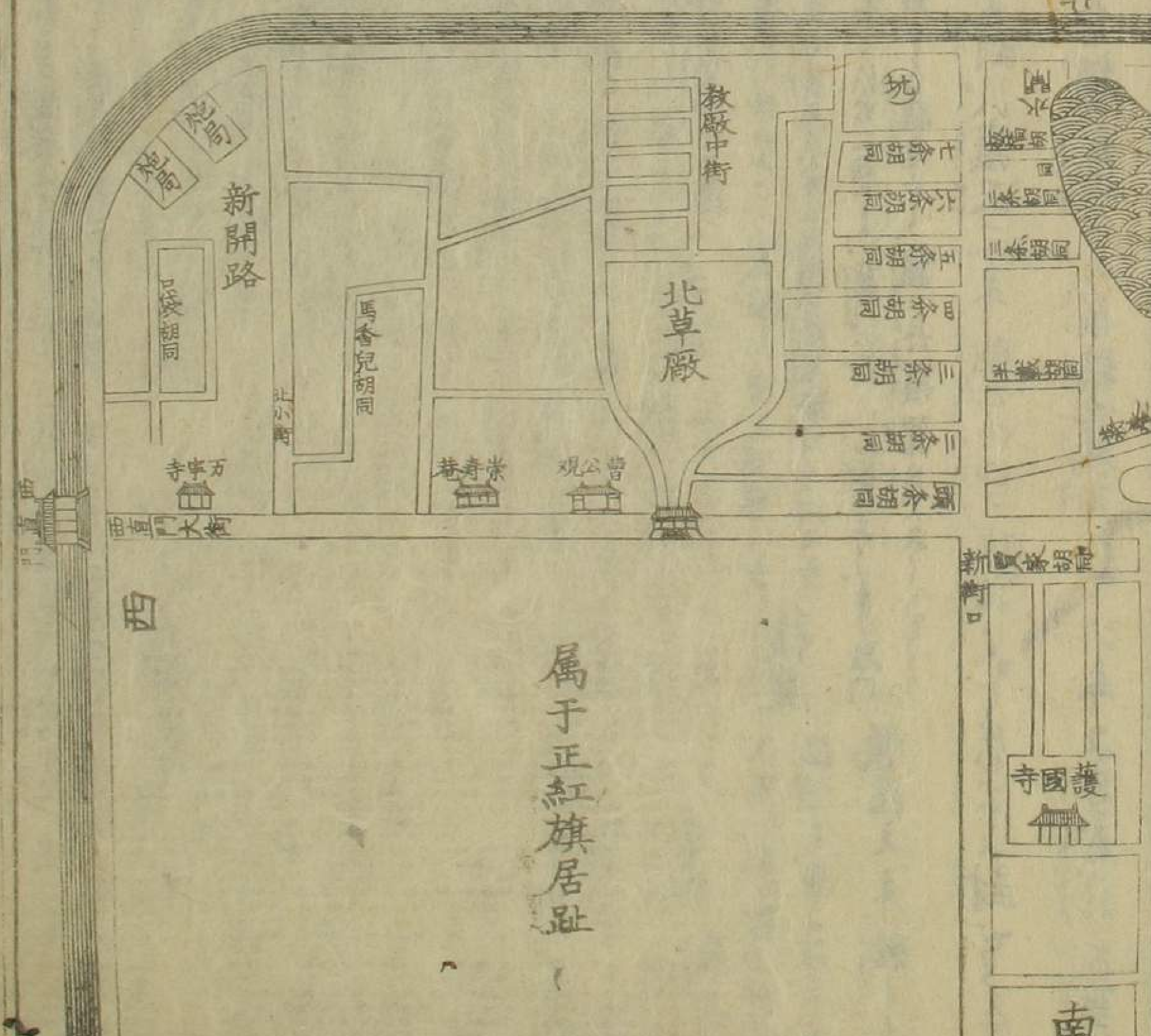
○以上正紅旗、玄武門内、護衛軍の厩舎なり。

○大徳真君廟　地安門の外、萬寧橋の北にあり。俗に火神廟と稱す。本年六月三日此廟と記せよとの勅創として今ありという。廟制、廟門一間、南向。石欄あり。正殿、三間、南向。石階あり。殿の前一面に欞星門を設く。元門の樓あり。三間の閣なり。其後祠樓の十二間、二層、南門の四面、石欄あり。後の東帝殿五間、北向。前に同じ。外は圍墻あり。御製の碑あり。其後の水直下なり。碑あり。碑陰を建て

地靜烟雲滿開軒水上樓泛舟丹竈深
竹護菜苗磨火遠時高帝水乞白
有齢馮客手古夢能由指點揮

右李鍊師水竹軒詩　西河子出筆也

至るまで漢軍の参領に属せる
佐領十二人の居址とし、新街口
より北に向ひ四條胡同の東にまで
至るまで漢軍の四参領に属せ
る佐領十人の居址とし、四條胡
同の東より城根の羽林営にい
たるまで漢軍の五参領に属
せる佐領九人の居址とし、凡漢
軍正黄旗の参領五人佐
領五十人、軍丁一万五千人なり。
三軍合して凡万九千八百人
なり。

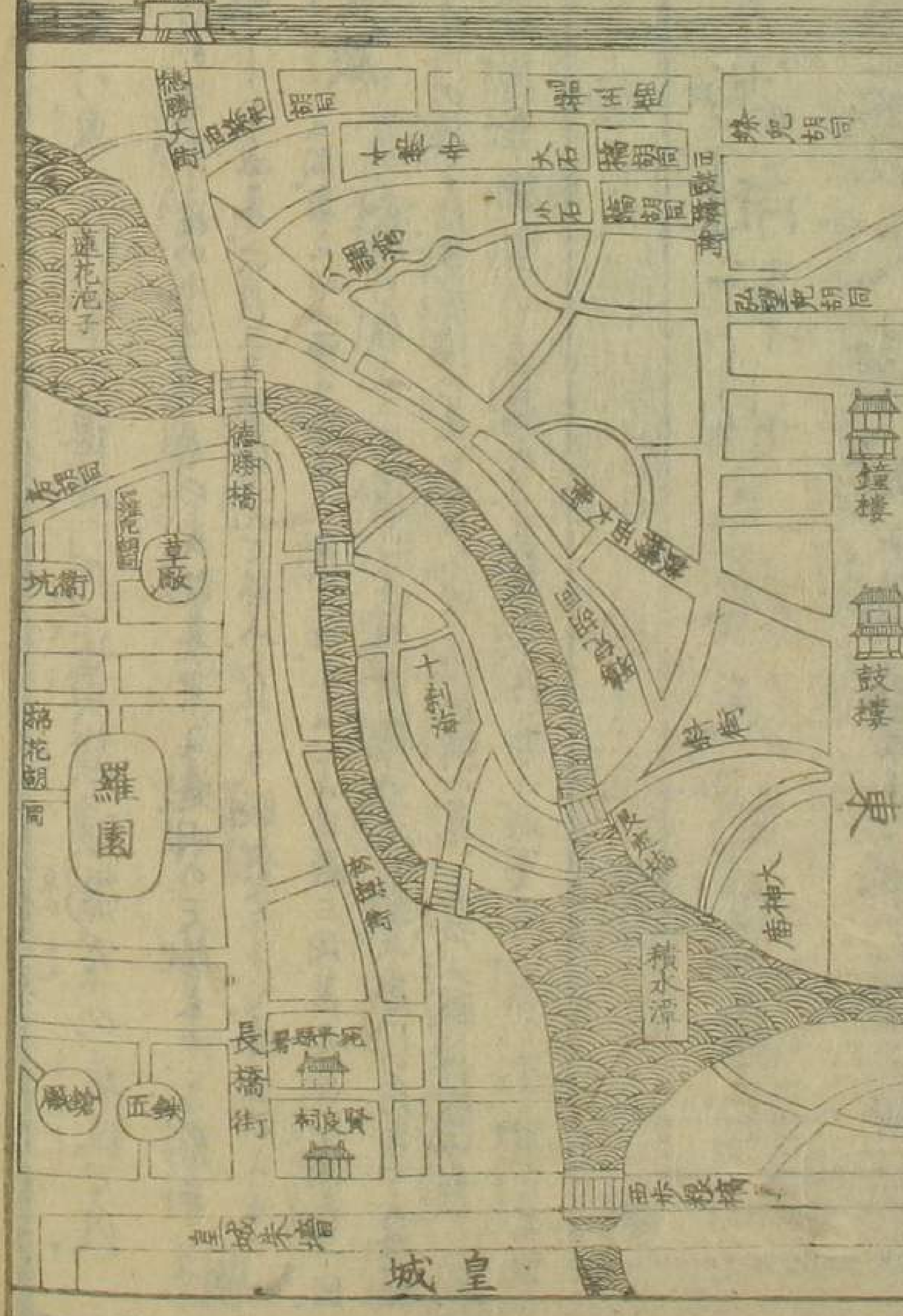


正黄旗居址

満洲蒙古漢軍三の正黄旗は鼓楼大街より西に向ひ恭王廟の南にて内城の根に至る。満洲の頭参領の属せる佐領十九人の居址とし、その恭王廟より西に向ひ大街まで行ひ八間湾の南にいたるまで満洲二参領に属せる佐領十九人の居址とし、八間湾の南により徳勝門を南に過ぎ徳勝橋にいたるまで満洲の三参領の属せる佐領十八人の居址とし、鼓楼大街より根後橋を西に向ひ李廣橋より徳勝大街にいたるまで満洲の四参領の属せる佐領十八人の居址とし、松樹街の北口より恭王廟にいたるまで満洲の五参領の属せる佐領十八人の居址とし、凡満洲正黄旗の参領官五人佐領九十二人、軍丁二万七千二百人なり。

○松樹街の南口より西に向ひ徳勝橋街をゆき過ぎて弘善寺胡同の西口にいたるまで蒙古の頭参領の属せる佐領十二人の居址とし、弘善寺胡同より徳勝橋にいたるまで蒙古の二参領に属せる佐領十二人の居址とし、凡蒙古正黄旗の参領二人佐領二十四人、軍丁七千二百人也。

○護国寺街より綿花胡同の南口羅園胡同の西にいたるまで漢軍の頭参領の属せる佐領十人の居址とし、羅園胡同の西より棉花胡同、衛房胡同東の胡同にて漢軍の二参領に属せる佐領十人の居址とし、蔣養房の東口より西口まで



○大覺寺　御小祠あり。東ろう。東ろう後殿あり。雍正帝・乾隆帝・御製の碑あり。又周圍茶王両殿の額あり。乾隆帝の宸翰なり。○史祠廟　地安橋の小祠あり。廟あり。像あり。○三旗參領署　地安門の北に在り。

積水潭　積水の中外海と云ふ。一の都城の水門より入て積水潭と通ず。公しそこより通河と流ぐ。こゝより後て積水潭覧勝碑と云ふ。碑亭南と十刹海と云ふ。其の東南と蓮華池あり。門海の西にあり。東の方海のやう流ぐ。納凉・釣魚の勝地なり。小舟と棹の漕ぐ。

○漢壽亭侯廟　地安門の西にあり。

名入級未詳。

廟　三間。西向。

御碑亭　本殿の西にあり。

○乗王廟　地名入級未詳。

廟　三間。西向。

○後殿　三間。本殿の西にあり。

猶本殿と同じ。

門　三間。南向。

○碧水橋　地安門の西にあり。

○蓮華池　積水潭覧勝碑と云ふ。其の東南と蓮華池と云ふ。

門　三間。南向。

○恵安橋　地安門の西にあり。

○恵安門　地安門の西にあり。

○順治九年勅建　忠義祠　順治九年勅して忠義祠を建立す。

○雍正三年開聖を帝に封じ雍正帝の御書也　雍正三年開聖の曾祖父を皇公に封ぜらるゝ後殿の中に祀る。忠賢天人の額あり。雍正帝の宸翰也。乾隆記十六年に忠義祠と改む。

開聖を帝に封ぜらるゝ議を忠義と改む。

○此廟と白馬廟とふたつ。むし暴客民葬埋處

又一説に此の英帝爰を関帝の白馬と祀る。

○賢良祠　白馬廟の西にあり。東向。

○崇忠念舊　三間。東西の廊各三間。東廊の南の端正殿　三間。南向。

○御碑亭　二門の左右各一あり。元正殿の門内者三間。左右各一あり。

○旌勇祠　地安門の西にあり。

○元王公大臣の國家に勲績ある者を祭る。

○半死寺　国初の創建の年月詳ならず。

○宛平縣署　地安門の西にあり。

○廣化寺　地安門の西にあり。

○龍華寺　地安門の西にあり。

○銀錠橋　地安門の西にあり。

○通玄橋　地安門の西にあり。

○恵安橋　地安門の西にあり。

龍華寺看新竹　高士奇

拂檻清陰細覆簟綠影深露香生靜夜風聲
敲禪心解籜經春粉抽條近涵秋渭川子猷宅
知我日披襟

○心華禪寺　龍華寺の西にあり。一名小龍華寺。俗に八百尼の即ち禅院なり。内陣の本尊は

とう。今茅ぶきなれど建仁寺派の禅刹にて、方丈十畝余、室三十餘を擁せるの巨寺なり。○王皇廟　○小藥王廟　大概みな

同じ。○雙峯寺　○妙顯寺　○乳橋　○佛寺　德勝

寺とともに西を慶流。

門の東八町にあり。俗に釋迦堂と稱す。

又雍正御書の碑文あり。　寺内又祖像の

像を置く。殿の額に雍正乾隆二帝の御書なり。

德勝門　元代健德門と稱す。

内にあり。西の即接水澤にて、濯水橋のもと注ぎ出

のところへの祖業ともうす。唯古橋のみ

僅かに殘れり。晉書謝石傳に、石與謝玄等

拒苻堅於淝水、堅衆奔潰、聞風聲鶴唳、皆以爲王師已至、

堅軍既敗、石等振旅而還、收其器仗、軍資什物、不可勝計、

堅中流矢、單騎走淮北、收衆復振、自號而還、

とあるの地にて、淝水の正統の戰ひの名殘なり。

德勝橋　德勝門の西にあり。

○正黃旗滿洲都統署　德勝門内にあり。

○正黃旗滿洲都統署　德勝橋　○水關

德勝門の西にあり。

○觀音菴　德勝門の西北にあり。

○淨業寺　○古平菴

冠して入れり。其あたりに風あり。

乾隆帝御製の詩碑賢び御書の額あり。

場と。

城門の外の副城を甕圍といふ内城九門皆甕圍ありて東直西直の二門の甕圍の形方なり外七門の其形圓し

西直門

門樓

結夏禪林迥無門可閉鄰湖光依
北閣爽氣借西山日永諸天靜鐘
清初地閒新辭魔眷屬定入夜
雲還　明顧錫疇

在土高雲溟

○龍王廟　新御口よあり。雍正七年勅して建。乾隆十八年重修す。○廣濟寺　日本よあり。明の正德九年、極樂寺と稱す。明勅して建つる所と。明神二あり。西直門内、新御口よあり。俗曹公觀と稱す。明の張璞の建つる所と。乾隆帝御書の扁額并に御製の詩碑あり。乾隆二十三年勅して修す。○崇元觀　口よ掛樸の上よ三清殿燒の正殿を置く。乾隆十年四月一日より十日迄廟市あり。○正黃旗護軍統領署　西直門の内。後寬敞なり。○正黃旗覺羅宗學　西直門の内小街。○正黃旗覺羅都統署　西直門の内。○永泰寺　○多佛寺　○萬壽寺　俗よ西直門の内と云ふ。

西直門　内城西の北門なり。元代、和義門と稱す。西直門より城中よ入る。水關の弘治十年の建一の鎖鑰なり。明の正德の頃、劉瑾の專横の時、瑾の黨羽の軍士、いづれも驕奢の者多し。城中の庶民、物を販ぐ者あれば、強陽の馬ども、その人のごとく裝飾の物を負ひ入れ、又何ぞ奢りを人に列の若き語て曰く、盤の飛するや、盤纏の使人のごとくなりと。皆もつぱら驕奢を競ひ、常にて城中頻よ火災あり。幷に都の暑し燥すき。

内城北壁右よ託とでし、貝親王公侯貝勒貝子の府并に悉くこれを賜せり。

又廟祠寺觀の屬も、幸實の託をべきものとべて除きて載せず。

唐土名勝圖會卷之三終

水越右高田
又新兵衛
堅吉日昌